
終わりのなき遊戯曲

にゃんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりになき遊戯曲

【Nコード】

N3478D

【作者名】

にゃんこ

【あらすじ】

前作『終わりになき闘争曲』での『ラグナロク』が終わっていくらか経った。転入生の奏も学園生活に慣れ、任務もちよくちよくあるが大きな事件もなく平和な日々を過ごしていた。今作では短編集をお送りします。何気ない日常や気が向けば他の作品とのクロスオーバーなんかを導入予定。前作『終わりになき闘争曲』や前々作『守護すべきもの』を先に読むとより楽しめます。

第1話 「正月」 (前書き)

あけましておめでとうございます。
今年もよろしくです。

第1話 「正月」

「あけましておめでと〜!!」

12時になろうとしている今日この頃、1階のリビングに来ての柅^{おん}音の第一声がこれだった。

ようやく起きたようだ。

「ああ、おめでと」

「おめでとうございます。お姉様」

先に降りてきたオレと奏^{かなで}がそれぞれ返す。

そう今日は1月1日、元旦だ。

まあそのセリフも年明けてすぐに聞いたから2回目になるんだが。

「おお！見事なおせち料理だねえ！これだけ作れば立派なお嫁さんになれるよ」

「ありがとうございます」

「つかお前も作っただろうが」

「まあまあ、そこは言いつこなしで」

ちなみに朝飯はおせちではない。

一応朝昼と食える量はあったのだが祢音が朝起きてこなかった。

オレが食おうとすると奏に「お姉様が降りてくるまで食べないで」と止められる。

結局朝飯はパン一枚。ああ、餅も食ったっけな。

で、ようやくおせち料理にありつけるわけだ。

昼飯を食べ始めてしばらくすると祢音が言った。

「そういや昼からは千春^{ちはる}たちと初詣に行くんだよね？」

「ああ」「はい」

それにオレと奏が同時に答える。

昼からに予定しておいてよかったよ。

朝からだったら祢音が寝坊していただろうからな。

初詣は元々大晦日の夜から元日の朝にかけて参るものなのだが案外ユルイ島で神社も気にしてないようだ。

というわけで集合場所の水月公園^{みなつき}へ……………

「よっ」

水月公園噴水前では既に新田康宏、にったやすひろ 安井祐介、やすいゆうすけ 新山千春の三人が来ていた。にいやまちはる

祢音と奏と千春はそれぞれ振袖姿だ。

こうゆう時男だと着なくていいしメンドくさくなくていいなと思う。

「んじゃ、全員揃ったことで。行くか!」

「おお、すいてるすいてる」

康宏の言う通り神社がガラガラだった。

参拝客も数人、てか4人、数えるぐらいしかない。

おみくじや破魔矢を売る巫女たちもなんだか暇そうだ。

ちゃっちゃと参拝を済ませ、おみくじ開封。

「やったあ! 私大吉!」

「私は中吉です」

「私もだよ」

ちなみにオレは末吉だ。中途半端だな。

さて、あいつらはと

「ぼくは吉だったよ」

そういや末吉と吉ってどっちが上なんだ？まあいい、問題は康宏だ。

「オレは…大凶っだあああああ！！」

さすがオチ要因、見事大凶を引き当てやがったな。

さて、オレたちは如月家へ

「まったくだねえ」

「そうですね」

「まったくですなあ」

祢音たちは特別に用意されたこたつに入り、机に頬をつけている。

オレはというとダイニングの椅子に座り元旦恒例の特番をぼーっと見ている。

ちなみに康宏と祐介は揃ってじゃんけんに負け、買い出し中だ。

「ただいま」

帰ってきたみたいだな。

「最後のポテチもらったー！」

「させないよ！」

「お姉様、はしたないです」

「オレ、阪神巨人正月しか見てねえよ」

「普段はあんまり見ないよね」

「おせち料理まだ残ってるよねー！？」

「ええ、少し」

「じゃあそれみんなで食べよ！」

「あゝあ、お菓子も食べ尽したし、おせちも食べたし、

千春たち帰っちゃったし、やることないし、眠いからこのまま寝ちやおうか」

おいおい、それじゃあ話が進まねえぞ。

「だって正月なんてそんなもんでしょ」

「勝手に人の思考を読むな」

「今日はこうしてまったりと過ごしましたとき、終わり」

「って終わらせるかー!!」

「じゃあどうするんですか？」

「あ、そうそう。忘れてたよ」

ぐったりとしてた祢音が急に体を起こし、オレを見る。

「お年玉もらってないよ！」

「誰から？」

まあ予想をつくが。

「お兄ちゃん」

やっぱりか……

うなだれるオレに両手が差し出される。

「私と奏ちゃんの分。1万円から受け付けております♪」

「ふざけるな。オレにそんな金はねえ！」

「ウソツキ。任務の報酬で結構もらってるでしょ」

「お前たちも一緒だろうが！」

「それとこれとは話が別だよ」

どこが別だ。

とは思いつつ結局渡すことに……ならねえよ。

「では私から差し上げます」

と用意していたかのようにネズミが描かれたかわいいお年玉袋に入れた金を渡す。

「正月にはこれを渡すものだとは本に書いてありました。1万円とまではいきませんが」

「ううん。誰かさんと違って、くれるだけで嬉しいよ」

祢音はそう言ってチラリとオレを一瞥し

「……はあ」

とため息をつく。

そんなことしてもやらねえぞ。

「お、そうだ。お年玉とはいかねえがいい物を持ってきてやろう」

「ホント!?!じゃ早く持ってきて!」

「おう。ちょっと待ってろ」

そしてオレは2階へ

「これだ」

「なんか見たことがあるんだけど……ってこれ私の冬休みの宿題じ

「やん！！」

その通り祢音の分の冬休みの宿題（全部）だ。

「オレも奏も終わらせたのにお前だけ手つかずだろ？ 暇なこの時にやってしまえ」

「そーいやお姉様が勉強してる所冬休みに入ってから見たことありませんね」

そうそう、どうやら奏もノってくれるようだ。これで敵は祢音のみ。

「いや、そういうのは最後の日にやるってのが決まりでしょ」

無茶な言い分だな。

「そういうわけにはいかないな。ちゃっちゃんと終わらせろ」

「えー！？」

んなわけでオレたちの元旦は過ぎていくのであった……

「って私がオチなお！？」

第1話 「正月」 (後書き)

えゝ完全新作を考えつつ短編集を書く予定でしたがなあゝんにも思いつかないのでしばらくこれ1本で考えていきます。

第2話 「柰音の体験秘話」

「これは私たちにしか解決できない問題よ！」

1月のある日、そんな柰音の言葉で立ち上がった独立問題解決機関、その名も………！

『如月柰音探偵事務所』
きさらぎねおんたんていしむしょ

事の始まりはこうである。

水月島みなつきじまにある水月学園では、ある噂が学園を包み込んでいた。

「ねーねー聞いた？ 昨夜の話」

丁度HRが終わった後の休み時間、

柰音ねおんは隣に座る兄である無月むつきの席へと向かった。

ちなみに兄妹だが色々あって同じクラスである。

（その辺は本編である終わりのなき闘争曲シリーズを読んでくれ）

「ああ、嫌でも耳に入ってくるよ」

その無月は本当に嫌そうに言う。

話題の少ない水月学園では噂は広まりやすい。

それが幽霊なんてものだったらなおさらだ。

「その噂については私も聞きました」

続いてもう1人、奏かなでがやってくる。

ちなみに彼女は2人の妹なのだが、これまた同じクラスである。

（くどいようだがその辺は本編である終わりのなき闘争曲シリーズを
読んでほしい）

「おもしろいよね、幽霊なんてさ」

そう言って祢音は手を胸の前まで持ってきて手首をだらんとさせる。

「どうせ誰かのいたずらだろ」

無月は素気なく言い、授業の用意を始める。

だが祢音は違うようだ。

「でも何人も驚かされたりいたずらされたりしてるんだよ？」

とわくわくさせているようだ。

幽霊なんてものは信じない人が多いのだが、

何人も幽霊の仕業と思われるいたずらをされているので、やけに信
憑性が高い。

しかも七不思議があるとまで言われてくる始末。

キンコンカンコンコン

授業開始のチャイムが鳴り、話は一時中断した。

そしてその授業後の休み時間になったところのことだった。

突然、祢音が自分の座っていた椅子の上に上履きを履いていながらにして登り始め、

「私、この事件解決してみせる！『じっちゃんの名にかけて…』なんてね！！」

とクラスの視線を浴びながら、高らかに宣言した。

ここからは祢音SIDEでお送りします

昼休み、私とお兄ちゃんと奏ちゃん、

あと友達の千春ちはるに新田にったくん、安井やすいくん

お昼ご飯と一緒に食べようと誘って屋上にいました。

「ねー祢音、ホントにやるの？危ないんじゃない？」

千春ちゃんは私の顔を心配そうに見てるけど問題ない！

「大丈夫だって！私に任してよ！」

と胸を張って見せる私。

「幽霊探しなんておもしろそうじゃん。オレも仲間に入れてくれよ」

って新田くんは言う。

「ダメ。私とお兄ちゃんと奏ちゃんでするから。適任なんだよ」

そう、こーゆーのは私たちがやった方が適任なんだよね。

実は私とお兄ちゃんと奏ちゃん、魔法使いなの。

しかもほとんどが魔法使いで構成される組織の上位に入るほど腕も立つんだから！

だからこんな奇妙な現象も解決できることが多いんだ。

これは千春たち一般人には言えない秘密♪

「何で無月はいいんだよ！？こいつ一番ノリ悪いだろ！」

新田くんの箸の先には黙々と私と奏ちゃんが作ったお弁当を食べてるお兄ちゃん。

「確かにノリは悪いし口悪いし素直じゃないけど、

こーゆー時は一番頼りになるんだよ♪ねー、お兄ちゃん♪」

と、私はお兄ちゃんに抱き着きました。

そんな私を見て、ひとまず食べ終えたお兄ちゃんは

「だー、昼飯食ってる時くらいは離れろ！祢音ー！」

って言いますから。

「てへっ♪」

私は舌をちよつと出す。

「てへっ、じゃな〜い!!」

一方、千春はと言いますと…。

「はぁ〜…（溜息を吐く）。

祢音、そろそろ兄離れしなきゃいけない年だよ…？彼氏もできてないし」

「という千春もできてないんだよね、彼氏…」

ニヤニヤと笑って千春を見ると

「はいはい…そうですよ」

千春はかわいい顔で拗ねて、ソーセージを頼張るのでした。

【解説】

実は柰音には浮いた話はない。

見ての通り兄の無月にベツタリだからである。

兄妹が同じクラスにいるというのは滅多にないケースだ。

だからこの事を知らない者がたまに柰音に釣られてクラスまで様子を見に来ると、

柰音と無月のやりとりを見て彼氏持ちかと勝手に思い込み、諦める者も少なくない。

「じゃあねーまた明日」

「気をつけてよね！」

「わかってるって！」

放課後、千春たちと別れて私とお兄ちゃん、と奏ちゃんは家に帰りました。

そして夜、ついに私は立ち上がった。

「さてと!!」

私は気合を入れてお兄ちゃんと奏ちゃんの前に立って、

「お兄ちゃん、奏ちゃん、行くよ!」

と、叫ぶと

「はいはい。んじゃ行くか」

と、お兄ちゃんが

「わかりました。お姉様」

と、奏ちゃんが同時に言いました。

あとね、それからね…。

言うまでもないと思うけど、メデスはお留守番なの。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「夜の学園ってやっぱり不気味だよねえ」

学園に侵入したのは午前0時。

先生たちは既に帰った時間だし、

この島は犯罪なんて滅多に起こらないからセキュリティなんてないし、安心して探検できるの。

「…だーっ！歩きにくいから引っ付くな！てかお前がリーダーだろ！前を歩け！」

お兄ちゃんはそういうの信じない人だし、

奏ちゃんは何も動じなさそうだから頼もしいんだけど、

でもやっぱりまいち盛り上がりには欠けるなあ。

夜の学園で幽霊探なんて、最高のシチュエーションなんだけどなあ…。

「そもそも言いだしっぺのお前がビビるな！怖かったら来なけりやよかっただろ」

「いやあ、まさかここまで不気味だとは思わなかったしさあ。それになんか空気生暖かいし」

「まあいい。で、どこ行くんだ？」

「そうそう、まずはやっぱり音楽室だよね」

「…？ どうしてやっぱりなんですか？」

そっかあ、奏ちゃんはこういうの聞いたことないんだっけ……。

やっぱりこういうことはお姉様である私が教えていなくちゃいけないよねえ…。

「そうだね、学園の怪談というのがあってね。」

簡単に言うとそのそれぞれの学園にまつわる怖い話のことなんだけど――

ガラガラガラガシャーーン！！

「きゃあああああああ……！！！！」

「……うるせえっつ！！」

ゴツンッ！

お兄ちゃんが私の頭に鈍い音を立てさせました。

「あいったあっ！」

肘（かなあ？）で頭を殴られてしまう私…。

ズキンという痛みを両手で頭をこすりながら、ちよつと私…涙目…
…（泣）。

「ゴミ用具の扉が開いて、んでほうきとかが倒れたただけだ。あと抱きつくな。苦しい」

お兄ちゃんは今私を振りほどこうとして私の腕を掴むけど、私はさらに力を込めて抱きつく！

「大丈夫？お姉様…？」

「うん……。これヤバイよ。絶対幽霊の仕業だよ！もう帰ろうよ！」

私は精一杯悲痛な声でお願いするけど

「まだ一つも調べてねえだろうが。さっさと音楽室行くぞ」

お兄ちゃんはそう言って私の気も知らないで歩き出すの……。

「いやだああ！わ、わた……。私……。もうどこにも行きたくないよお……！」

と、叫ぶとお兄ちゃんが

「うるせえ！リーダーはお前なんだがらな！リーダーがビビってんじゃねえ！わかったか！」

と怒鳴って、私をずるずると引きずって音楽室に……。

今思ったんだけど、なんかお兄ちゃん楽しんでない？

「そんなわけで音楽室、到着したんだけどさあ……。あれって絶対おかしいよねえ？」

絶対おかしいって……。ピアノが勝手に鳴ってるしい！！

「おお、すげえな！」

って言ってる割には冷静だねえ！お兄ちゃん！

「あの絵は動くんですか？こっちを見ていますが……。氣になりますね……」

余計なことに気がつかないでよ！奏ちゃん！

「じゃ、次行くか」

お兄ちゃんは再び私の体を引きずって保健室にいい……。

「ねえ、もう帰ろうよお……（泣）」

「ん？向こうから誰か走ってくるぞ」

「誰かって……。！？いやあああああああ！……！！」

私は無我夢中で銃を放ち、気がついた時には穴だらけの人体模型が。

「あゝあ、今回はそんなのナシって予定だったんだけどなあ」

「だってえ…」

…グスツ。

…怖かったんだもん。

ザッザッザッザッ！

後ろから無茶苦茶足音が聞こえてくるんですけど……………。

「今度は何…!?!?」

振り返った私の視界には何人もの人体模型が！

「もうダメえ……………。ばたんきゅ……………」

その瞬間、私の意識は途切れてしまいました……………。

(未公開シーンその1が入ります。そのシーンは下の方に)

【AM 8..35分】

「ん……？うん…、人体模型が迫ってくるよ。…って、アレ…？ここは私の部屋…？」

再び見えた私の視界には見覚えのある壁がある。

あと奏ちゃんの顔も見えてる。

「お姉様、大丈夫ですか？随分うなされてましたが」

額が冷たいなあ。

（私は右手で額を触ってみる）

これは冷えピタ？

上半身を起こすと確かに私の部屋だった。

日差しが眩しい、どうやら朝みたい。

あの時気絶でもしちやったのかな…？

ガチャ！

「よう、起きてたのか」

ドアからお兄ちゃんが入ってきました。

手にはプラスチックの桶があるのが見える。

「う、うん……。ひ…、ひえ…、ひえっくしょい！」

「まだ治ってないみたいだな」

ああ、寝ぼけてたみたいだけどようやく思い出したよ。

そういえば私、風邪ひいてたんだ！

…私がみんなとお昼ご飯と一緒に食べたり、

午前0時に私とお兄ちゃん、奏ちゃんの3人で夜中の学園に忍び込んだ

あの出来事も全て夢だったんだ…って考え直したんだ。

やけにリアルに感じたけどね。

「夢オチだったんだね……。なあ〜んだ、それなら安心だね♪」

（なんであんな夢を見たんだろう…？

もしかして、私の心のどこかにいつかこうなってほしいと思う感情があったのかなあ…。

よくわかんないや。怖かったけど夢を思えば案外楽しめたし、そこは深く考えないでおこうかな…)

「…夢オチ？」

「いや、独り言だよお」

私はポフツと音をたてて横になった。

(ここにも未公開シーンその2が入ります)

☆未公開シーンその1★

ザッザッザッザッ！

後ろから無茶苦茶足音が聞こえてくるんですけど……………。

「今度は何…！？」

振り返った私の視界には何人もの人体模型が！

「もうダメえ……………。ばたんきゅ……………」

そこで私の意識は途切れたあ。

柰音が意識を失ってしまったので、ここからは無月SIDEでお送り致します。

「おい、柰音！しっかりしろ！言い出しっぺのお前が勝手に意識を失うんじゃないよ！」

オレは柰音の頬を何度かビンタするが、柰音は意識を失っているよ
うなのか全く動じる気配がしない。

「ちっ…、柰音がこんなじゃあ、今日はもう無理みてえだな。

せっかく用意した企画だったんだけどなあ…」

オレが人体模型の集団を見ると、そいつらは今まさに煙のようにゆ
らめき、姿を消す所だった。

実はこの一連の事件、オレと奏が仕向けたものだった。

柰音は、年末年始に相次ぐテレビの特番の中で、幽霊やらUFOな
どのミステリー物や、

探偵物のドラマをやっていたのを見て、影響されていた時があった。
それで最近「うちの学園にも何か起こらないかなあ」とぶつぶつ呟
いていた。

そしてある日のこと。

突然奏が、

「手伝ってくださいませんか？」

と言いにきた。

奏が言うには最近退屈そうにしている柰音を楽しませる企画を作り上げたから、

それを手伝ってほしいというものだった。

奏の幻術を使い、たまたま夜にこの学園に來た生徒に幽霊を見させ、柰音に探検させようという企画だった。

オレの役割はその間奏に付き合ったり辻褄つじつま合わせをやったり、というものだった。

普段はメンドクさがるオレだったが、最近柰音をいじったりすることもなかったので嬉々（きき）として参加した。

ちなみにメデスは仲間外れだ。柰音の状態は知っているが、この企画のことは何も知らない。

そのつもりだったのだが夜にたまたま学園を通りがかり、魔力を嗅ぎつけバレてしまった。

まあ知られたものの直接参加はしていないし、辻褄合わせに協力させたからその方がよかったかもしれない。

「少々刺激が強すぎたようです。結果的には、楽しんでもらえたように私は満足です。」

奏は軽々と祢音の体を背中に背負う。

「さて、後は後始末だな…」

「メデスに風邪をひかせて、その影響で悪夢にうなされてた。ってことにするんですね…?」

一息ついてから奏は

「わざわざ風邪をひかせるのは私自身、気が進みませんが…」

と言った。

「問題ないだろ。1日で治るぐらいの重さにするし、明日は土曜だ。

部活はオルタナティブ（如月兄妹が属する魔法使いたちの組織。詳しくは今までのシリーズ参照）

に入って任務があったせいで全然参加できなくてやめたからな。2日休める」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「…ふ・ざ・け・ん・な!! オレの愛しの祢音ちゃんに風邪をひか

せるだあ!?

んなことできるわけねえだろ!!…ああ!?

家に帰って早々メデスに怒鳴られる。

このことだけはメデスには話していなかった。こう言ってくるってわかってたしな。

「ほらほら祢音のためなんだよ。もうこれしか誤魔化せる方法ねえんだからさっさとしてくれ」

「……仕方ねえなあ。ほれ」

メデスが手をかざすと、気絶する祢音の周囲だけ一気に気温が下がる。

しばらくすると思い通りに風邪をひいた。

「…あとは2階のベッドで寝かせるだけだな」

★未公開シーンその2☆

「いや、独り言だよお」

私はポフツと音をたてて横になった。

（無月SIDE）

祢音のふてくされた寝顔を目の当たりにしながら、

「ふう…、なんとかごまかせたな」

と呟く。

「案外お芝居はお上手なんですネ。」

それにしても……お姉様ほどの魔法使いに気づかれずに魔力を使うのは疲れますよ」

「そうかもな。知覚しようと意識したオレでも感じ取るのは難しかったからな。」

奏はうまいよ、魔力のコントロールが。不器用で力任せなオレには無理だわ」

「あ、ありがとうございます……。」

お、赤くなってる。まあ褒められることなんて滅多にないからな。特にオレからは…。

「まあ、これで祢音は100%夢だったと思うだろ」

「お姉様にはお気の毒ですけど、仕方ありませんわね…。」

この際ですし、今更本当のことをお話するわけにはいきませんしね…」

「…そうだな」

オレは桶を棚に置き、柵音の部屋の窓越しに外を見詰めていた。

その日以降幽霊を目にする者がなくなるどころか、噂も一切なくなつた。

そしてたまに首をかしげる柵音を見て、オレはニヤニヤ笑うのであった。

もちろん、気づかれないようにそつとな。

第2話 「祢音の体験秘話」 (後書き)

感想&評価、お願いします。

第2話外伝（前書き）

今回は本編にある設定がプラスされています。

第2話の真の物語とでも考えてくれればいいと思います。

注意

><は、本編のもの、

○は、幽霊時の祢音の感情を表しています。

第2話外伝

【2008年1月某日】

【AM08..00分頃】

（「うっ…、こ、ここは？」

私は、ゆっくりと目を覚ましました。

私が立っていたのは、どこかの学校の廊下でした。

「うう…、私どうしてこんな所にいるの…!?!」

私は自分の身体をよく目を凝らして見てみました。

私は、自分の身体が半透明になっていました。

「…これ、もしかして幽体離脱^{ゆうたいりだつ}…!?!」

私は幽霊のように、宙を浮いていました。（

「…じゃあ、もしかしたら!」

（皆さん、始めまして。

私は柵音ねおんと言います。

これから私を中心に話を展開していくので、宜しくお願いします。

さて…、自己紹介も済んだし、移動しますか…。

私がやってきたのは、本来の私がいる教室でした。

案の定、私はそこにいました。」

「これは私たちにしか解決できない問題よ！」

1月のある日、そんな柵音の言葉で立ち上がった独立問題解決機関、その名も……。

『如月きさらぎ 柵音探偵事務所ねおん』

事の始まりはこうである。

水月島みなつきしまにある水月学園では、ある噂が学園を包み込んでいた。

「ねーねー聞いた？ 昨夜の話」

丁度HRが終わった後の休み時間、柵音ねおんは隣に座る兄である無月むつきの席へと向かった。

ちなみに兄妹だが色々あって同じクラスである。

（その辺は本編である終わりなき闘争曲シリーズを読んでくれ）

「ああ、嫌でも耳に入ってくるよ」

その無月は本当に嫌そうに言う。

話題の少ない水月学園では噂は広まりやすい。

それが幽霊なんてものだったらなおさらだ。

「その噂については私も聞きました」

続いてもう1人、奏がかなでやってくる。

ちなみに彼女は2人の妹なのだが、これまた同じクラスである。

（くだいようだがその辺は本編である終わりなき闘争曲シリーズを読んでほしい）

「おもしろいよね、幽霊なんてさ」

そう言って祢音は手を胸の前まで持ってきて手首をだらんとさせる。

「どうせ誰かのいたずらだろ」

無月は素気なく言い、授業の用意を始める。

だが祢音は違うようだ。

「でも何人も驚かされたりいたずらされたりしてるんだよ？」

とわくわくさせているようだ。

幽霊なんてものは信じない人が多いのだが、

何人も幽霊の仕業と思われるいたずらをされているので、やけに信憑性が高い。

しかも七不思議があるとまで言われてくる始末。

キンコンカンコンコン

授業開始のチャイムが鳴り、話は一時中断した。

そしてその授業後の休み時間になったころのことだった。

（私は教室の中にすうっと入り私がいる席へと向かいます。）

突然、祢音が自分の座っていた椅子の上に上履きを履いていながらにして登り始め、

「私、この事件解決してみせる！『じっちゃんの名にかけて…』なんてね！！」

とクラスの視線を浴びながら、高らかに宣言した。

昼休み、私とお兄ちゃんと奏ちゃん、

あと友達の千春ちはるに新田にったくんやすいに安井やすいくんやすいに

お昼ご飯と一緒に食べようと誘って屋上にいました。

（その光景を、幽霊の私は距離を置いて見守っていました。）

「ねー祢音、ホントにやるの？危ないんじゃない？」

千春ちゃんは私の顔を心配そうに見てるけど問題ない！

「大丈夫だって！私に任してよ！」

と胸を張って見せる私。

「幽霊探しなんておもしろそうじゃん。オレも仲間に入れてくれよ」

って新田くんは言う。

「ダメ。私とお兄ちゃんと奏ちゃんです。適任なんだよ」

そう、こーゆーのは私たちがやった方が適任なんだよね。

「何で無月はいいいんだよ！？こいつ一番ノリ悪いだろ！」

新田くんの箸の先には黙々と私と奏ちゃんが作ったお弁当を食べてるお兄ちゃん。

「確かにノリは悪いし口悪いし素直じゃないけどこーゆー時は一番頼りになるんだよ♪ねーお兄ちゃん♪」

と、私はお兄ちゃんに抱き着きました。

そんな私を見て、ひとまず食べ終えたお兄ちゃんは

「だー、昼飯食ってる時くらいは離れろ！柊音くー！」

って言いますから。

「てへっ♪」

私は舌をちよつと出す。

「てへっ、じゃな〜い!!」

一方、千春はと言いますと…。

「はあ〜…（溜息を吐く）。柊音、そろそろ兄離れしなきゃいけないんだよ…？彼氏もできてないし」

「という千春もできてないんだよね、彼氏…」

ニヤニヤと笑って千春を見ると

「はいはい…そうですよ」

千春はかわいい顔で拗ねて、ソーセージを頬張るのでした。

【解説】

実は柰音には浮いた話はない。

見ての通り兄の無月にベツタリだからである。

兄妹が同じクラスにいるというのは滅多にないケースだ。

だからこの事を知らない者がたまに柰音に釣られてクラスまで様子を見に来ると、

柰音と無月のやりとりを見て彼氏持ちかと勝手に思い込み、諦める者も少なくない。

「じゃあねーまた明日」

「気をつけてよね！」

「わかってるって！」

放課後、千春たちと別れて私とお兄ちゃんと奏ちゃんは家に帰りました。

（幽霊の私もこっそりついていくことにしました。）

そして夜、ついに私は立ち上がった。

（私は私自身を見つめました。）

「さてと!!」

気合を入れてお兄ちゃんと奏ちゃんの前に立って、

「お兄ちゃん、奏ちゃん、行くよ!」

と叫ぶと、

「はいはい。んじゃ行くか」

と、お兄ちゃんが

「わかりました。お姉様」

と、奏ちゃんが同時に言いました。

あとね、それからね…。

言うまでもないと思うけど、メデスはお留守番なの。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「夜の学園ってやっぱり不気味だよねえ」

学園に侵入したのは午前0時。

先生たちは既に帰った時間だし、

この島は犯罪なんて滅多に起こらないからセキュリティなんてないし、安心して探検できるの。

「…だーっ！歩きにくいから引っ付くな！てかお前がリーダーだろ！前を歩け！」

お兄ちゃんはそういうの信じてない人だし、

奏ちゃんは何も動じなさそうだから頼もしいんだけど、

でもやっぱりまいち盛り上がりには欠けるなあ。

夜の学園で幽霊探しながら、最高のシチュエーションなんだけどなあ…。

（幽霊の私も勿論います。ただ、お兄ちゃんたちは気付かないと思うけど…ね。）

「そもそも言いだしっぺのお前がビビるな！怖かったら来なけりゃよかっただろ」

「いやあここまで不気味だと思わなかったしさあ。それになんか空気生暖かいし」

「まあいい。で、どこ行くんだ？」

「そうそう、まずはやっぱり音楽室だよね」

「…？ どうしてやっぱりなんですか？」

そっかあ、奏ちゃんはこういうの聞いたことないんだっけ……。

やっぱりこういうことはお姉様である私が教えていかなくちやいけないよねえ…。

「そうだね、学園の怪談てのがあってね。」

簡単に言うとそのそれぞれの学園にまつわる怖い話のことなんだけど――

ガラガラガラガシャーーン！！

「きゃあああああああああ！！！！！！」

「うるせえっつ！！」

ゴッソ

お兄ちゃんが私の頭に鈍い音を立てさせました。

「あいったあっ！」

肘（かなあ？）で頭を殴られてしまう私…。

ズキンという痛みを両手で頭をこすりながら、ちよつと私…涙目…
…(泣)

「ゴミ用具の扉が開いて、んでほうきとかが倒れただけだ。あと抱きつくな。苦しい」

お兄ちゃんは私を振りほどこうと私の腕を掴むけど、私はさらに力を込めて抱きつく！

「大丈夫？お姉様…？」

「うん……。これヤバいって幽霊の仕業だよ！もう帰ろうよ！」

私は精一杯悲痛な声でお願いするけど、

「まだ一つも調べてねえだろうが。さっさと音楽室行くぞ」

お兄ちゃんはそう言って私の気も知らないで歩き出すの……。

「いやだあああ！わ、わた…。私…。もうどこにも行きたくないよ
お…！」

と、叫ぶとお兄ちゃんが

「うるせえ！リーダーはお前なんだがらな！リーダーがビビってん
じゃねえ！わかったか！」

と怒鳴って、私をずるずると引きずって音楽室に……。

今思ったんだけど、なんかお兄ちゃん楽しんでない？

（私もこっそり後を追います。）

「そんなわけで音楽室到着したんだけどさあ……………あれって絶対おかしいよねえ？」

絶対おかしいって……………ピアノが勝手になってるしい！

「おお、すげえな」

って言ってる割には冷静だねえ！お兄ちゃん！

「あの絵は動くんですか？こっちを見ていますが…。気になりますね」

余計なことに気がつかないでよ！奏ちゃん！

「じゃ、次行くか」

お兄ちゃんは再び私の体を引きずって保健室にいい…………。

「ねえ、もう帰ろうよお…（泣）」

「ん？向こうから誰か走ってくるぞ」

「誰かって……いやああああああ！！！！！」

私は無我夢中で銃を放ち、気がついた時には穴だらけの人体模型が。

「あゝあ、今回はそんなのナシって予定だったんだけどなあ」

「だってえ…」

…グスッ。

…怖かったんだもん。

ザッザッザッザッ！

後ろから無茶苦茶足音が聞こえてくるんですけど……。

「今度は何…！？」

振り返った私の視界には何人もの人体模型が！

「もうダメ………ばたんきゅー」

その瞬間、私の意識は途切れてしまいました…。

（私、ここで途切れちゃったんだ…。）

「おい、祢音！しっかりしろ！言い出しっぺのお前が勝手に意識を失うんじゃないよ！」

オレは祢音の頬を何度かビンタするが、祢音は意識を失っているようなのか全く動じる気配がしない。

「ちっ…、祢音がこんなじゃあ、今日はもう無理みてえだな。せっかく用意した企画だったんだけどなあ」

（え…、これどーゆーこと？）

オレが人体模型の集団を見ると、そいつらは今まさに煙のようにゆらめき、姿を消す所だった。

実はこの一連の事件、オレと奏が仕向けたものだった。

祢音は、年末年始に相次ぐテレビの特番の中で、幽霊やらUFOなどのミステリー物や、

探偵物のドラマをやっていたのを見て、影響されていた時があった。

それで最近「うちの学園にも何か起こらないかなあ」とぶつぶつ呟いていた。

そしてある日奏が

「手伝ってくれませんか？」

と言いにきた。

奏が言うには最近退屈そうにしている祢音を楽しませる企画を作り上げたから、

それを手伝ってほしいというものだった。

奏の幻術を使い、たまたま夜にこの学園に來た生徒に幽霊を見させ、祢音に探検させようという企画だった。

オレの役割はその間奏に付き合ったり辻褄^{つじつま}合わせをやったり、というものだった。

普段はメンドクさがるオレだったが、最近祢音をいじったりすることもなかったので嬉々（きき）として参加した。

（なるほどね…、どうりで出来過ぎてるわけだったんだ…）

ちなみにメデスは仲間外れだ。祢音の状態は知っているが、この企画のことは何も知らない。

そのつもりだったのだが夜にたまたま学園を通りがかり、魔力を嗅ぎつけバレてしまった。

まあ知られたものの直接参加はしていないし、辻褄^{つじつま}合わせに協力させたからその方がよかったかもしれない。

「少々刺激が強すぎたようですが楽しんでもらえたようで私は満足です」

奏は軽々と祢音の体を背中に背負う。

(ひどいよ！2人して私を騙してたなんて！許せない！)

「さて、後は後始末だな」

「メデスに風邪をひかせて、その影響で悪夢にうなされてた。ってことにするんですね」

一息ついてから奏は

「わざわざ風邪をひかせるのは気が進みませんが」

と言った。

「問題ないだろ。1日で治るぐらいの重さにするし、明日は土曜だ。

部活はオルタナティブ（如月兄妹が属する魔法使いたちの組織。詳しくは今までのシリーズ参照）

に入って任務があったせいで全然参加できなくてやめたからな。2日休める」

(ひどい！ひどすぎる！)

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「…ふ・ざ・け・ん・な！！オレの愛しの祢音ちゃんに風邪をひか

せるだあ!?

んなことできるわけねえだろ!!…あぁ!?

家に帰って早々メデスに怒鳴られる。

(メデスが怒るのも無理ないと思う。私がいちばん傷ついてるんだから…)

このことだけはメデスには話していなかった。こう言ってくるってわかってたしな。

「ほらほら祢音のためなんだよ。もうこれしか誤魔化せる方法ねえんだからさっさとしてくれ」

「……仕方ねえなあ。ほれ」

メデスが手をかざすと、気絶する祢音の周囲だけ一気に気温が下がる。

しばらくすると思い通りに風邪をひいた。

(あれは夢じゃなかったんだ。それにしても、こんなやり方、私絶対許せない!)

「…あとは2階のベッドで寝かせるだけだな」

【AM 8…35分】

「ん……？うゝん…、人体模型が迫ってくるよ。…って、アレ…？ここは私の部屋…？」

再び見えた私の視界には見覚えのある壁がある。

あと奏ちゃんの顔も見えてる。

「お姉様、大丈夫ですか？随分うなされてましたが」

額が冷たいなあ。

（私は右手で額を触ってみる）

これは冷えピタ？

上半身を起こすと確かに私の部屋だった。

日差しが眩しい、どうやら朝みたい。

あの時気絶でもしちゃったのかな…？

ガチャ！

「よう、起きてたのか」

ドアからお兄ちゃんが入ってきました。

手にはプラスチックの桶があるのが見える。

「う、うん……。ひ…、ひえ…、ひえっくしょい！」

「まだ治ってないみたいだな」

ああ、寝ぼけてたみたいだけどうやく思い出したよ。

そういえば私、風邪ひいてたんだ！

…私がみんなとお昼ご飯と一緒に食べたり、

午前0時に私とお兄ちゃん、奏ちゃんの3人で夜中の学園に忍び込んだ

あの出来事も全て夢だったんだ…って考え直したんだ。

やけにリアルに感じたけどね。

「夢オチだったんだね……。なあ〜んだ、それなら安心だね♪」

くなんであんな夢を見たんだろう…？

もしかして、私の心のどこかにいつかこうなってほしいと思う感情があったのかなあ…。

よくわかんないや。怖かったけど夢を思えば案外楽しめたし、そこは深く考えないでおこうかな…>

「…夢オチ？」

「いや、独り言だよお」

私はポフツと音をたてて横になった。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

物語は、再び夜の学園へ。

【AM24..00分頃】

全ての真実を知った私は、改めて自分の置かれた状況を見つめ直しました。

『ひどい、ひどいよ！お兄ちゃんも、奏ちゃんも、2人して私を騙していただなんて…！』

現実にあったことなのに、夢だったことにしちゃおうだなんて！』

そんなことを考えつつも、私は再びあの音楽室へ……………。

【音楽室】

『…やっぱり何度来ても不気味だよねえ。まあ、夜だからしかたないかな。』

私がピアノにゆっくりと足を踏み込むと、誰もいないはずなのにピアノから音楽が奏でられたのです。

『…これ、奏ちゃんの幻術じゃあないよね…？』

私はピアノに向かって呟いてみると、音は静かに止まりました。

『…え、どうしてやめるの？』

私は見えない誰かに向かって声をかけました。

『…わたしの音楽、聴きたいの？』

『う、うん…。ダメ…かな？』

どうやら、ピアノを弾いていた相手は言葉遣いを聞く限りでは私と同じ女の子のようだった。

『…あなた、名前は？』

相手の女の子（？）が、私に声をかけてきたので

『…私？私、祢音。^{ねおん}』

と、自己紹介してあげました。

『そう、柰音って言うのね。わたし、深雪。みゆき』

実はねわたし、水月学園に通っていた生徒だったの。』

『だった、って…？』

『わたしは、生まれつき身体が悪くてね…。柰音ちゃんが知らないのも無理はないよ。』

だってわたしは、学校内じゃ目立たなかったしお友達ができなかったしね…。

わたしはある日、学校の帰りに交通事故に遭っちゃってね…、それで死んじゃったの…。』

『…そうだったの…』

『でも嬉しいな…。わたしの存在に気付いてくれて…。』

『…深雪ちゃんは、ピアノが好きみたいだけど小さい頃よく弾いていたの…？』

『…うん。わたし、小さい頃、ピアノ教室に通っていたことあったから。』

死んだ今でも、こうやってよく音楽室でピアノを弾くのがわたしの日課なのよ。』

『…へえ、そうなんだ。ねえ、深雪ちゃん。』

『…なあに?』

『深雪ちゃんは私以外で、幽霊が実在するって信じてる…?』

『うーん、どうかな…。わたし、靈感とか強くないし…。』

『そっか。うん。ピアノの演奏をしていたのに邪魔しちゃってごめんね。私、そろそろ行かなきゃ。』

『…またわたしのお話し相手になって戴けますか?』

『…うん、いいよ。』

私は、深雪ちゃんに向かって手を振ると音楽室を出ていきました。

『柊音ちゃん…、また逢って話せるといいですね…。さて、わたしもそろそろおいとましなければなりませんね…。…。』

私が音楽室の次に向かったのは保健室でした。

『…あの時は、人体模型を見て気が動転しちゃったけれどさすがにもう驚かないはず…。…。』

ギギギギギ………！！

私の前に再びあの人体模型が！

『キャアアアアアア！！』

私の悲鳴を聞いていた人物が声をかけてきました。

『いやあ、いやあ、ごめん。まさか、こんな時間に人がやってくるなんてね。』

『う、うう……。』
(泣)

『ごめん。祢音ちゃん。驚かせるつもりはなかったんだよ。』

『どうして私の名前を知っているんですか？』

『君はさっき、音楽室で妹と話をしていただろう？僕は、雪成。簡単に言うとな深雪の兄だよ』

『で、雪成さんはここで何をしていらしたんですか……？』

『うん。僕はここいらで悪霊とか出たら祓ってる仕事をしているんだ。』

深雪も、一応除霊の力は身につけているんだけど恥ずかしがり屋でね……。

たまにでいいから深雪と接してやってくれないかな。』

『ええ、そのつもりですよ。』

と、私は胸を張って言いました。

『そうか。また夜になったらおいで。気をつけて帰るんだよ』

『深雪ちゃんに、雪成さんかあ…。でも、2人とも名前に「雪」の字がついてるのは何でだろ?』

と、考えながら私は2Fの私の部屋にいる本体の私の身体に宿りました。

そして次の日…。

朝、お兄ちゃんと奏ちゃんと一緒に学園へ行こうとすると…。

『おい、どうしたんだ?』

お兄ちゃんが私に向かって言うところに、昨日見た深雪ちゃんが哀しそうなまなざしで私を見つめていました。

『どうしたの、深雪ちゃん？』

私が誰もいない場所に向かって声をかけたので、奏ちゃんは

『…誰と話しているのですか？お姉様…？』

と呟きました。

でも私は、深雪ちゃんを見つめていました。

『…今日、昼休みは逢える？』

深雪ちゃんと私のやりとりはどうやらお兄ちゃんと奏ちゃんには聞こえないみたいだし、見えないみたい。

『…うん、難しいかもしれないけど、作ってあげるよ。』

って私が言うと、

『…やったあ〜♪』

って深雪ちゃんが言う。

『なあ、今日の祢音の様子、おかしくないか？』

『少し気になりますね…。調査してみないとわかりませんが…』

それからと言うものの、私は段々お兄ちゃんや奏ちゃん、

千春ちはるや新田にったくん、安井やすいくんとはお昼ご飯を一緒に取らなくなる日が続き、

毎回音楽室に通っては、深雪ちゃんと友達以上のお付き合いをしていくようになりました。

（無月SIDE）

オレと奏は、祢音の状態を知るため、ここ『オルタナティブ』に来ていた。

向かった先は、レミア隊長の所だった。

『ふむふむ…。なるほど。事情はわかりました。』

今度の騒動は祢音さんに何か企画を打ち立てたとかそういうものではないことは間違いないんですね？』

『はい、最近お昼ご飯と一緒に摂りませんし、何かあったとしか言いようがないですね…。』

『あの企画は少しやり過ぎたって反省しています。』

でも、せめて誰と接触しているのかさえわかれば…』

『わかりました。私にどれほどの力ができるかわかりませんが調査してみましよう…。』

柊音さんが、何か口に出して言っていたこととかはありますか…？』

『確か…、深雪とかなんとかだったような…。』

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

『わかりましたよ。柊音さんが誰と接触しているのかが！』

『…誰なんです？』

『深雪の「雪」の字とこちらの雪成の「雪」の字を比較してみてください。』

何か気付きませんか？』

『あ…！？』

『そうです。この2人は、雪女と雪男の生まれ変わりなのです。』

人間のふりをして、近付き、氷づけにしてから喰らう化け物です。』

『お姉様の居場所は…？』

『学園の屋上です…。』

【水月学園・屋上】

【AM25..30分頃】

『あつけないものだな。簡単に騙されるなんてな。』

『ええ、お兄様。ねえ、お兄様。わたし、祢音ちゃんを喰らってもいい？』

『好きにするがいい。僕はあの2人を始末するからな。』

『悪いが祢音を返してもらうぜっ！』

『お姉様をあなたたちの好きなようにはさせません！』

『ふん、身の程知らずをわきまえるがいい！』

無月VS雪成

奏VS深雪

カンカン、キン、カン、カン！

互いの剣と剣が交わる。

オレは祢音を見ようとするが

『余所見してると死ぬよ？』

ヤツの氷刃ひょうじんが邪魔をして身動きとれねえ。

＼奏SIDE＼

『お姉様を返して下さい…！』

『ダメ。祢音ちゃんわたしのものなんだから絶対渡さないもん。』

『だったら力づくでも………』

無月は炎の調律師だから氷と互角に渡り合えるけれど、私は無月ほどの力がない……。……。

雪成と深雪にとどめを刺そうとしたとき、氷が溶けてお姉様が私のもとに降り立ちました。

『もうやめてあげて…………。』

『しかし、こいつらはお前を氷づけにして喰らおうって…………』

『深雪ちゃん、私、とても楽しかったよ。だから今度は私が2人を助ける番だよ。』

私は、天使の私になりました。

グレースオブエンジェル
『天使の加護！』

雪成と深雪ちゃんの氷の魔力がどんどん浄化されていきました。

2人に取り憑いていた氷の妖怪を3人で撃破した。

それ以来、雪成と深雪には以前の記憶がなくなり普通に祢音やオレ達と付き合うようになっていったのだった。

第2話外伝（後書き）

いかがだったでしょうか？
こういうことがあったんです。

感想＆評価、お願いします。

第3話 「バレンタインデー」 (前書き)

ちょっと早いバレンタインデー小説です。

この話でのバレンタインデーは実際とは少し異なった設定にします

第3話 「バレンタインデー」

【2008年 2月14日（木）】

【AM7..00頃】

「ふわあぁ。ん…、もう朝になったんだね…」

肩胛骨^{けんこうこつ}辺りまで伸びた、茶色の髪を持つ少女はベッドから起き上がるとカーテンをシャーと開ける。

この少女の名前は祢音。わけあって如月家の、無月の妹となっている。

（後、妹に奏がいるが、詳しくは本編「守護るべきもの」「終わりのなき闘争曲」を参照。）

「今日は2月14日か…。そういえば、今日はバレンタインデーだったよね♪」

私は、ちゃっちゃんと着替えを済ませてまずお兄ちゃんの部屋に行きました。

「お兄ちゃん、朝だよ」

私の声に、お兄ちゃんは

「ん…、あ、祢音か…？」

と返事を返しました。

「朝だよ、起きてよ」

しつこく私が言うとしぶしぶお兄ちゃんは布団から起き上がりました。

「…？どうした、祢音？いつもはねぼすけのお前が早起きするなんて珍しいじゃないか…？」

「うん…、たまには早起きしようと思ってね」

私はニコツとしながらお兄ちゃんに向かって言いました。

「着替えたら、先に台所で待ってて。私、奏ちゃん起こしてくるから」

そう言うと、私は奏ちゃんの部屋に起こしに行きました。

「奏ちゃん、朝だよ。起きる時間だよ」

私の声に奏ちゃんは、

「あ、お姉様…。今日は随分早起きなんです。何かあったんですか…？」

と言う。

「とにかく起きて。話はそれからだよ」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

【AM 7..30頃】

台所には、私が作りあげた朝食がずらりと並んでいる。

「わけを話してもらおうか」

と、お兄ちゃんが言いました。

「今日は何の日だかわかる…?」

私に言われて、お兄ちゃんと奏ちゃんはカレンダーを始めて見上げました。

「2月14日か…、どうりで…。」

一言お兄ちゃんが漏らしました。

「その日がどうかしたんですか」

奏ちゃんは私に質問をしてきました。

「今日はね…、バレンタインデーなの。」

女の子が好きな男の子からチョコをもらう特別な日なの♪。…てわけで、ちょーだい♪」

私はお兄ちゃんに向かって両手を差し出しました。

「いいか、祢音！期待するのは勝手だが、オレはお正月みたく、金がねえんだよ！

だからチョコなんか買ってやれるほど持ち合わせてねえんだよ！」

と反論されちゃいます…。

「任務の報酬でガッポリもらってるくせに…」

私はボソツと小声で呟きます。

「バレンタインデーですか…。私はよく知らないのですが…。何のためにあるのですか…？」

だーかーらー！今言ったばかりじゃん！奏ちゃんってば！

「お前、そんなにチョコ欲しいのか？」

お兄ちゃんはすねている私に声をかけてきました。

「うん…。だってえ、1年に1度のバレンタインデーなんだよ？

私は女の子だし、そういうものの1つや2つは貰いたいものだもん」

「おっ、そろそろ時間だな」

時計を見ると、もう8..20分をさしていました。

とりあえずうやむやのまま学園へ…。

く昇降口く

私は下駄箱から上履きを取ろうとすると、その上に小包が…。

「何だろ…、これ？」

私はその小包に目をやると、

「何してんだ？さっさと教室行くぞ！」

とお兄ちゃんの声が…。

「うん、先に行っててよ」

と、言うとお兄ちゃんと奏ちゃんは先に行ってくれました。

私はリボンのついた小包を鞆の中に入れて教室へ向かいました。

（教室）

教室に入ると、お兄ちゃんと奏ちゃん、それに千春、新田くん、安井くんが私を待っていました。

「遅かったね、柊音？」

と、千春が。

「ぼくより遅く来るなんて…」

と、安井くんが。

「何かあったのかよ？」

と、新田くんが口々に私に向かって言いました。

「うん…ちょっとね」

そう言いながら私は自分の席に座り、机の中を見てみると…。

「…これは!？」

私の机の中には、たくさんの小包が入っていました。

「もしかしたら、バレンタインチョコだったりして？」

と、千春が言いました。

「バレンタインチョコって……、祢音ってそんなにモテるタイプだったっけ…？」

と、お兄ちゃんが言いました。

「夢が叶ってよかったんじゃないんですか、お姉様…？」

と、奏ちゃんが言いました。

「う、うん…。でも誰かな？差出人が書いてないんだけどな…」

「もらっておけば、祢音？こういうチャンスあまりないしね」

と千春が言ったので素直に貰っておくことにした私。

やがて授業に入り…、昼休みを迎えました。

「祢音、食堂行こうよ。」

みんなに誘われて食堂へ…。

（食堂）

食堂はたくさんの生徒や人だかりで混み合っていました。運よく1つだけ席が空いていました。

「よし、ここにしようぜ！」

って新田くんが言いました。

「柰音、先に行ってきたら？ 私たちあとでいいから」

というわけで、私が先に行くことになりました。

券売機の前に立つと、なぜか行列を作っていたはずの生徒が私を見るとすんなり左右にどきました。

「お先にどうぞ。」

口々にそう言って、私は素直に券売機の前に辿り着きました。

「何にしようかな～…」

私が迷っていると、さりげなく男子生徒のひとりが

「スペシャルランチがお得ですよ」

と言ってきたので、私はスペシャルランチ（450円）の食券を買いました。

食券を提示すると、シェフたちは

「おい、急いでスペシャルランチの特上を作れ！」

と怒鳴ったのです。

そして瞬^{またた}く間にスペシャルランチが出来上がりました。

気になるメニューですが…。

沖縄ソーキそばをチョコまみれにしたラーメンで、

チャーシューのかわりに、チョコレートクリームが2個のっかっていて、

五目チャーハンのかわりにチョコレートクリームでまみれたご飯に、

チョコレートパフェ、ホットココアがついた、

そんなメニューでした。

「うげ…、どうしてチョコばっかりなのぉ…」

私の声に、奏ちゃんが

「バレンタインデーだからなんじゃないんですか…？お姉様…？」

イヤイヤになりながらも、私はスペシャルランチを口にしました。

口の周りには、チョコレートがべっとりつきましました…。

みんなは、まともそうなメニューばかりを食べていました。

「なんで私だけこんな目に…」

と、ぼやく私。

放課後になりました。

千春や新田くん、安井くんは用事があると言ってお兄ちゃんと奏ちやんと一緒に先に帰ってしまいました。

私は誰もいなくなった教室で、小包を開けてみました。

小包の中身は…。

ハート型のバレンタインデーチョコレートが1個入っていました。

底には、宛先不明で手紙が1通入っています。

「なんて書いてあるんだろ…？」

私は手紙を読んで見ました。

『僕、ずっと祢音さんのことが好きでいつも祢音さんのことを見つめていました。』

お節介かもしれませんが、良かったら召し上がって下さい。××より。』

他の小包の中にも似たような文がツラツラと書き綴っており、

私はせっかくの好意を無駄にするのはかわいそうだと思い、素直に受け取っておきました。

「さて、せっかくだから1つ戴きましようか…。」

私は、その中の1つを口にしました。

「んゝ、口の中でとろけるうゝ」

チョコレートを食べたこの瞬間が、私の素直な感想でした。

私が1つ口に含むと、次から次にチョコレートに手を出して…。

「ふうゝ…、どれもおいしかったなあゝ。」

でも誰が私にこんなにチョコをくれたんだろ…？ すごく気になるなあゝ…」

でも1人ずつあたっていくのはちよつと抵抗あるなあゝ…。

気になっていた私だったけど、深くは追求するのをやめて私は気分転換に音楽室に行ってみることにしました。

（音楽室）

ピアノの前には、深雪ちゃん（※彼女のことについては、第3話外伝を参照して下さい。）がピアノを弾いていました。

私に気付くと深雪ちゃんは、

「…あら？ 祢音ちゃん。今日はずいぶん早く終わったんだね。何かあったの…？」

って聞いてきたから私は

「うん。実はね今日、たくさん宛先不明の男子生徒からチョコをもらったんだけどね…。」

さすがに昼もチョコまみれだったから胃が受け付けなくなっちゃってね…。」

と言いました。

「…でもよかったんじゃない？ そんなにたくさんチョコもらえてさ？」

「まあ、いいんだけど。お返しとかつらいなあ…。」

「うふっ…、じゃあわたしが少しもらっておこうか？」

「え…？ いいの？ 深雪ちゃん、お腹壊しちゃうかもしれないよ？」

「大丈夫だって！お兄様とわけて食べるから。うふふふっ…♪」

そんなわけで、私は深雪ちゃんに少しチョコを分けることにしました。

それから私は家に帰りました。

「ただいま！」

私が勢いよく開けると、

「お帰り」

「お帰りなさいませ、お姉様」

とお兄ちゃんと奏ちゃんが出迎えてくれました。

「ごめんね、すっかり遅くなっちゃって…」

私は一応、帰宅が遅かったことを謝っておきました。

「…いえ、さ、お姉様。冷めないうちにお風呂に入ってきたらどうですか…？」

「うん、そうする」

私はひとまずお風呂に入ることになりました。

くお風呂く

私は髪を洗いながら、今日1日のことを振り返ってみました。

「今日は色々なことがあったなあ…、机の中に、たくさんのチョコが入ってたり…。」

まあいいや…。今日はバレンタインデーだし…。」

その後、私は夕飯を食べた後疲れたので眠りました。

こうして、私のバレンタインデーをめぐるチョコレート事件は幕を閉じました。

めでたし、めでたし。

第3話 「バレンタインデー」 (後書き)

感想&評価お願いします。

第4話 「奏の夢、奏の想い」

～夢の中～

私の前には、今は亡きお父様が私をじっと見て、そして言いました。

「かなで奏、その力、オレのために尽くしてくれ」

と…。

「はい、お父様…」

そう言って私は軽くうなずくのでした。

【10月某日】

～現実世界・奏の部屋～

「…!!」

私はベッドから飛び起きた。

なんだ、夢でしたか…。

私はホッとため息を漏らしました。

どうにも最近お父様の夢をよく見ます。

まだお父様のことを（心のどこかでいつまでも）引きずっているんでしょうか。

私はベッドから起き上がり、掛け布団を整えると窓を開けました。

夏も終わり、涼しい風が私を通り抜けて部屋に入ってきます。

「気持ちいいですね。……そうだ、早く着替えてお姉様たちの食事を用意しないと」

冷えるといけないので窓を一旦閉めると素早く着替えいったんました。

夏の終わりごろ、複雑な制服の着替えにも慣れなくて、

お姉様に迷惑をかけることもあったけれど、

お姉様が教えていただいた今は楽に着替えられるようになりました。

色々感謝しないといけませんね。

「では起こしに行きましょうか」

朝食を作り終え、2階へ続く階段を駆け上がりました。

無月^{むつき}はいつもお姉様に任せています。

いつも通りの朝、そして今日もいつも通り時が過ぎていくのでした。ですが夜だけはいつもと違い、眠りにつくと私は再びお父様の夢を見ました。

く夢の中く

また私はお父様の前に立っています。

「奏、お前は強い、だから人一倍働いてもらわなければならない」

と言うお父様の言葉に

「はい。お父様がお喜びになるのでしたら……」

また私は素直に頷くのでした。

「ぐああっ！」

「これはもらっていきます」

「よくやってくれたな、奏偉いぞ」

お父様は大きな手で私の頭を撫でてくれました。

「……………はい。ありがとうございます。お父様……………」

そして私はわずかに頬を朱に染めていました。

「何のようだ？」

「お父様の障害となるあなたたちには死んでもらおう、と思って」

「これからオレの息子たちが攻めてくる。奏、任せたぞ」

「わかりました」

「なかなかやりますね」

「そりゃあ『お姉様』ですからね」

「ぐあああああっ!!!!」

「はっ!!!!……はあはあはあはあはあはあはあはあ……」

またお父様の夢。

一体私はどうしたのでしょうか？

「……今日は休みでしたね。お父様のお墓参りでもした方がいいんじゃないかな」

くダイニングく

「お姉様、今日午後からお父様とお母様のお墓参りに行こうと思うのですがいいでしょうか？」

朝ごはんの途中で、私は目の前で食事をされているお姉様に言い出しました。

「お墓参り？　そーいや夏に行ってからそれきりだったよね。私も行ってみようかな。お兄ちゃんもどう…？」

お姉様はすぐに同意してくださり、隣にいる無月に話しかけました。

「そうだな。ま、あれでもオレたちの親だからな。よし、オレも行く」

というわけで、私たちはお墓参りに行くことになりました。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「涼しいから夏よりも気持ちいいね。夏の暑さも好きだけどさ」

「ねおん 祢音、奏、オレは準備できたぞ」

「では出発しましょうか」

お父様とお母様のお墓は水月島みなつきじまの隅すみ、

海が見える墓地の真ん中より少し右の方にあります。

私は夏に一度行っただけですけど、ちゃんと覚えていました。

お父様の魂はあの世へいくことなく消滅したと聞いていましたが

（お父様の死について知りたい方は本編『終わりになき闘争曲』参照してくださいね）

せめてお墓だけでもということと私とお姉様と無月がそれぞれ任務で稼いだお金を出し合って造ったものです。

その時の私は調律師になりたての頃でしたので、

給料はあまり多くもらえませんでしたし、お金もあまり持っていないでせんでした。

なので、位牌代のほとんどをお姉様と無月に出してもらったのです。

「やっと着いたね」

私たちはようやくお父様とお母様のお墓の前に着きました。

まだお墓は少し風雨にさらされて汚れていますが、

造ったのが最近でしたのでそれでも他のお墓と比べると綺麗に見えます。

「さてピカピカにしないとね！」

お姉様はお供えする花を持ってやる気満々のようです。

私は水を汲みに行き、そして無月には雑巾で墓石を拭いてもらいました。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

チーン

掃除が終わり、お墓の前に3人で並ぶと、私が鈴を鳴らして3人で拝みました。

お父様、お母様、ご無沙汰しています。

そちらでは元気になっていますでしょうか？

私はお姉様と無月と楽しく暮らしています。

学園も初めは人見知りして困っていましたが、お姉様たちのおかげで友達もできました。

これから危険な任務につくこともあると思います。

そのときは私たちを見守っていてください。

また来ます。

「…終わったか？ 奏？」

「はい」

「じゃあ帰ろっか」

「はい」

く奏の部屋く

その夜、私は初めて日記を書きました。

お姉様に聞いたところ、日記というものはその日あった印象に残ったことを書き記し、

思い出として記録として残しておくことだと教わりました。

私は日記帳を持っていなかったのでルーズリーフに今日の事を書き記しました。

『今日、私はお姉様と無月とでお父様とお母様のお墓参りに行きました。』

夏以来のお墓参りでしたが、私はお父様とお母様に会えて嬉しかったです。

私は時々家族の在り方について考えます。

今、家には私たちだけでお父様とお母様はいません。

3人だけでもこんなに楽しいんですから、さらに2人増えればもっと楽しいと思います。

1日だけでも5人で過ごしてみたいです。誰一人欠けることなくです。

私もお姉様もお父様もお母様も、もちろん無月も。

でもそうはいきませんよね。私はお父様に与えられた命を精一杯生きていきます』

「ふう……」

私は日記を書き終えると、それを机に挟み、ベランダへ出てみました。

「……綺麗」

空を見上げると雲一つなく、綺麗な満月が輝いていました。

第4話 「奏の夢、奏の想い」 (後書き)

感想&評価お待ちしております。

第5話 「天照様の落とし物」 (前書き)

初のコラボ物です。

最初は闘争曲の方で出そうと思ったんですが

オリジナルにしておきたかったので遊戯曲で出すことにしました。
さて、いったいどの作品とのコラボでしょう？

第5話 「天照様の落し物」

く如月家く

『帰ってきたらすぐ本部に集合　Byメデス』

家に帰ってくると、玄関にそう書いた手紙が置いてあった。

メデスの姿がないということは先に行ったようだ。

「だったら早く支度しないとね。行こ、奏ちゃん」

「はい」

後ろから手紙を覗き込んでいる柊音は、くつを脱いでさっさと2階へ上がっていき、それに奏も続く。

「じゃあ行きますかあ！」

用意も整い（まあそんなに持ち物はないのだが）、オレたちは本部へと向かった。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

くオルタナティブ本部・玉座の間く

「何の用ですか？^{アマテラス}天照様もお揃いで」

レミア隊長の隣には白い髪をした、見かけはオレたちと同一^{おな}年ぐらいの少女、

フェイト・天照・アカシャ様がいる。^{アマテラス}

元々はフェイト様と呼んでいたのだがラグナロク中、フェイト・アカシャの一族に多く会い、

フェイト様、と呼ぶ度に全員が反応するから天照様、と呼ぶようになった。

「実は少々……というか結構大変な事態が起こりまして」

なぜか天照様が申し訳なさそうに話し出す。

「天照様はここに来る途中、落とし物をしたそうです」

「はい。久遠が今ここに來てるんですけど、

その素材を久遠の世界の研究部屋の保管庫から持ってくるつもりだったんですが、

何者かの襲撃にあって異世界の狭間に落としてしまっ……」

ちなみに久遠というのは天照様と仲の良いフェイト・アカシャの一族で、

たまにやってきては、この本部にある機械やら薬物やらをいじって、まれにとんでもないものを造り上げたりして帰っていくというやっかいな人だ。

核兵器をはるかに超える爆弾とか、四次元ポケットとか、変身ジュースとか。

「つまり、私たちがそれを拾ってこればいいわけですね？」

「柊音さんの言う通りです」

「何を落としたんですか？」

奏が質問する。

「えーと…久遠の造った、日本の関東地区ぐらいなら軽く焼け野原にする爆弾と、

私が異世界から素材として持ってくる予定だった今は滅びた世界の産物である真実を映す鏡など、

7つのアイテムです。どれも貴重であったり危険なものばかりです。

ああ、すでにメデスさんが1つ転送してくれましたから6つですね」

「空いていたメデスには先に出てもらってます。

他の調律師はそれぞれ他の任務にあたってますので、人員を割ける

のはこれだけです。

ラグナロクでほとんどの調律師が死に、独奏者のソルダート姉弟を調律師に昇格させたものの、

調律師はあなたたち3人にメデス、そしてソルダート姉弟の6人。

ラグナロクで長老様、そして4人の調律師が死にましたから。

魔玉の時と同じく、波長を感知する腕輪を渡しておきますのでそれを使って探すように。

見つけたら腕輪に近づけてください。転送されます。

他にも必要なアイテムは記録してありますのでこれで確認することができます」

腕輪を渡されいくつかあるボタンの内の一つを押すと立体映像となっていくつか表示される。

「通信機の役割もありますから何かあったら連絡するように。

それと天照様を襲撃した者が狙っていると思います。

心配ないとは思いますが十分気をつけて。では解散！」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

（オルタナティブ本部・転移室）

「大変なことになってるみたいだね」

任務の説明を受けて部屋から出ると柰音は言った。

「それにしてもロクなもんがないな。爆弾など鏡など…」

「早く行きましょう。のんびりしている暇はないです」

「そうだな。じゃ行くぞ」

オレたちは次元転移魔法を使い、異世界へと飛び立った。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「異世界・???」

そしてオレたちが着いたのは日本の都会となんら変わらない世界。

しかも運がいいことに近くに例のアイテムもあるようで魔力を込めると腕輪がチカチカと光って反応する。

「うわぁ、ここ結構いい服売ってるねえ」

柰音はガラス張りの向こうにあるピンクのワンピースを眺めてうっとりしている。

「おい、そんなことしてる暇はねえ——ぞ!?!?」

ドカッ

後ろでまだへばり付いている祢音を見ながら歩いているから曲がり角で誰かとぶつかってしまった。

「いたた……」

オレとぶつかったらしい金髪の女は尻もちをついてしまっている。

「悪い。大丈夫か？」

オレはその女に手を伸ばすと

「あ、すいません。ありがとうございます」

そういつて素直に掴み、立ち上がった。

「いや、余所見よそみをしていたからな。謝るのはこっちの方だ」

「いえ：私もぼーっとしていましたから。それじゃあ」

そうして去っていく女は年はオレより少し上のようでかなり長い髪をしていた。

「お兄ちゃん？もしかして一目惚れ？」

女の後姿を捉えていたオレの視界にニヤけた顔の祢音が映る。

「…………いや、気のせいかな。何でもない」

「一目惚れに気のせいなんてないよぉ」

妙に突っかかってくるな、こいつ。

「お姉様、別れて探した方がいいと思うのですがどうでしょうか？」

「ん、そうだね。じゃ私と奏ちゃんペアを組むからお兄ちゃんは1人でよろしくね」

そう言って奏と肩を組む祢音だが奏は不服そうだ。

「お姉様、私は1人でも動けるぐらい成長したつもりですよ？」

と言って顔をしかめる。

「いいのいいの。私はお姉ちゃんなんだから妹の面倒を見るのが義務なんだよ」

オレはお前の兄だが面倒そこまで見きれねえけどな。

「なら3時間後、この店の前へ集合。緊急事態やアイテム発見の場合念話で通信。いいな」

「うん、わかったよ」

「わかりました」

ここは無月SIDEのみでお送りします。

人ごみが邪魔だからオレは誰かに見つからないようビルの屋上へ飛んだ。

今回もらった探査用の腕輪は性能が悪いのか近づいてもあまり反応が強くない。

だがしばらくふらふらしているとようやく見つけた。

何にもないビルの屋上に無造作にポツンと鏡が置かれている。

こりや多分真実を映す鏡だな。

結界が張ってあるのか、普通の人には見えないようだ。

―お兄ちゃん！緊急事態！魔法使いが現れたの！―

―何人だ？―

―小さな男の子と女の子！それと、ドラゴン！！―

頭の中に響く叫びは少々痛い。

―はあ？ドラゴン？―

辺りを見回すと遠くの方で人は2、3人ぐらいは結構でかい白いドラゴン。

ガキ2人なら余裕だろうがドラゴンだとやっかいになるかもな。

―わかった。オレは鏡を見つけた。回収したらそっちへ―

ヒュン

風を切る音とともに鏡に手を伸ばしたオレの目の前を刃が通過する。

鏡に触れる前、ギリギリで手を引っ込めたから腕を失くすことはなかったが……

―悪い。オレにも相手ができた。こいつを始末してから向かう―

―わかったよ。気をつけてね―

祢音とはそこで通信を切った。

オレの腕を切り落とそうとしたヤツは……と。

目の前を見ると剣を構えた若い女が立っていた。

鮮やかなピンクのような紫のような色をした髪を一つに束ねた女。

手には剣がある。

さっき会った金髪の女と同じくらいの年か？

年齢のわりに眼はただ者じゃないことを感じさせる。

苦戦するかもな。

「それが見えるということは魔力があるということだな。それを使って何をするつもりだ？ 返答によっては少々痛い目にあってもらう」

……こいつが天照様を襲ったヤツか？

まあいい。どちらにせよ渡すつもりはない。

「なあに、ただ落し物を回収しに来ただけだよ」

そしてオレはレーヴァテインを取り出し、構えた。

「どうやら覚悟はできているようだな。……ゆくぞっ！」

女は真っ直ぐこちらへ走り出し、そして剣を突き出す。

「くっ」

体を左へそらして避けるとそこから剣を振り下ろす。

だが女は奥へステップし、避ける。

ちっ、やっぱそううまくはいかないか。

オレもすぐに走り出し、追いつくと剣で弾き合う。

「動きは悪くないな。むしろ良い」

「あっそ！偉そうに言うな！」

と強がっているが正直勝てるかわからない。

実力はオレと互角ぐらいか？

だがだからこそわずかな隙が殺し合いでは命とりとなる。

「はあっ！！！」

「うわっ！」

一瞬の隙を突かれ、剣で防いだものの遠くへ押し出される。

だが逆に都合がよかった。

あの女は剣を使っている。

オレがこっから魔法で攻撃すれば――

『シュランゲフォーム』

距離があつたから安心していたのも束の間、女の剣が鞭むちのように伸び襲ってくる。

「つて嘘お！？」

オレの脇腹辺りに一文字の傷ができる。

なんとか直撃はかわしたがやっかいだな、アレは。自在に動かせるみたいだし。

あの長さでは接近すれば元に戻さざるをえない。

一気に近づいて、斬る。

オレは再び走り出した。

そのオレの右側から剣が空を飛ぶ蛇のように襲いかかる。

キン

オレはそれを剣で弾き返す。

2撃目、今度は正面から向かってくる。

直線的な動きなら避けるのは簡単だがここは……

オレは向かってくる剣の切っ先に手をかざす。

ファイアボール
『火球』

ドオオン！

ギリギリで火球を放ち爆発させる。

爆発の衝撃で剣の先端辺りは女の後方へ吹き飛ぶ。

「これで、終わりだ！」

女は鞭状になった剣を剣の形へ戻そうとするが、長い分ちよい時間がかかっているようだ。

剣の届く範囲まで接近し、剣で薙ぎ払う。

女の腹に傷をつけたが後ろへ退かれこちらも致命傷とはいかなかったようだ。

「なかなかおもしろいヤツだ。：レヴァンティン！カートリッジロード！」

『エクスプロージョン』

レヴァンティンと呼ばれた剣から薬莖やっぎのような物が出てくる。

すると刃に激しい炎が纏まとわれる。

「ふうん。奇遇だな、オレの剣も『レーヴァティン』って似た名前だし……」

『炎刃』

「オレも炎を使うんだな、これが」

「それは奇遇だな。奇遇ついでに名前を聞いておこう。私は機動六課ライトニング分隊副隊長、『シグナム』」

「如月無月だ」

「ゆくぞっ！」

シグナムは炎に包まれたレヴァンティンを構える。

「ああ！」

オレは炎に包まれたレーヴァティンを構える。

さて、どう攻めるか……

「紫電——！！！」

「はああ——！！！」

「待ってください！！！」

オレとシグナムの勝負はたった一言で中断された。

そしてその声の持ち主がオレとシグナムの間に割り込む。

「？ お前は……」

そいつはさっきぶつかった金髪の女だった。

さっきと服装は違っていたが間違いない。

やっぱりこいつも魔法使いだったか。

「お兄ちゃん！」

続いて祢音と奏、そしてさつき見た白いドラゴンに乗って祢音が言
ってた子供2人がやってきた。

「で、どういうことか説明してもらおうか」

「うーん、初めはあの子たちと戦ってたんだけどね、途中であの人
がやってきて

簡単に話を聞いてもらったら協力できるかもしれないって言うてく
れたから」

「無闇にこっちの事情を話すな」

「だって優しそうな人じゃない？あの人」

……まあ見えなくてもない。

「君が如月無月くん？」

私は時空管理局の魔導師、フェイト・T・ハラオウン執務官です。
デスタロッサ

少し事情を聞かせてもらっていいですか？」

途中でそう名乗る金髪の女が話しかけてきた。

「ちょっと待ってくれ。オレの上に相談する」

「そう、じゃあ終わったら声かけて」

「わかった」

ハラオウンが離れてからオレは隊長と通信を行った。

「どうしました？」

「やっかいなことかと思うんですけど時空管理局の人に出会いました。」

彼らはこちらの事情を聞いて、場合によっては協力してくれると言うんですがどうしますか？」

「そうですね、時空管理局なら信頼はできます。」

それに今回の事はあまり秘密にすることもありません。

ですがラグナロク関連の事はできるだけ話さないでください。

他はあなた自身に任せます。

限度を超えなければ話してもかまいません。許可します」

「わかりました。それでは」

そこで隊長との通信を切った。

「じゃ、話してみようか」

「ああ」

そしてオレはハラオウンの所まで歩きだす。

「どうでした？」

「ある程度のことなら話していいって言われたから話す」

「そう、ではまずこれを求めてる理由を教えてくださいます」

げっ！

ハラオウンの手には例の鏡が握られていた。

先に回収しておくべきだったな。

「実はだな……」

そこでオレはオルタナティブについて少し話し、

今回の任務の内容を説明した。

そしてそのリストを見せると

「なるほど、これがそのアイテムですね。」

管理局のデータベースを調べれば見つかるかもしれません。

現にこれはロストログに指定されていますから」

「ロストログアって何ですか？」

柀音が質問する。

オレも何かと考えていた。

「ロストログアというのは過去に何らかの要因で消失した世界で造られた遺産の総称だ。

それらの多くがオーバーテクノロジーで造られている。危険であるため管理局が確保、管理を行っている」

ハラオウンの隣にいたシグナムが説明をした。

「へえ」

ふん。

「どれも危険なものばかりですね。

このようなものを造るなんて、少し気になりますが悪用しないという言葉を信用します。

協力させてもらいますがどうしますか？」

「協力、お願いします」

オレはほんの軽く頭を下げ、柀音と奏はオレよりさらに頭を下げる。

「うん。じゃあ自己紹介でもしようか。これからしばらく一緒に過
ごすことになるだろうしね」

ハラオウンが満足そうに頷くとフィンキが急に柔らかくなったよう
な気がした。

それでオレの張りつめた精神もいくらか和らぐ。

「私からするね。さっきも言ったけど、私は『フェイト・T・ハラ
オウン』」。

時空管理局の執務官に就いてます。

今は特別に設立された機動六課で部隊付執務官と、

この4人で編成されるフォワード部隊、ライトニング分隊の隊長も
やってます」

オレと同じくらいの年で分隊の隊長か、オレには無理だな。指揮力
はない。

「ハラオウンさん、時空管理局っていうのは次元管理局とは違うん
ですか？」

「フェイトさんでいいよ。そうだね、次元管理局とは大まかな役割
は同じなんだけど

時空管理局の方が規模はいくらか大きいよ。

あと管理する世界も分けられているんだ。異世界の数は星ほどある

からね」

「私はライトニング分隊副隊長シグナムだ。よろしく」

続いて先ほどやり合ったシグナムが短く自己紹介。

「自分はライトニング分隊、『エリオ・モンディアル』三等陸士で
あります」

そして子供コンビの内まず赤髪の子供、モンディアルが自己紹介し、
「同じく『キャロ・ル・ルシエ』であります。そしてこのこはフリ
ードリヒ」

ピンクの髪をしたルシエが紹介する。

ホントにちっこいヤツらだな、これで前線に出るフォワード部隊が
務まるのか？

「オレは『オルタナティブ』所属調律師、如月無月」

「同じく！如月祢音です！よろしく！」

なんか「同じく」の所、楽しそうに言うな。

「同じく如月奏です」

奏も合わせなくていいんだけど？

「エリオくんもキャロちゃんも私たちのことは名前で呼んでいいか

らね。

苗字だややこしいし。あと、そんな堅苦しくなくていいよ」

「わかりました。よろしくお願いします、柊音さん！」

「よろしくお願いします！」

「じゃあ自己紹介も済んだことだし、六課の隊舎に招待するね」

そしてオレたちはその隊舎に向かうこととなった。

鏡はハラオウンの手の中にあるまま……

第5話 「天照様の落とし物」 (後書き)

どうだったでしょうか？

まあ魔法繋がりでやってみたかっただんですが…。

このコラボシリーズはしばらく続きます。

次回もよろしく願います。

感想&評価待ってます。

第6話 「到着！機動六課」 （前書き）

キャラの性格や細かい設定とかは作者で勝手に決めさせてもらいますので、

読者の方々のイメージとは違う所があるかもしれませんが、どうかご容赦下さい。

第6話 「到着！機動六課」

「機動六課隊舎」

「おかえり、みんな。あ、この子たちがその魔導師だね」

機動六課という部署の隊舎に入ると1人の女性が出迎えてくれた。

茶色の髪を束ねて一つにしているが、ほどけばフェイトさんと同じくらいの長さになるであろう長い髪、

そして年齢もフェイトさんと同じくらい。

フェイトさんが着ている茶色のスーツと同じのを着ているということとはこれは制服なんだろう。

「うん。紹介するね。この人、『高町たかまちなのは』一等空尉。戦技教導官もやってるんだよ」

「話はフェイトちゃんから聞いてるよ。如月無月くん、祢音ちゃん、奏ちやんだね。」

高町なのはです。呼ぶときは、なのはさんでいいよ。みんなそう呼ぶから」

そう言って微笑む（ほほえ）顔はまさしく美少女（美女か？）、メデスが一緒でなくてよかったよ。いやマジで。

「よろしくお願いします」

そうして頭を下げる。

オレよりも年上だろうし、威厳というかオーラがあった。

オレなんて威厳もへったくれないからな。

「は、はい！こ、こんにちは！ね、柰音です！よ、よろしくお願いします！」

柰音、お前緊張しすぎな。

「奏です。よろしくお願いします」

そうして一通り挨拶が終わったところで

「じゃあなのは、後は頼むね。私は報告に行かなくちゃならないから。」

エリオとキャロもあがっていいよ」

「うん」

「「はい！」」

モンディアルとルシエはこの場を去り、そして残ったのはオレたちとなのはさん。

「というわけで、部屋まで案内するね」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「ここが無月くんの部屋で、こっちが柰音ちゃんと奏ちゃんの部屋。

聞きたいことがあったら近くにスバルとティアナ、

えーと…無月くんたちと同じぐらいの年の子の部屋があるからその
子に聞いてくれたらいいよ」

「わかりました」

「「はい」」

「機動六課隊舎・無月の部屋」

「ここの人たち、みんないい人だね」

柰音はふかふかのベッドに腰を下ろす。

隣には奏も座っている。

「そうだな。これで探し物も早く見つかりそうだ」

ちなみにオレは机の前の椅子に座っている。

そしてしばらく話し合っていると

「2人ともここにいたんだね。今大丈夫？」

突然何もない所に画面が表示され、それにはフェイトさんが映っている。

「はい」

「八神部隊長やがみが話をしたいそうだから部隊長室まで来てくれるかな？場所はこちら」

そうしてさらに新たなウィンドウが現れ、地図が映し出される。

「わかりました。すぐに向かいます」

「うん。待ってるね」

記憶した地図を頼りに部隊長室目指して隊舎内を歩き回る。

記憶違いの所がいくつかあって少し時間がかかったがどうにか部隊長室の前まで辿り着いた。

「ようやくだね」

「ああ、思ったより広いな。如月無月その他2名、入ります」

「その他って何よ！」

とか言ってる間に自動でドアが開き、部屋に入る。

「お、この子たちやな？遠慮せずに入っといで」

部屋の奥にはフェイトさんともう1人、部隊長が座るであろう椅子に手を招く1人の女性が座っている。

部隊長？この人がか？

その茶髪の女性はこれもまたフェイトさんやなのはさんと同じぐらいの年だ。

だが髪の長さは2人と違い、女性の髪にしては結構短い。

「部隊長の八神はやてや。よろしゅうな。」

早速やけどこの件について話させてもらうで。

この件は機動六課が担当するよう上には言うてみる。

ジェイル・スカリエッティ
JS事件の後始末も一段落ついたし、丁度今うちは手え空いてるしな。

君らの組織については上には黙っとくさかい安心し。

あまり話してくれてへんけど、悪いことはせんようやしな。

これからの事やねんけど、そのアイテムを探してそれで見つけ次第、フォワード部隊のスターズかライトニングと一緒にその世界へ行って、

回収してもらうことになるやろ。そのメンバーはこの8名。

するとはやて部隊長は部屋でフェイトさんが現れたときのように

何もないところから四角い画面をいくつか表示させ、

その一つ一つにそれぞれの顔、名前などのプロフィール、戦闘時の役割などが表示される。

その顔ぶれを見て気づいたんだがみんな若い。

オレが言うことでもないだろうが。

部隊長もこの年だし、案外すげえ所かもな。

「そうそう、こっちで回収させてもらった鏡はロストログアに指定されてた。

つまり、こっちで回収されてるロストログアの中に探し物が見つかるかもしれへんから——」

「遅れてごめんなさいです！」

突然後ろのドアが開く音がした。

振り返ってみるとかなり小さい（30cmぐらいか？）女の子が入ってきた。

「ええよりイン、今話そうとしてた所や」

「かわいい！何この子！？」

柀音は傍に蚊が寄ってきたときののように目の前を飛ぶリインとやらを捕まえる。

「わあっ！！ちょ、放してください！」

リインは柀音の手から抜け出そうと手を押すが意味はないようだ。

「放したってもらえるか？」

はやて部隊長はその様子に苦笑しながら言う。

「あ！ごめんなさい」

反射的に手を放すとピョン、と跳ねるようにリインが脱出する。

「ふう、ビックリしたですう」

「ごめんね」

祢音はリインに手を合わせて謝る。

「この子はリインフォースツヴァイ

（ちなみにツヴァイは英数字の2なんです）が機種依存文字なので表示できないそうです、

リインて呼んだって」

「よろしくです！」

「この子と一緒に保管されてるロストログアの一覧で探してくれるか」

「わかりました」

「ならもう終わりかな。異世界の搜索はうちに任してもらおうわ。

そのためなんやけど、落とし物の情報コピーさせてもらってええか？」

「いいですよ。それぐらいなら。どうぞ」

オレは腕輪を外すとはやて部隊長に渡す。

「ありがとな。

じゃあこの後、無月くんらはロストログア一覧から探すなりしといってもらえるやろか。

せやな、なのはちゃんの訓練でも受けてみてもええやろ。

フォワード部隊でやっとするし、連携も必要になるやろしな」

「では、リインとロストログア一覧を探そうと思うのですが」

「ん。ほなりイン。一緒に行ったってくれるか」

「はいです♪はやてちゃん」

く六課隊舎・廊下く

「案外気楽な感じだったよね。『軍』って感じがしなかったよ。他のトコもそうなの？」

そう称音が質問したリインはオレたちの少し前を飛んで閲覧ができる場所へと案内している。

「うーん。ここはちょっと特別かもしれないですね。全部が全部そうじゃないです」

「へえー。そういやリインちゃんって何なの？人間じゃあないよね？」

「そうです。わたしははやてちゃんが作ったユニゾンデバイスの管制人格です」

「デバイス？つまり道具ってことですか？」

そこに奏も加わり、質問をする。

「そーゆーことです。でも皆さんと同じように食べたり寝たりしますよ。」

ちゃんと軍の一員なんですから。ちなみに階級は曹長です」

「へえ」

とまあいろいろと質問をしている内に閲覧室に着く。

そして何の変哲もない机へ座らされる。

「こうやってまず画面を表示させます」

右手を翳^{かざ}すと今日何度か見たようにPCを立ち上げたときのような画面が表示される。

オレたちも同じように翳すと同じような画面が表示させる。

「こうやってしていくと………この画面が出てきます」

とリインのレクチャーを受けながらなんとか一覧を表示させる。

「多っ!? この中から探すのか!?!」

その数は3491。どんだけあるんだよ。しかもこれだけの数保管できるのか?

「大丈夫ですよ。検索機能がついてますから。ここは役割分担です

ね。

無月さんは高性能爆弾、柰音さんは四次元ポケット、奏さんは調合辞典、リインはバリア発生装置です」

「わかりました」

ピッピピッ……！

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

検索機能があっても数が数。検索に引っ掛かってくる数も少なくはない。

そして調べ始めて約45分……

「あ……。ありました」

「ホントか!？」

奏の前にある画面をみんなで食い入るように見る。

「ホントだ！一緒だね！」

祢音が腕輪から調合辞典を表示させ、照らし合わせる。

「間違いなしですね。はやてちゃんに報告して、これを引き取れるよう交渉してみます。」

私物ですからすぐに引き取れると思います」

そしてその後もしばらく続けて全て調べられたが、

結局一覧から見つけられたのは調合辞典だけだった。

「一つだけでしたね。私はこれからこの調合辞典について報告します。」

皆さんはこれからどうしますか？」

「そうだねえ。訓練してる所を見せてもらいたいな」

「そうだな」

一番に祢音が言ったのでオレも同意しておく。

「じゃあそこまで案内します！」

第6話 「到着!機動六課」 (後書き)

感想&評価待ってます。

第7話 「如月VS隊長陣」

「ここです！ ヴィータちゃん！」

手を振るリインの先にはヴィータと呼ばれた赤髪の女がいた。

しかも幼い。モンディアルやルシエと同じぐらいか、それ以上といってもそんなく上でもないだろう。

「おう、リイン。そいつらが例の魔導師か？」

「うわぁ！ かーわいー！」

柰音はそのヴィータに駆け寄ると頭を荒々（あらあら）しく撫でる。

「あたしを子ども扱いするなあ！！」

ヴィータはそう叫びながらもがき、離れさせる。

「あ、ゴメンね」

ヴィータはしょんぼりする柰音を一瞥（いちめつ）すると目の前に表示されている画面を見る。

そこにはさきほど会ったのはさん、モンディアルとルシエ、そして2人の女が映っていた。

…これが訓練なんだろう。

「じゃあはやてちゃんの所に行ってきますです」

「そういやお前らもあたしらと同じ部隊に入るんだってな。

丁度いい。力試ししてやろうか？」

ヴィータはニヤリと笑ってオレたちを見る。

「ああ、お前のようなガキがどこまでできるか楽しみだ」

なんかムカつくから挑発してやると

「言うじゃねえか。あとで泣きごと言うなよ？」

言ってる言葉は挑発にのってるのようなのだが言い方には若干の余じゃっかん裕が感じられる。

乗ってきたのかそうでないのか、わからないような感じで返してきた。

「なのは！キリがついたらあたしも入るぞ！あと例の魔導師も一緒だ！」

—わかったよ—

そして数分後……

—OK。終わったよ。入ってきて—

「よし、行くぞ。ついてこい」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「あ、来たね」

「おう。じゃあオレとなのはそっちは如月無月、祢音、奏の3人で。お前らは休んでていいぞ」

ヴィータは訓練を受けていた4人に声をかける

「「「はい!!」「」「」」

そしてどこかへ去って行った。

「あ、今から模擬戦？」

早速始めようというときに戦闘服に身を包んだフェイトさんが来た。

「そうだよ。どうしたの？」

声の調子からしてここに来たことはなのはさんにとっても予想外のようだ。

「わたしも、ライトニングの隊長として戦い方を見ておきたくてね」

「じゃあ奏ちゃんの相手頼める？」

「うん」

く無月SIDEく

「無月、お前の相手はあたしだ。

本気^{マジ}で来いよ。力試しなんだからなあ！」

赤い戦闘服に身を包んだヴィータは小さなハンマーを持ち、こちらへ突撃してくる。

オレはレーヴァテインを取り出すと、待ち構える。

ヴィータはオレの目の前まで迫ると、勢いをつけて振り下ろす。

右へステップし、そのまま回避すると上へ飛ぶ。

ビュン、と風を切る音がする。

「逃がすかよ！」

『シュワルベフリーゲン』

野球ボール大の魔力の弾がヴィータの周りに4つ出現し、ヴィータはそれを打つ。

魔力弾がオレへ襲いかかる。

『火球』

それに対し、オレは魔力弾と同じ数の火球を出現させ、コントロールし、相殺^{そくさい}させる。

「またその手か！」

またって……お前とやり合ったのは初めてなんだけどな。

「だったら……」

『ラケーテンハンマー』

ヴィータのハンマーの先端がドリルに、そしてもう片方が噴射口に変形する。

そしてドリルが回転し、噴射口から魔力が噴出する。

「受けてみる！」

そしてヴィータはハンマー投げをする時のように回転してこちらへ向かってくる。

「受けてみるか」

オレはシールドを張り、ヴィータの攻撃を受ける。

ぶつかり合って激しい火花を放っていたがしばらくするとシールド

に亀裂のはいる衝撃がした。

「ちっ」

『炎熱放射』

剣の切っ先を攻撃中のヴィータに向け、炎を放つ。

オレの放った炎に包まれたヴィータは炎の勢いに押され、離れる。

炎から解放されたヴィータの周りにはバリアが張られていて、煙がいくらかあがっている。

「危ねえ危ねえ」

ちっ、反応がいいな。

「もう少しやりあいてえが、新人たちとの連携を練習しておく必要があるだろ。」

同じ部隊で行動するしな。今回はこれで終わりだ」

なんだ、もう終わりか。

「言っておくが、あたしはまだまだ本気じゃねえぞ」

「わあったよ」

（柰音SIDE）

「じゃあ柰音はわたしと勝負だね」

「よろしくお願いします」

私は愛銃『フリーユゲル』を取り出す。

「うん。じゃあいくよ！」

『アクセルシューター』

なのはさんの周囲にいくつもの魔力弾が出現しました。

数は10個。一気に来たら全部撃ち落とせるかな？

「どこまでできるかな？」

魔力弾が一斉に動き始めました。

滅茶苦茶に素早く動いて眼で追うことで精一杯。

どうしよう……

「…なんてね♪」

視認できなくても空間ごと攻撃すれば！

カマイタチを起こすほど速い風を引き起こす空間を球状に広め、バ

リアのようにしました。

魔力弾が6つほど続けて攻撃してくるけど、風でかき消されていく。

「その魔力、なかなかやるね」

なのはさんは残りの魔力弾を消すと少し離れました。

「でも、これならどうかな？」

なのはさんの持つ杖の宝玉の部分にかなりの魔力が感じられる。

離れた所を見ると射撃、いや、魔力の量からすると砲撃かな？

受けきれるかどうか、力試しだね。

私は周りの風の魔力をさらに高めてさらに速くします。

『ディバインバスター』

そしてなのはさんの杖から砲撃が放たれました！

砲撃は私に直撃したものの周りの風でかき消されたり受け流したりしています。

「くうっ……！」

強い、さすがは隊長だね。でも、

「負けないよ！！」

銃をなのはさんがいるはずの正面、砲撃の中心に向けて構えます。

銃口に魔力を集め、さらに周りに使ってる魔力を少しだけ、銃口へまわす。

それによって周りの風で受けきれなかった魔力が内側へ入ってきます。

「サイクロンショット！ いっけえええ！！！」

銃に込めた魔力を風、竜巻に変換して放ちました。

竜巻はなのはさんの放った砲撃とぶつかりあっています。

そしてしばらくすると次第に両方とも消えてしまいました。

「こんなものかな。お疲れ様」

「ありがとうございます！」

その声に思わず頭を下げてしまう私でした。

く奏SIDEく

「よろしくお願いします」

「ん…じゃあ早速行くよ」

そう言い終わるとすぐにフェイトさんの姿が消える。

いや、消えたというより、音速で移動した。

「『トライデント…』」

魔力が感じられる……後ろ！

「…スマッシュ！！」

強大な魔力が放たれたとほぼ同時に私も音速で動きました。

私のいた所を3本放たれた極太の魔力の砲撃の内、1本が通過して
いきました。

そして私はフェイトさんの後ろに。

『ヤドリギ』

私がミステイルテインの切っ先をフェイトさんに向けると、

ヤドリギの蔓つるがフェイトさんの体に絡みつきます。

今回はただの蔓ではありません。絡みついた相手の魔力を吸い取る
蔓です。

「奏も使えるんだね、『ソニックムーブ』」

そうして笑う顔は余裕の笑みでした。

魔力は吸い取ってるはずなんですが……もしかして、吸い切れていない？

そして限界を超えた蔓は枯れるように散ってしまいました。

もっと改良が必要のようですね。

「スピード勝負、してみようか」

フェイトさんの持つ杖の形状が変わり、刃が魔力で構成された大剣になりました。

「いきます」

『『ソニックムーブ』』

私とフェイトさんは同時に動き始めました。

普通の人なら見切れないかもしれませんが音速で動ける私なら話は別です。

フェイトさんの姿がはっきり視^みえます。

そして多分フェイトさんの方も私が視えているはずです。

すれ違う度に刃を交え、それが何度も繰り返されます。

『まどろみの幻影』

4人、私の幻影を作り、フェイトさんを囲んで斬りかかります。ですが大剣のひと振りですべての幻影があっけなく消されてしまいました。

すると突然、音速で動き回っていたフェイトさんの動きがピタリと止まりました。

チャンスです。私は一気にフェイトさんへ向かい、剣を構えました。背後から斬りかろうとしたのですがフェイトさんは振り返り、簡単に私の剣を大剣で受け止めてしまいました。

「他のみんなも終わったみたいだから、私たちも終わろっか」

「はい。わかりました」

何もできなかったのが少し癪しゃくでしたが、ここは気にしないでいることにしました。

く無月SIDEく

「みんなおつかれ。3人の力は予想以上だったよ。これなら安心して組めるね」

全員が集まった所でなのはさんが言った。

「さて、これから訓練するわけだけど、スバルとティアナは自己紹介まだだったね。今からして」

そう指名された2人はオレたちと向かい合った。

「スターズ分隊、『スバル・ナカジマ』二等陸士です！」

まず青髪に白いハチマキをしたナカジマが、

「同じく『ティアナ・ランスター』です」

続いてオレンジの髪を2つに結んだランスターがそれぞれ自己紹介した。

そしてオレたちは訓練を開始した。

訓練は模擬戦や基本の確認などが主体だった。

祢音と奏は最初からナカジマたちの事をファーストネームで呼んでいたが

オレだけはファミリーネームで呼んでいた。

だがオレだけがファミリーネームで呼ぶのも何なので訓練の途中からファーストネームで呼ぶようになった。

スバルたちもオレたちが年上だったせいもあり、

『さん』付けではあったがファーストネームで呼び合い、次第に仲良くなっていた。

第7話 「如月VS隊長陣」 (後書き)

感想&評価待ってます。

第8話「娘とスパゲッティと吸血鬼と」(前書き)

実はミスって闘争曲の方で投稿してしまいました(＞＜)
申し訳ないです。

全くもってふがいない！

今後二度とないように注意します。

第8話「娘とスパゲッティと吸血鬼と」

〽六課隊舎・シャワールーム前〽

現在オレはシャワールームの前で壁にもたれかかっている。

そしてその隣にエリオがいた。

女性陣は訓練の汗を流すためにシャワールームに今もまだいる。

オレたちの方が早く外に出てくることになり、

しばらく待っているのだが、まだしばらくは待つことになりそうだ。

「無月さんが来てくれてよかったです」

「ん？なんでだ？」

オレは体勢を変えずに視線だけをエリオに向ける。

「フォワード部隊はぼくだけが男性でしたから…」

「あゝなるほどな」

考えてみれば全員女なんだな。

メデスを連れてこなくて本当によかった。

「どうして笑ってるんですか？」

言われるまで気づかなかったがどうやらオレはニヤけていたようだ。

「いや、オレの仲間に女好きなヤツがいてな、そいつだったら喜びそうだな、と」

「そうなんですか。でもおもしろい人なんでしょうね」

「連れてこなくてよかったと思ってる。あいつを見ればエリオもそう思うさ」

「ははは……」

「なのはママ知らない？」

急に下の方から声がしたので下を向くと、1人の小さな女の子が見上げていた。

不思議なことにその子は左右の眼の色が違っていた。

どうしたものかと考えていると横からエリオが、

「なのはさんなら部隊長室だよ。その内戻ってくるから部屋にいるといいよ」

と言ってきた。

「うん。そうする」

エリオの提案に大きく頷くと、ててて、と走って行った。

その方向をずっと見ていると

「『ヴィヴィオ』です。なのはさんとフェイトさんのお子さんです」

あの年でか!!???

てゆうかあの2人のか!!??

2人とも女性だろ!?

オレが眉をかなりひそめたのに気がついたのかエリオが慌てて

「お子さんといっても本当のお子さんじゃないですよ!」

と訂正する。

「そ、そうか…」

オレはまだヴィヴィオの走っていった方向を見ていた。

（六課隊舎・食堂）

現在フォワード部隊のほとんどが食堂で食事をしている。

「訓練って楽しいね♪食べ物もおいしいし」

と言いながら夕飯を食していく祢音に

「お姉様、食べ物をお口に含みながら話すのはお行儀が悪いですよ」
と注意する奏。

「はい」

さらに祢音と奏の向い側には

「ほらスバルもおとなしく食べなさいよ」

「でもたくさん食べないと大きくなれないよ」

「おとなしく食べなさいって言ってんのよ。別に食べる量を減らせなんて言っていない」

同じようなやり取りを行うスバルとティア。

「賑やかなところだな。ここは」

「そうですね。無月さんのところは違ったんですか？」

オレと同じテーブルを囲むキャラが訊^きいてくる。

「そうだなあ…。あいつらという時は賑やかだけど、人によっちゃあ暗い事もあるな」

「そうなんだ。ねえ無月くんたちのいた世界ってどんな所？」

今度はオレの左側に座るフェイトさんが訊いてきた。

「フェイトさんたちと同じ、『地球』と呼ばれる星にいますけどまったく同じ世界ではないみたいですね。でも環境や文化はほとんど同じだと思いますよ」

そう言ってからオレは真ん中の山盛りのスパゲッティを自分の皿に移す。

（六課隊舎・無月の部屋）

夜中、異常な喉の渇きによって急に眼が覚める。

この感覚は……血か。

オレは一度死にかけ、そこから助かるためにアカシャの一族である吸血鬼の血を得た。

そこで一命を取り留めたが、吸血鬼という化け物になってしまった。

まあ本当に吸血鬼になるのは血を吸った後しばらくだけで、

吸っていない時は血の欲求がある以外は普通の人間だ。

こうして数日に一度血でしか潤せない喉の渇きがやってくるのだ。

いつもは祢音が奏に血をもらっているの、今夜も祢音たちの部屋に行くことにした。

放っておけば血の欲求に支配され、血を求めて暴走することになるからな。

「今夜はひどいな。もう意識が薄れてやがる」

く六課隊舎・祢音と奏の部屋く

ロックを解除し、扉の開く音以外何も音を立てず、オレは祢音のベッドまでやって来た。

祢音はだらしなくパジャマをはだけさせたまま、仰向けで寝息を立てている。

もう少し大人になってくれ。

だが祢音の露出した肌は外の光を浴びてかなり白く見え、オレを誘惑する。

もう我慢できなくなった。

オレはベッドに乗り、祢音に跨る。またが

そしてゆっくりと顔を近づけ、祢音の首筋に歯を立てた。

「!？」

その痛みに柰音はすぐに目を覚まし、血を飲んで吸血鬼化し、眼の色が紅^{あか}くなったオレの顔を見る。

その顔には苦痛や恐怖は見られなかった。

いつものことだからもう慣れているようだ。

ゴク……ゴキュ……ゴク……

そうしてオレは音を立てて喉の渴きを癒していく。

「はい、ストップ。これ以上はわたしがダメになっちゃうよ」

柰音は奏を起こさないように囁^{ささや}いて表情をそのままに、

オレの頭を自分の首筋から少しだけ引き離して眼を合わせる。

「ああ………いつも悪いな」

オレは最後に首筋に取り残した血を舐めると自分の口を拭^{ぬぐ}う。

「しょうがないじゃない。そーゆー身体なんだし」

「ありがとな。…じゃあおやすみ」

オレはベッドから離れ、扉へ歩き出す。

「うん。おやすみ」

かすかな声を聞いて、オレはその部屋を出た。

第8話「娘とスパゲッティと吸血鬼と」(後書き)

感想&評価待っています。

第9話 「捜し物発見! その1」

〽六課隊舎・談話室〽

朝食後、訓練開始までの空いた時間にオレは奏に談話室に来るように言われた。

「昨晚お姉様の血を吸いましたね？」

談話室に誰もいなかった頃を見計らい、奏はオレにそう言った。

「ああ、吸ったよ。起きてたのか？」

別に隠すことでもなかったのであっさり認めた。

「……いえ。ただ、お姉様の首筋に傷があったので。そう思っただけです」

「そ。で？それがどうした？」

「無月が吸血鬼になった時、私言いましたよね？無月の餌になるって」

「言っただけ」

「だったら私の血を吸ってください」

「今までだって奏の血を吸ったことあるだろ？」

「ですがお姉様の方が多い気がします。

私はお姉様に負担をかけさせたくないですし、その覚悟を無駄にしないでください！」

初めの方はいつもの調子だったが言い始めて止まらなくなったのか、最後の方では声を荒げている。

まあ普通の人と比べると荒げているとはいえないかもしれないが。

オレはその様子に驚き、少しの間奏を見ていたが

「わかった。今後は奏のも吸うようにするよ。

だが祢音のも吸う。1人だけに負担をかけるわけにはいけないからな」

と答えた。

「わかりました」

それに奏はそれだけ言うとか背中を向けて祢音の待つ、自分の部屋へ戻って行った。

オレの返答に納得したかどうかはわからない。

「んゝ相変わらず普段何考えてるかわからんヤツだな」

言ってもらわなきゃ気づかないオレもどうかと思うけど……

少し間を置いてオレは奏の去った方へ歩き出した。

なんだかんだやっている内に1週間が過ぎてしまった。

六課での生活にもほとんど慣れたものの、

全く捜し物を発見したとの報告がないまま時間が過ぎていったので、
捜し物の件は当たり外れがあっても

自分たちで捜した方が早いんじゃないかと心配していた頃だった。

その日、訓練を始めてまもなく、はやてさんから通信があった。

「無月くんたちが捜してるアイテムの一つのバリア発生装置が見つかったそうや。」

今回はスターズだけで行ってくれるか？――

「了解。じゃあスバルとティアナ、あと……」

そうしてなのはさんはこちらを見る。

「私だけ行きます！」

そこで祢音が手を上げて立候補する。

「いいのか？何ならオレたちも行くぞ？」

「いいの。あまり多くてもダメだし、

それに同じ銃を扱う者としてティアちゃん、それになのはさんの実戦見てみたいしね」

祢音は奏の耳元に口を寄せ、

「お兄ちゃんの事、任せたよ」

と囁いた。

「わかりました」

「じゃあスバルとティアナ、そして祢音は出動準備をしてね。ライトニングと無月たちは……」

「少しの間ならわたしが訓練するよ。今丁度空いてるし――」

突然フェイトさんからの通信が入る。

「ありがと、あとは頼むね。私はもう行くけど、これからフェイト隊長が来るから待っててね」

「」「はい！」「」

（称音SIDE 異世界）

「さて、到着」

そんなわけでなのはさんとスバルちゃんとティアちゃんとヴィータちゃん、

そして私で構成されたスターズは異世界に到着したんだけど…

「きゃっ！」

私たちの来た場所は砂嵐が起こっているようで眼が開けてられないほど風と砂が飛んできます。

「くっ…」

私は眼を閉じ、顔に降りかかる砂を腕で防ぎながら魔法で風を起こしました。

私たちの周りだけ、風や砂が来ないようにするためです。

「ありがと。助かったよ」

「うん」

「なのは隊長、今は建物に隠れた方がいいと思うぞ」

「そうだね。このままじゃあ搜索は難しそうだし」

眼が開けられるようになって気づいたんだけど、

どうやらここは日本の都会部分に似ている。

でも建物とかの荒廃が激しくて人の気配は感じられない。

なんとか風がしのげる小さなビルのような建物を見つけた私たちはその建物の中に入りました。

「砂嵐が止むまでに作戦の確認をしておこうか。ここにあるのはバリア発生装置」

「これですね」

私はそこで腕輪からその画像を表示させました。

「そう、これ。この辺りにあるはずだけど見ての通り今は砂嵐で視界がすごく悪いからおさまってから搜索開始。

デバイスにはそれぞれアイテムの表示と反応感知機能がついてるから、それを確かめながら搜索して。

腕輪と同じ機能だから反応があるとわかってても方向まではわからないから注意してね。

スバルとティアナは地上で搜索」

「はい」

「わたしとヴィータ副隊長は空から搜すね。祢音も空から搜してく

れる？」

「了解だ」

「はい」

そしてしばらくすると砂嵐が収まったので最初に確認した通りにそれぞれ散っていきます。

さうて、どこへいったものかねえ…

なんて思いながらふらふらとしばらく探しているとスバルちゃんから通信が入った。

怪しい場所を見つけたみたい。

私はUターンしてスバルちゃんの所へ向かいました。

私が着くともうみんな揃っていました。

「おまたせ！で？その怪しい場所ってのは？」

「ここだ」

ヴィータちゃんがグラーフアイゼン（ヴィータちゃんの武器ね）で指す先には地下へと続く階段がありました。

「地下鉄の駅に行くための階段だよね？」

地下鉄は水月島にはなかったけど本土や異世界で何回か乗ったことがあります。

「そうだろうね。ここから反応があるんだね？」

なのはさんは第一発見者のスバルちゃんに確認をします。

「はい、周りを回ってみたんですけどどこも反応が微妙で。」

だったら地下か空にあると思ったんで、ここじゃないかって」

「あたしはこの辺の上空を探してたが目立った反応はなかった。なら地下だろうな」

「じゅっちゅっはっく十中八九ここにあるってことですね」

「私もティアちゃんと同じ意見だよ」

「じゃあ行こうか」

そのなのはさんの声で私たちは地下へ入りました。

く地下く

「え？」

私が地下に降りて最初に言った言葉でした。

「ちょっとおかしいよね」

なのはさんも同意してくれたみたい。

「ただの地下じゃねえ。くさいな」

地下に入るとそこに券売機や改札口はありませんでした。

広い廊下と分かれ道だけだけど、壁や床の素材はちょっと違うかも。

壁はコンクリートにしてはそれよりも少し頑丈そう。

とにかく、駅にあるようなものじゃないです。

まるでどこかの悪者のアジトみたい。

「気をつけた方がいいね」

「お出迎えみたいですぞ」

奥の角を曲がって見えたのは結構な数の人型のロボットでした。

手には機関銃みたいなのが。どうやら荒っぽいお出迎えみたい。

「こんな相手にケガすんじゃないぞ」

「「はい！」」

あら、私まで。…染まってきちゃったみたいね。

『アクセルシューター』

『シュワルベフリーゲン』

『リボルバーシュート』

『クロスファイアシュート』

『サイクロンショット』

一度に多くの敵を撃破できる技を中心に攻撃していきます。

てなわけでとりあえず一掃しました。

ちなみにみんな無傷です。

「よし、行くぞ！」

行く道には所々にロボットがいたけど数も少ないし難なく倒していきます。

けれど道は迷路みたいでクネクネと動き回っています。

「あ！シャッターが！」

ある曲がり角を曲がってすぐシャッターが閉まっていくのが見えませんでした。

上の看板には階段だとわかるマークがついています。

でもシャッターの閉まるスピードには多分追いつかない。

しかも両サイドからロボットが現れて、さらにシャッターの前にも現れます。

「スバル！頼んだよ！」

「はい！！！」

「ティアナと祢音はスバルの援護！両サイドはわたしとヴィータ副隊長で抑えるから！」

「「はい！！！」」

私は右側の、ティアちゃんは左側のロボットをそれぞれ撃っていきます。

私たちの両サイドは隊長たちが抑えていてくれるので心配なく撃ちまくれました。

そしてロボットの残骸の中をスバルちゃんが突き抜けていき、構えます。

「はあああつ!! 『リボルバーシューート』!!!」

スバルちゃんの繰り出した拳から衝撃波が放たれ、見事シャッターは碎かれました。

「よし、じゃあ下に降りようか」

下に降りても光景は全く一緒に、しばらく進んでみましたがやっぱり迷路のようでした。

「まあこんなもんなんだろうけどねえ…」

「どうしたの？」

隣で走っているスバルが訊いてきました。

「いや、なんでも」

今隊長たちは傍にいません。

あまりに広いということで、別れて捜すことにしたんです。

隊長たちは1人で1組。私とスバルちゃんとティアちゃんでも1組です。

「来たわね」

目の前にはまたロボットに小型の戦車のようなものが現れました。

地下1階と時とは違って武器や装甲も強化してあるみたいで、

隊長たちみたいに傷一つなく、というわけにはいなくなってきました。

でもまだ余裕はあります。

「うわ！ 囲まれてるよ！」

わらわらと敵が出てきて私たちはあつという間に囲まれてしまいました。

「ティアちゃん、いくよ！」

私は今もっている『フリーユージェル』とは別のもう1丁の銃、『レリーフ』を取り出しました。

「スバル、伏せてて！」

スバルちゃんが伏せた瞬間、私とティアちゃんは互いとカバーし合うように色んな方向に撃っていきます。

訓練中に同じ銃使い（しかも2人とも2丁使える）ってことで、

連携や気づいた所など教えてもらったり教えたりして毎日訓練をしていきました。

同じ所を撃つこともなく、ちょっと危ない所もあったけどなんとか全部倒せました。

「付け焼刃^{やきば}、ってやつにしちゃ結構うまくできたね」

「そうね。でも満足してられないわよ。ミスがいくつかあったし」

「厳しいねえ。ティアちゃんは」

「あ、なのはさんが階段見つけたってさ」

「じゃあ行こか」

何回降りたことやら、地下5階ぐらいかなあ。

それだけ降りても出てくるのはロボットばかりかし。人間なんて1人もいない。

ロボットも強くなってってるし、これ何の隠しダンジョン？

最後にはレアなお宝があったりして。

あ、それがバリア発生装置か。

「ようやく到着ですね。…ん？バリアで守られてるあの赤い宝石って何ですか？」

少しボロボロ気味になってやっと最深部に到着したわけなんだけど、バリア発生装置は赤い宝石を守るように赤いバリアを張っていました。

「あれって…」

「『レリック』ですね」

「レリック？」

「私たちが前に扱っていた事件に深く関わっていてね、六課はレリック専門に回収していたんだよ。」

強大な魔力を持ったかなり危険なロストログア。気をつけないと」

「そうなんですか」

お宝はこれってわけね。おっと、不謹慎ふきんしんかな？

「このバリアは結界型ではないので普通に破壊してもいいハズです。でも中にレリックがあるとあまり無茶苦茶なことはできませんね。」

そのまま勢い余って衝撃を与えてもしたら……」

「問題ないよね？ヴィータ副隊長」

「おう、当たり前だ。離れてろよ」

ヴィータちゃんはバリアの方へ近づくと先端をドリルにしたハンマーを振りあげます。

ドリルが勢いよく回転し、ヴィータちゃんはそれをバリアに叩き込みます。

激しい火花を散らしますがバリアは壊れる気配をみせません。

「……くっ…硬いな…」

だけど粘り強く続けていくと次第にヒビが入り、そしてバリアは破壊されました。

ヴィータちゃんはドリルがレリックに接触する前に器用に振り抜きました。

「ありがとうございます」

私は辞書ぐらいの大きさのバリア発生装置を回収し、なのはさんたちはレリックを回収します。

ビービービービー

すると警報のようなサイレンと一緒にアナウンスが聞こえてきまし

た。

―研究所爆発まで、あと5分―

「「ええええええっ!!??」」

声を合わせて驚いたのは私とスバルちゃん。

「今から戻る時間はないですよ!」

さうて、どうしたものかねえ。

あ、転移魔法でも使えばいいか。

「大丈夫だよ。一直線に外へ出られるから」

私が転移魔法を使えばいい、と提案する前になのはさんは言いました。

「そうか! その手がありましたね!」

「少し離れてて」

なのはさんは杖の先端を斜め上の天井へ向けます。

そしてなのはさんの足下に魔法陣が展開されました。

「?..?」

「『ディバイン………バスター』!!!!」

杖の先端から砲撃が放たれ、それは天井を破壊していきます。

「……………」

なにそれ。

「すごい……見事な吹き抜けができましたねえ」

なのはさんの砲撃した場所から上を向くと茶色い雲が見えました。

ここまでの砲撃、私だけじゃあできないね。

天使か悪魔の力を借りなきゃ。

しかもあまり知られるわけにはいけないから頻繁に使えないし。

「スバルちゃんたちは飛べるの？」

なのはさんたちが先に飛び立った後、私は聞きました。

吹き抜けだから階段とかもないし。

「大丈夫です。スバル」

「うん。『ウイングロード』！」

スバルちゃんが拳を地面に叩き込むと蒼い道が外に向かって伸びていきました。

「おお!! そういやそれがあつたね!」

スバルちゃんたちはそれに乗って外へ走って行きました。

「世界は広いねえ。色んな魔法があるもんだ」

私も後に続いて外へ脱出し、無事に機動六課へ戻りました。

第9話 「捜し物発見! その1」 (後書き)

感想&評価待ってます。

第10話 「機動六課の休日」

（無月SIDE）

「お疲れ、なんだ案外ボロボロじゃねえか」

ようやく帰ってきた祢音たちは思ったよりケガをしていた。

まあ、なのはさんとヴィータはほとんど無傷のようだが。

さすが隊長副隊長と言った所なのだろうか。

「お姉様、大丈夫ですか？」

そんなに大事でもないのに、奏は慌てて祢音の傍に駆け寄る。

そして治癒魔法を使って祢音の顔の傷に合わせて指でなぞり、その傷を治癒する。

「こらー！っ！！奏ちゃん！！！」

その声に振り向くと白衣を羽織った女性が怒りを露わあらにして走ってきた。

女性の名はシャル。

六課の主任医務官で、一緒に飯を食べた事が何回かあって覚えてい

「シャ、シャマル先生…」

奏はおもしろいように体をビクツとさせると恐る恐る振り向く。

「ここで治癒魔法は禁止って言ったでしょ！

魔法で治すより、自然治癒の方が体に負担がかからないの！」

切り傷一つ魔法で治癒したぐらいで、とは言わない方がいい。

曰く、程度より行動自体が重要なのだ。

「はい……すみません」

シャマル先生は丸く縮こまって頭を下げる奏を見る。

「今後は気をつけてね」

どうやら許してもらえたようだ。

「それじゃあケガした人は医務室へ行きましょ」

シャマル先生に先導されて祢音、スバル、ティアは医務室へ向かった。

「ふふ…じゃあ私たちは今回の件、はやてちゃんに報告してくるから」

「はい」

なのはさんとヴィータも去り、残ったのは医務室の方面を見つめる奏とオレ。

「んじゃ部屋戻って、祢音の帰りでも待とうぜ」

「はい…」

く六課隊舎・無月の部屋く

「あ、ここにいたんだ」

しばらくすると絆創膏ばんそうこうを右手の甲に貼った祢音が入ってきた。

服に隠れている分もう少し貼られているだろう。

「おつかれ」

「お疲れ様です。お姉様」

「うん。ただいま♪」

祢音はオレのベッドに座る奏の隣に同じように座る。

「明日は訓練はお休みだそうですよ。今日の分はフェイトさんの指導で午前中で終わらせました」

「じゃあ明日はのんびりできるね」

（翌日・六課隊舎・無月の部屋）

「さあて、どうしようかねえ」

「市街地に行くにしても案内役がいらないんじゃない」

スバルとティアナは健康診断みたいなもの、と2人だけで市街地へ。

エリオとキャロはデート。

まあ本人たちは否定していたが。

「そうだ！じゃあ隊長の誰かに案内してもらえばいいじゃん！」

柊音は顔を明るくさせてオレを見る。

「は！？忙しいから無理に決まってんだろ」

「聞いたの？」

「いや、聞いてない」

「ならわかんないじゃない！行こ、奏ちゃん」

「はい」

祢音は奏の腕を引っ張って、善は急げと言わんばかりにさっさと部屋を出ていく。

「はぁ、しかたねえな」

そしてオレも部屋を出て行った。

く六課隊舎・なのは、フェイト、ヴィヴィオの部屋く

コンコン

「如月一同入りまーす」

一同って……

「はい」

そんな祢音の声に幼い声が返ってきた。

それで声の主がヴィヴィオだとすぐにわかった。

「ヴィヴィオ入るねー」

そして部屋に入るとヴィヴィオと寮母の……確かアイナ・トライトンだけか。

あと犬……じゃなくてザフィーラ。

なのはさんとフェイトさんはいないようだ。

「あれ？ママたちは？」

ヴィヴィオが柰音の下に駆け来て後、柰音はしゃがんで訊く。

柰音とヴィヴィオはここ1週間ぐらいで仲良くなっていた。

普段そんなに幼い子といることなんてないのに、いつの間に扱い方を知ったんだ？

遊びに行く時は奏もいつも一緒だったみたいだから奏とも仲が良いようだ。

まあオレはたまについていくだけだから2人ほど親交は深くないが、

一応友達として認識してくれているようだ。

「ママたちはお仕事」

「そっかあ。じゃあ私と遊ばない？」

「うん♪」

柰音の提案に同じ調子でヴィヴィオは答えた。

「ごめんね、ザフィーラ。遊び相手とっちゃって。それとも一緒に行く？」

するとザフィーラはその体勢のまま首だけを振った。

「そ。じゃあアイナさん、ヴィヴィオと遊びに行ってきますね」

「はい。よろしく願いします」

祢音は上にいるアイナさんに声をかけ、手をつないで笑顔で部屋を出て、それにオレと奏もついていった。

く六課隊舎・庭く

目の前で祢音、奏、ヴィヴィオの3人がゴムでできたドッジボールで遊んでいる。

オレはというと近くのベンチに座ってぼーっとその様子を眺めている。

さっきまでは一緒に遊んでいたがもうだらけた。

それよりも奏、もう少し笑顔で遊ぼうぜ。

何十分経ったか…そろそろ腹が減ってきたなあを思った頃、

「ありがと、ヴィヴィオと遊んでくれて」

後ろから声がして振り向くとなのはさんがいた。

「いや、礼ならあの2人に言ってくださいよ、ずっと相手してますから」

オレは視線を3人へと戻す。

「無月くんだって遊んでくれてたでしょ？窓から見えてた。結構楽しんでるようだったよ」

「いや……まあ……楽しかったですけど……」

そこでヴィヴィオがなのはさんに気づき、ててて、とやって来る。

「ママ！」

「ヴィヴィオ、遊んでもらってよかったね」

「うん♪」

柰音と奏も追いついた。

「ありがと。遊んでくれて」

「いえいえ、楽しかったですから」

「そうだ。お昼一緒に食べる？丁度休憩時間だから」

「はい！喜んで！！」

く六課隊舎・食堂く

「なのはさんは午後も仕事ですか？」

5人でテーブルを囲み、柰音は隣のはさんに尋ねた。

「うん、書類整理とかね。何か用事？」

「いえ、別に！仕事でしたら」

「そう、何かあったら言ってね」

「はい」

やはり無理だったな、柰音。

く六課隊舎・無月の部屋く

「あゝあ、なのはさんは仕事だし、フェイトさんはどっかに行ってるし」

はやてさんも仕事だろうし、何かおもしろい事ないかな」

と、呟くのだが期待通りにはいかず、何も起こらず淡々と時は過ぎていくのであった……

第10話 「機動六課の休日」 (後書き)

無月たちがなのはたちに勝てるヴィジョンが見えません…
感想&評価お待ちしております

第11話 「捜し物発見! その2」 (前書き)

そろそろリリカル編も終盤ですよ。

第11話 「捜し物発見! その2」

〽六課隊舎・無月の部屋〽

ピピピ…

次の日の午後突然それは鳴った。

「通信だな」

このアラームは本部からの通信の合図。

「はい」

―丁度手が空いたのでソルダート姉弟に捜し物搜索の命を下した所、3時間前、捜し物を3つ見つけたとの報告が入りました。そちらはどうですか?―

「「げっ!」」

オレと祢音が同時に同じ言葉を言った。

―ということは3つは見つけていない、ということですね?―

「まだ2つです…」

と答えたのは祢音。

—そうですか：—

隊長の声には怒りや呆れはないがどこか恐縮してしまう。

—回収次第連絡をしてください。

ソルダート姉弟を引き揚げさせますので。

逆の場合もありますが…。さて、どちらが一体早いやら。それでは—

「行くぞっ！」

「うん！」

通信が切れるやいなやオレと柝音は走り出した。

奏も無言ながらついていく。

別に2人に対抗意識はないんだが、後に任務についた2人の方が3つ先に集めたというのは

2人の方が優秀だということになる。それは許せん。

（六課隊舎・部隊長室）

「「はやてさん!!」」

部隊長室のドアが開くと、そこにいたのははやてさんにフェイトさんだった。

「なんやタイミングのええこっちゃなあ。今その捜し物が見つかったって話してた所や」

「そうでしたか」

「見つこうたのは超高性能爆弾。一番高いビルの屋上に置いてあるそうや。」

回収しに行こうとしてもなんかおるようで回収できてへんようや。

反応があつたのは市街地やったからその周辺の住人は避難させた。

せやけどできる限り爆破は防いでほしい。建築物の問題もあるしな」

「残りの捜し物は仲間が見つけてくれたんで、あとはそれ一つです」

「そうか。今回はライトニングに無月くん、奏ちゃんで行ってもらう。」

フェイト隊長、連絡よろしくな」

「はい」

〳六課隊舎・廊下〵

「私はシグナムたちに連絡するから無月と奏は部屋で用意して、集合。いいね」

「はい」

オレの返事と同時に奏は無言で頷く。

「じゃ、また」

廊下でフェイトさんと別れたオレたちは部屋に戻り、

いつもの黒いコートを着るなど準備して集合場所へ向かった。

く異世界く

「誰もいませんね」

「住人の避難はできてるみたいだね」

ビルの屋上から街を見渡してもこれだけの都市なのに人間どころか生き物すら見当たらない。

「さて、早く爆弾を見つけねえとな。一番高いビル…」

「あれみたいですよ」

振り返ってキャロの指さす方向を見るといまいるビルの屋上からでもてっぺんが見えないほど大きいビル。

『ビル』というより最早『塔』と言った方がいいかもしれない。

「これを一番上まで行くわけか」

「行くよ」

「」「はい！」「」

「きゅくるー！」

『竜魂召喚』

キャロの召喚魔法によってフリードは初めて会った時のような大きな竜となる。

そしてエリオとキャロはフリードに跨り、飛び立つ。

「何か…いますね」

てっぺん目指して飛び立ってすぐ何かの影が何体も見える。

あれがはやてさんの言っていた『なんか』なんだろうな。

「敵…」

奏の言う通り、敵意剥き出しの魔術師…いや、魔法使いがいる。

「管理局の魔導師ではないな」

シグナムがそう言うんなら間違いないんだろう。

「なら容赦無しでいきますよ」

「無闇に殺しちゃだめだよ」

「わかりました」

フェイトさんの許可も得、オレが敵陣へ行こうとすると

「無月さん、待って下さい！」

キャロに呼び止められる。

「フリード！『ブラストレイ』！」

フリードから激しい炎が放たれ、ヤツらを包み込む。

確かに一人一人つぶしていくより手っ取り早いな。

だが突然炎の中からフリード目掛けて魔力砲が放たれた。

なんとか避けたものの、急に激しい動きをしたせいでキャロが振り落とされてしまった。

「キャロ！！」

一緒にフリードに跨っていたエリオがそのままフリードと共に救出に向かう。

さらにフェイトさんも続く。

上に注意しつつ、下を見るとキャラが無事に助け出されたのが見えた。

「ふう……行くぞ奏！」

改めてオレと奏は敵陣へ突っ込んでいった。

ヤツらには近・遠距離戦闘専門の魔導師がそれぞれいるようで

オレたちが近づくと剣などの武器を持ったヤツが前へ、

杖を持ち魔法で攻撃するヤツは離れてそれぞれ攻撃をしかけてくる。

オレや奏は剣を使った戦闘をし、魔法は補助程度にしか使っていない。

エリオたちも追いついてそれぞれ戦闘を開始する。

相手も数が多いってんでフェイトさんは鎌状態のバルディッシュを振るしつつ、

射撃も行うし、シグナムは連結刃でまとめて攻撃していく。

危ねえとは思ったがさすが隊長、全く同士討ちすることもなく戦闘が続いている。

「無月…」

たまたま奏に近づいた時、奏がオレの名を呼んだ。

「どうした？」

「戦闘が楽です…」

「やっぱりそう思うか」

しばらく戦闘しているが集団での戦闘にも関わらず、いつもより疲労が少ない。

「無駄な動きもない…」

「それに訓練漬けの毎日だったからな。体力もついてるんだろ」

普段こんなにハードな訓練しなかったからな。

それに動きの型なんてその時次第だったし。

魔力もより器用に扱えるようになってる気がする。

戦技教導官という名は伊達じゃないということか。

少し時間が経過した。

重傷を負わせたヤツは退いていくのだが新たに來ているのか、数が

減ったという実感はない。

それどころか遠方に援軍らしき集団が見えた。

「まだ出てくるのか」

うんざりするな。

「テストロッサ、私とエリオ、キャロは増援を潰しに行く。そちらは任せた」

「はい。お願いします」

そして3人と1匹は援軍の出てきた方向へ進む。

――一気に突破した方がいいんじゃないですか!?!――

オレは念話で遠くのフェイトさんへ呼びかける。

こいつらがその捜し物を守っているなら、それさえ取れば戦闘は終わるはず。

その考えはフェイトさんも一緒だったのか

――そうだね。キリがなさそうだし。私はここを抑えてるから無月と奏で行ってくれる?――

――1人で大丈夫ですか?――

念話に奏が割り込んでくる。

―大丈夫、これでも隊長なんだよ？安心して行ってくるといいよ―

―はい―

「頂上だな」

屋上のヘリポートの真ん中に直径1mぐらいの球体があった。

これがその高性能爆弾ってわけか。

まったく、やっかいな物を造ってくれた。

「さっさと回収するぞ」

早速回収しようと動き始めたが

「ちょっと待った」

目の前に他のヤツらとは一風違った男が現れた。

「お前が天照様を襲撃したヤツか」

「それはどうかな」

男はとぼけるように空を見る。

「それはともかく、さっさと持っていきなよ」

「どういうことだ？」

「その内わかるさ。じゃ、僕はここで」

そういうと男は次元転移した。

「何だったんですか？アレは」

「さあな、まあこれで回収できる」

オレたちは高性能爆弾に近づくとその最後の捜し物を本部へ送った。

「フェイトさん、回収しましたー」

その後すぐさま連絡する。

ーありがと。魔導師も退いていくよー

屋上から飛び立ち、下を見ると魔導師たちはほとんどいなくなっていた。

シグナムたちも合流し、さて帰ろうかとした瞬間

オレのしている方向遠くから銃声もなく、銃弾が3発放たれたのが見えた。

おそらく狙いは目の前にいる奏。

銃弾に対して奏は背中を向けているからか

それとも戦闘が終わって一安心したからか気づいていない。

そんなことを考える前にオレは奏を突き飛ばし、変わりにオレが銃弾を受けることになった。

すぐそこまで来ていたので出来合いのシールドを張るしかなかった。

銃弾はシールドを難なく貫き、さらにはコートまで突き破る。

中途半端に強かったせいで銃弾は貫通せずにオレの体内で止まってしまったようだ。

一瞬だったが見た限り、銃弾に魔力をコーティングしてあるように見えた。

「「無月さん!!」」

まずエリオとキャロが悲痛な声をあげる。

突き飛ばされた瞬間の奏は状況を理解できず、目を丸くしていたがオレが身代わりになって銃弾を受けたということを理解した瞬間奏はオレの名を叫んだ。

「無月!!」

「逃がさない」

『ソニックムーブ』

フェイトさんは一瞬で状況を理解し、銃弾が放たれたであろう場所へ向かう。

「無月！無月！！」

奏はオレの意識を保たせようとしているのか、両肩を持つと前後へ揺らしながら叫ぶ。

「揺さぶるな！」

シグナムの声で奏はピタリと動きを止めた。

「あまり動かさない方がいい」

「はい…」

オレはというと意識は保ってるがそれで精一杯だったりする。

銃弾3発くらうのなんてなかったからな。

当たり所もよくはないみたいだし。

吸血鬼状態ならまだしも今は人間だからな。

「無月は！？」

フェイトさんが一人の男を引き連れて帰ってきた。

そいつの手にはスナイパーライフル。

「…！」

「奏落ち着いて。まずは無月の治療だよ」

オレの意識はそこで途切れることとなった。

「……？」

「ここは…？」

寝ている。

「気がついた？ここは機動六課の医務室よ」

「シャル先生…」

オレの寝ているベッドの傍にはシャル先生。

「お前らもいたのか」

そして祢音と奏もいた。

「うん、お兄ちゃん2日も眠ってたんだよ? ……起きてよかった」
祢音は膝立ちをして、寝ているオレと視線の高さを合わせる。

「奏、ケガないよな」

オレが奏を見ると奏はそっぽを向いて言った。

「別に無月が余計なことしなくたって自分でちゃんと対処できてました。」

それをわざわざ重傷まで負って…しかも自分より他人の事を気にするなんてどこのヒーローですか」

対処できなかったな、絶対。

それにあんなに叫んでたくせに……

まあ言わないでおくか。

「でも……」

そこで奏はオレをチラリと見る。

「一応礼は言っておきます。……あ、ありがとうございます」
珍しくよく喋るな。

「お、奏ちゃんツンデレだねえ。」

あ、どっちかってゆうとクーデレかなあ」

柊音は立つとニヤニヤしながら奏に寄り添う。

「な、なんですか？それは」

「奏ちゃんのことだよぉ」

奏は顔を赤くしながら寄り添ってくる柊音に戸惑っている。

「じゃあ私たちは一旦部屋に戻ってるね。何か用があったら呼んで」

「わかった。ありがとな」

「いえいえ♪」

柊音はまだ困惑している奏の背中を押してにこやかに部屋から出て行った。

そしてオレは結局この傷を完治させるのに3日かかった。

第11話 「捜し物発見! その2」 (後書き)

感想&評価待ってます。

第12話 「別れと真実」

〽機動六課・入口〽

「色々お世話になりました」

3人を代表してまずオレが礼を言う。

オレは完治するとすぐに去るということを先に告げておいた。

それでスケジュールを合わせてくれたようでフォワード部隊を中心に、

世話になったシャマル先生やザフィーラ、ヴィヴィオまでが見送りに来てくれた。

「こちらこそ。楽しかったよ」

「短い間しか過ごさなかったけど、いなくなると寂しいね」

「また遊びにおいでや」

なのはさん、フェイトさん、そしてはやてさんがそれぞれ別れの言葉を言ってくれた。

「うん。きつとね♪」

「その時は訓練よろしくお願いします」

「ふふっ、楽しみにしてるよ」

「サボるんじゃないぞ」

「」「はい」」

「次に会った時の力、楽しみにしているぞ」

そして一緒に訓練や日常を過ごしてきたフォワード部隊。

「訓練、楽しかったよ！」

「また一緒にできるといいですね」

「はい」

スバルとティアに奏が答え、

「柰音さんたちが行ってきた世界の話、楽しみにしてますよ」

「まだ全部聞いてないですから」

「うん。楽しみにしててね」

エリオとキャロには柰音が答える。

「また遊んでね」

「うん。元気でママのような立派な大人になりなよ」

「うん♪」

ヴィヴィオが寄ってくると称音はしゃがんで頭を撫でてやる。

その様子を2人のママは微笑んで見ている。

「じゃ行きます」

オレは次元転移魔法を使う。

「それじゃ」

「バイバイ！」

「また…」

オレたちはついに機動六課を去った。

〳本部・隊長の間〵

報告するために隊長の間に着くとそこにはレミア隊長、天照様、久遠様がいた。

「申し訳ありませんでした！」

部屋に着くと早々天照様が頭を下げる。

「久遠も頭を下げなさい！」

久遠様に頭を下げさせようと頭に手をかける天照様。

「嫌よ」

それを払いのける久遠様。

「はぁ……」

それを見て小さく溜息を吐く隊長。

何が何だかわからないオレたちはただそれを見て

「どういうことですか？」

と質問するだけだった。

「実は……今回の一件は全て久遠の仕組んだことだったんです。

なんかぶつぶつ言っていたので問い詰めたら私が仕組んだことだった白状しました。

理由は私の困った様子が見たかった、それだけです」

「それだけってなによ。私が何のためにこんなところ来てると思ってるの？」

あなたを弄^{いじ}るためよ、半分以上」

そしてニヤリと笑う。

「私に材料や道具を持ってくるよう言ったのもその途中で襲ったのも全てこの久遠の仕業しわざ」

「ちなみにあなたたちを襲った魔導師の集団も私の差金さしがねよ。」

捕らえてあった違法魔導師に取引したのよ。

『協力してくれたら条件付きだけど刑期を短くしてあげる』って。

最後のは予想外だった。それは謝っておくわ」

とんでもない種明かししやがった。コイツ……

祢音や奏をチラリと見ると奏はともかく、祢音は啞然としていて怒る気もでないようだ。

「話は変わって、紹介しておく人がいます入ってきなさい」

そうすると1人の男が部屋に入ってきた。

そいつの顔を見てオレは顔をしかめた。

その男は搜索に行った世界、あのビルの屋上で出会った男だった。

オレたちと同じように黒いコートを着ている。

体型はどっちかというとやせた方。

顔は青年というイメージで、笑うとさわやかに見えるだろう。

髪はそんなに長くもないし、特にいじってあるようには見えない。

そのままヤツは何も言わず隊長の隣に立つ。

「彼は『来栖^{くるす} 真夜^{しんや}』。新たな調律師よ。

私の下で助手として色々やってもらってたんだけど、調律師が足りないみたいだし、

ラグナロクも防いだから陰で動いてもらう必要もなくなったし、手伝うように言ったのよ」

紹介は久遠様が言い、さらに続ける。

「彼は二重人格で男と女、それぞれの人格を合わせ持ってる。

男性の人格は『真夜^{しんや}』、女性の人格は『真夜^{まや}』。

呼び名が変わるから普段は『来栖』と呼んだ方がいいわね」

「よろしく」

そういうことか。

「私が違法魔導師が過激なことをしないように

見張るよう命じたんだけど、あまり意味はなかったみたいね」

「申し訳ないです」

意外と素直なヤツのようだ。

「じゃ言うことも言ったことだし、私は戻らせてもらうわ」

と言うや否や、久遠様はさっさと部屋を出て行った。

「じゃ、オレも…」

「ちよ、久遠！あなたにはまだ罰を受けてもらってません！戻りなさい！」

「相変わらずのようだね」

さらにそれを追って天照様と来栖も部屋を出ていく。

あれでアカシャの末裔って言うから驚きだな。

それは隊長も言わずとも思っているようで再び小さく溜息を吐き、

「解散です」

と言った。

（本部・無月の部屋）

「びっくりだね。まさか仕組まれていたことだなんて」

「とんだとばっちりを受けたもんだ」

オレたちは本部に用意されている部屋で休息をとっている。

「これからどうするの？」

「特に任務もないみたいだ。

突然大きな任務が来るかもしれないから、ちよつとした任務に調律師は動かさないらしいしな」

「水月島に戻る…？」

「だろうな」

「じゃあ早く戻ろうよ！やりたいこともあるし」

「わかった。じゃ帰るぞ」

第12話 「別れと真実」 (後書き)

これでなのは編も終了です。

初の二次創作ってことでしたが、うまく書けてましたでしょうか？
感想&評価待ってます。

第13話 「雨」

〽水月学園・昇降口〽

「…どうでしょうか」

空を見上げるとどんよりとした灰色の雲から水滴が次々と落ちていきます。

どしゃ降りです。

私ที่บ้านにも帰らずにこうしているのは理由があります。

傘を持ってきてないのです。

朝では降水確率は30%とあったので傘を持たずに家を出たのですが、

午後から天気はどんどん悪くなり、今ではまさにバケツをひっくり返したような雨が降っています。

お姉様も無月も先に帰ってしまいましたし…。

実は学園にいる間に携帯に任務についてのメールが来たのですが、放課後に私は風紀委員の仕事がありました。

ついていきますと言ったのですが、2人は委員会に行ってこいと口をそろえて言うので、

仕方なく私だけが残ったのです。

その時は雨も弱かったので同じように傘を持ってきていなかった2人は走って帰って行きましたが、

今の私にできるはずがないです。

でも…。

「濡れて帰るしかないようですね」

私は飛び出し、走るのに適していないローファーなのにも関わらず拘わらず、全力疾走ノンストップで家へ帰りました。

それでも制服も体もびしょ濡れになってしまいましたが、

制服はもう1着あったのでそれを着て明日、学園へ通うことにしました。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

（水月学園・3－1）

今日もまた雨……。

4月に入ってからと晴れと雨の繰り返し。

お姉様が言うには春にはよくあることだそうです。

雨は嫌いではありませんが晴れの日よりは幾分か気分が滅入ります。

『病は気から』というように、心なしか体もだるいように感じます。

「また雨だね…」

授業の間にある休み時間。

お姉様は窓側の席に座る私の所へ来るとまず外の様子を見ます。

「そうですね」

「仕方ないことだけど、雨はやだね」。お出かけもそんなに行けなくなるし。

しかも梅雨まであるからね」

「『つゆ』…ですか？」

「そう、『梅雨』って書くの。よく雨が降る時期のこと」

お姉様は目の前の窓に指を触れさせ、文字を書いています。

水滴の着いた窓に『つゆ』を漢字で書いてくれたようです。

すぐ水が流れ出すのでどんな漢字はよくわかりませんでしたけど。

「つまり雨期のことですね」

「そうだね」

その日は傘を持ってきたので濡れることなく帰ることができました。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

く如月家・奏の部屋く

「ふう……」

私は机にかばんを置くと制服のままベッドへ倒れ込みます。

そういえばメデスは先週本部へ戻りました。

家にいてもやることないから、本部で任務についてた方が暇じゃないからだそうです。

いつも怠惰に過ごしていたようですし、その方がメデスにもいいと思います。

それにしても今日は疲れました。

学園では疲れるようなことは何もなかったのですが…。

少し寝たらマシになるでしょうか…？

あまりにもだるいのでその体勢のまま、私は眼を閉じて眠りました。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「ん……」

眼を開けた時は昼間よりさらに暗くなり始めたころでした。

時刻は6時17分。

2時間30分ぐらい眠ってしまったようです。

そうだ。夕食の手伝いをしないと…。

立ってわかりましたがだるさはなくなるどころか、ひどくなっているようです。

ふらふらとしながらも私は1階へ降りて行きました。

〽如月家・キッチン〽

お姉様は既に夕食を作り始めていました。

「あ、起きた？…ってふらふらじゃん！大丈夫！？」

お姉様は心配そうな顔で私の体を支えてくれました。

「ええ……だいじょ…うぶ……ではないかも…しれません」

「ベッドに戻る」

「はい…」

〽如月家・奏の部屋〽

「もう…調子が悪いならちゃんと言わなきゃだめじゃない」

「すみません…」

私はお姉様に運ばれ、再びベッドで横になっています。

額には熱をさげるための冷えぴたが張られています。

熱を測ってみると38度4分。

おそらく原因はこの間の雨の中の全力疾走でしょう。

あの後すっかり体を温めたつもりでしたが、どうもそうはいかなかったようです。

その証拠がこの状況です。

「私も気付いてあげられなかったのは謝らなきゃだめなんだけど」

「いえ、私が我慢していたからです」

「…ともかく、今下でお兄ちゃんがおかゆ作ってるから私も手伝いに行くけど、大人しくしてるんだよ」

「はい」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

夕食後、突然私の部屋にパジャマ着のお姉様が入ってきました。

ちなみに食後に着替えさせてもらい、私もパジャマを着ています。

「どうしたんですか？」

「一緒に寝てあげようかと思ってね♪」

そう言うとお姉様は私に了解も得ずに布団の中に潜り込んできます。

もともと1人用のベッドなので結構狭いですし、密着してしまいます。

「風邪をうつしてしまいますよ？それに私は1人で寝れます」

「大丈夫大丈夫」

そんな根拠どこにあるんですか。

ということは言わないでおきました。

「それに、病気になった時は誰でも寂しがり屋さんになるんだよ」

「いえ、私はそんなこと…」

「ごたごた言わないで、大人しくしてなさい！」

「わかりました」

釈然としませんでした。がここはお姉様の好意に甘えることにしました。

「そういや奏ちゃんが病気になるなんて初めてなんじゃない？」

「はい。こんなことになるなんて思いもしませんでした」

「造られたとはいえ、私も奏ちゃんも人間なんだよ。風邪ぐらいひくよ」

「はい……………くしゅっ！」

話が中断すると思い出したかのように急に寒気がして、思わずくしゃみをしてしまいました。

「ふふっ、寒いのか？温めてあげる」

それを見たお姉様は嬉しそうに微笑んで抱きしめてくれました。

「あったかい？」

「温かいです……」

私たちはそのまま眠りにつき、次の日には熱は平熱まで下がっていました。

だるさもなくなり、普段の私に戻れた気がします。

しかし用心のため、今日1日は学園を休むことになりました。

第13話 「雨」 (後書き)

感想&評価待ってます

第14話 「まさか!?! お兄ちゃんがデート!?!」

〽水月学園・教室2―1〽

「さくってお兄ちゃん、帰ろうか」

ようやく全ての授業が終わり、帰る支度もしました。

わたしは隣のお兄ちゃんに言ったんだけど

「今日は用があるから先帰ってくれ」

と言われました。

わたしは続けて

「え…? だって今日わたしと奏ちゃんとかで買い物行く予定があったのに?」

昨日、夕ご飯の食材とか買いに商店街に行くって話をしてたんだけどなあ……。

「ああ、本当に悪いな。今日はどうしても済ませなきゃならない用事があるからな」

お兄ちゃんはそのまま1人で教室を出て行っちゃった。

どうやら今日は一緒には帰れないみたい。

でも珍しいよね…。

約束を破ってまでしなくちゃならない用があるなんて。

初めてのことだったからわたしはしばらく考え込んでたけれど、ここはあまり突っ込まないことにしました。

「奏ちゃん。帰ろうか」

「これを職員室に届けてからでいいですか？」

奏ちゃんが持っているのは一枚のプリント。

それはこないだ休んでた分の補習のプリントでした。

「うん。わたしもついてくよ」

「では行きましょう」

＼水月学園・廊下＼

奏ちゃんの職員室での用も終わって、

窓を眺めながら廊下を歩いていると、校門の方へ歩くお兄ちゃんの姿が見えた。

「ん？あれは…？」

隣に女の子の姿も見えるねえ。

たまたま近くで歩いてるんじゃない。

何か喋ってるみたいだから多分一緒に歩いてるはず。

「ふうん。なるほどねえ…」

「どうしました？お姉様」

奏ちゃんは急に止まったわたしの方へ振り返りました。

「奏ちゃん、ちょっと寄り道するよ！」

「え？ええ！？ちょ、お姉様！？」

わたしは奏ちゃんの手を掴むと廊下と階段を猛ダッシュで駆け降りました。

く水月学園・校門く

校門を出て右を見るとお兄ちゃんと女の子が角を曲がっていくのが見えました。

「こっちだよ！」

そしてお兄ちゃんたちが曲がった角まで来ると隠れながら角から様子を見ます。

「一体どうし——」

「静かに！ほら、あれ」

奏ちゃんの口を防いで、前を見るよう促しました。

「……なるほど、そういうことですか」

「ねえ、奏ちゃん」

「はい…？」

「今までお兄ちゃんがわたしたち以外の女の子と帰るなんてあった？」

「いえ…私の記憶では…」

そう言ってる間にもお兄ちゃんたちはさらに角を曲がりました。

「さ、行くよ」

私たちも慎重に後を追います。

追いながら奏ちゃんはわたしに向かって言いました。

「でもこれから買い物をするのではなかったんですか？

それに、人の後を尾けるなんて趣味が悪いです」

「ふっふっふ、奏ちゃん、いい言葉を教えてあげる。」

『他人^{ひと}の恋路ほどおもしろく、そして恨めしいものはない』んだよ」

「お言葉を返すようで申し訳ありませんが、お姉様、

『他人の恋路を邪魔するヤツは馬に蹴られて地獄行き』という言葉もあるようですが？」

「……………いいんだってば！今が楽しければいいんだよ！」

「…勝手にしてください。私は帰ります」

呆れたように言い、振り返って歩き出す奏ちゃんの腕をわたしは見もしないで掴みました。

お兄ちゃんたちを見失わないようにするためにです。

「なんですか？」

「奏ちゃんは気にならない？お兄ちゃんとあの子がどんな関係か」

「いえ。無月がどんな交際をしようと私たちには関係ない事です」

「そう？そんなこと言ったって、気になるんじゃない？」

それにわたしたちはお兄ちゃんの妹だよ。これだけでも尾けるぐらいなら十分な理由じゃない？」

「……………わかりました。お姉様がそこまで言うなら。でも、ちょ

っただけですよ？」

「いい子だね。あ、また曲がったよ」

わたしたちが曲がると商店街に出ました。

お兄ちゃんたちはどうやらゲームセンター、いわゆるゲーセンへ入ったようです。

私たちも見つからないように入ります。

「ああ、あの子は確か隣のクラスの『麻上涼子』だよ」

人見知りする性格なのか、普段は大人しいけど友達には明るい子。

長い黒髪を持っていてスタイルは…まあいいことにしよう。

「誰ですか？」

「まあ奏ちゃんはあまり他のクラスに行かないしね。

でも1回ぐらいは喋ったことあると思うよ」

「…:そうですか」

2人は定番のクレイゲームをしている。

1人2回ずつ、4回トライしてとれたのはかわいいネコのぬいぐるみ。

お兄ちゃんがとって、それを麻上さんに渡すと嬉しそうに笑ってました。

あゝあ、私にもそんなことしてくれないくせに！

お次はガンシューティングのようです。

自分で銃を持ってそれを画面に向かって撃つというような体感型のゲーム。

「ああ！もうっ！そこはその敵を撃つんじゃないって！」

麻上さんは画面上に出てくるゾンビたちに驚いて、キャアツとか叫びながら闇雲に撃っています。

お兄ちゃんはどうと麻上さんに指示やフォローをしながら自分の役割も果たしています。

私たちはバレないようにクレインゲームのガラス越しに様子を見ます。

一応ゲームをやってるように見えなきゃダメだからということではプレイしながらです。

でも私の眼はクレインゲームよりお兄ちゃんたちに向けています。

だから外れてばかりです。

さて次100円投入しようとしたその時。

「お金の無駄遣いはやめてください」

奏ちゃんに腕を掴まれてようやく私は腕を止めました。

お兄ちゃんたちはその後も格闘ゲーム、レーシングゲーム、さらにはプリクラをやっています。

私だってお兄ちゃんとプリクラしたことないのにー！

そして無事気づかれることもなくゲーセンを出ることができました。

「これはどう考えてもデートしか考えられないねえ…」

「無月はああいいう女性が好みなんでしょうか？」

「うーん。どうなんだろう？ お兄ちゃんの好みなんて聞いたことないしなあ」

千春や他の女の子とともに普通に喋ってるしね…。

次に来たのは喫茶店。

最近できたっていうおしゃれな喫茶店、お兄ちゃんたちはその中へ入って行きました。

もちろん、わたしたちも気づかれないように入ります。

そしてお兄ちゃんの死角になるような席に座ってパフェを頼みます。

それもとびきりでかいのを！

奏ちゃんは紅茶。

ちなみにお兄ちゃんはコーヒー。

麻上さんはショートケーキを頼んでいました。

その後特大のパフェが運ばれてくると、奏ちゃんはそれを見て

「お姉様、私たちは後を尾けてるんですよ？」

そういうのを頼むのはまた次の機会にしませんか？」

と言いました。

「何言ってるのよ！こんなトコこういう時じゃないと滅多に入らないじゃない！おっと…」

ちょっと声大きかったかな。

お兄ちゃんを見ると気付いてないようで振り向く様子はない。

ふう…。

改めて耳を澄ませると、

お兄ちゃんたちはさっきのゲーセンでの事とか学園の事とか音楽の事を楽しそうにしゃべってます。

そしてわたしがパフェを食べ終えてしばらくすると、お兄ちゃんたちは席を立った。

もう出るみたいだね…。

私たちのいる席は出口近くのレジとは逆方向だから観葉植物の陰に隠れれば見えない。

そだ。お金はどっち持ちなんだろう？

気になって、ちょっと覗く^{のぞ}とちようどお兄ちゃんがサイフからお金をとる所でした。

会話を聞くと初めはお兄ちゃんが奢^{おご}るようだったんだけど、

『麻上さんが自分の分は自分で出します』って言い出しました。

どうするんだろ…？

するとお兄ちゃんは自分の分のお金だけを取り出して

「お前とは仲良くなれそうだ」

そう言って麻上さんの分のお金を受け取るとレジへ行きました。

へえ…。

お兄ちゃんはそのーゆー主義か、勉強になったよ。

で、私はというと…。

「奏ちゃん、ここは割り勘にしよっか♪」

わたしが嬉しそうに言うと、奏ちゃんは言いました。

「そうすると明らかにお姉様が得をするのですが？」

私が頼んだのは特大のパフェ。

奏ちゃんは紅茶一杯。

値段を見るまでもないです。

「はいはい。自分で出しますよーだ」

「そうしてください」

続いて私たちも喫茶店を出ました。

その後も服やアクセサリーの買い物をしてデートは進んでいました。

その間もずっと尾行してたけど、2人とも結構楽しそうでした。

「……………奏ちゃん、そろそろ帰ろうか」

「……………いいのですか？無月たちはまだどこかへ行くようですが？」

「いいよ。だってこれ以上、お兄ちゃんと麻上さんが楽しんでいる

デートをわたしたちが邪魔しちゃ悪いもの。

それに、夕ご飯の用意もしなくちゃなんないしね」

「わかりました。お姉様がそう言うなら……。では行きましょう。

でもお姉様、今から買い物へ行っては夕食を作る時間がありませんので、

買い物はできませんからカレーは作れませんよ？」

「うん。いいよ」

く如月家く

その夜、夕ご飯でお兄ちゃんはいきなり一言言いました。

「お前ら今日何してた？」

「!？」

私の手の動きがほんの一瞬だけ止まる。

平然を装よそおおうとしてもお兄ちゃんは多分気づいてると思う。

一方、奏ちゃんよそおは焦りもなく普通にご飯を食べてる。

「別に、いつも通り過ごしてたけど」

わたしはお兄ちゃんの顔をまともに見ることができず、

お兄ちゃんから眼を反らして平然と答えました。

「商店街にいなかったか？」

「そりゃあまあ、買い物行ってたからね」

「ならなんで夕飯カレーじゃなくてハンバーグなんだ？」

今夜はカレーだって行ってただろ？」

「いや…それは……やっぱハンバーグの方がいいかなあって思っ—
—」

「放課後オレの後尾けてただろ？」

うわ、言っちゃったよ。

ここは開き直るしかないかな。

「そーだよ！お兄ちゃんが女の子と付き合ってるなんて知らなかったからね。

おもしろそうだから尾けてたの！奏ちゃんとね」

お兄ちゃんは知ってるだろうけど、こうなったら奏ちゃんも道連れよ。

「はあ！？オレは麻上と付き合ってるわけじゃねえよ」

「あんなに楽しそうにしてたのに……？」

「楽しそうにしてたからといって、必ずしも付き合ってるとは限らない」

「じゃあ何でよ？」

「あいつ、こないだオレに告白してきたんだよ」

「で？どうしたの」

「もちろん断ったよ。そしたら一度だけでいいからデートしてくれないかってさ。」

もうすぐお父さんの仕事で転校しなくちゃならないんです。だから最後の想い出に、ってな」

なんてベタな…

わたしは半分ホッとし、半分複雑な想いでした。

「それでオーケーしたわけね。麻上さんとの一日デートを」

「ああ。案外楽しかったよ」

「……そう。よかった！」

「何が？」

「わたしみたいなかawaii子が傍にいるから彼女なんてできそうにないなあゝって思ってたからね♪」

「自分で言うな。オレから見たらお前はまだまだだな」

さすがお兄ちゃん、突っ込むだけでなく斬り込んでくるとは……恐るべし。

「とにかく、明日は土曜で休みだから、朝から買い物に付き合ってもらうからね！」

「暇だったらな」

「邪魔するモノはみんな排除するから大丈夫♪」

「するな！」

「麻上さんとのデートは楽しくて、わたしたちとのデートは楽しくないなんてことないよね？」

「あるな」

「な!!??」

そこで言う!?

「ふっ冗談だ」

「鼻で笑うなー！」

「悪かった。明日は何か奢ってやるから機嫌直せ」

「言ったなあ！じゃあ5ケタはいくと思っただけで覚悟してよね」

「…はいはい」

ふっふっふ。明日が楽しみだなあ。

こうしてお兄ちゃんの財布は痩せ細っていくのだ！

おわり♪

第14話 「まさか!?!お兄ちゃんがデート!?!」 (後書き)

無月SIDEとして外伝もありますのでそちらもよろしく。
感想&評価待ってます。

第14話外伝（前書き）

第14話は祢音SIDEでしたが、こちらは無月SIDEです。

第14話外伝

水月学園3—1

「ん？」

いつも通りの朝、自分の席に着き、置き勉強している教科書を取り出そうと机に手を突っ込んでみた。

そこには感じるはずのない紙の触感があり、オレはそれを取り出した。

入っていたのは横に長い長方形の封筒。

これは…ラブレターか？

いまどきなあ、と思いつつも誰にも（特に祢音に）見られないよう封筒の中から手紙を取り出して読み始めた。

手紙の内容は、いったいどんなものだったかというところ…。

『大事な話があります。放課後、体育館裏に来て下さい』

という名前も書かれていないシンプルなものだった。

筆跡からして明らかに男がいたずらで書いたようには思えない。

まあ祢音や千春がやったという可能性はあるが…。

「とりあえず行ってみないとこれだけじゃわからないな」

そう思いながら、ともかくオレはそこに行くことにした。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

放課後、別に何の緊張もなくオレは約束通り体育館裏に来た。

朝でも夕でも日光が当たることが少ないこの場所。

オレがそこに来た時には、既に1人の女子生徒がいた。

……誰だ？

クラスメートの女子ですら名前と顔が一致させられないヤツもいるのに、

こんな所で名前も名乗らずに出会ったヤツなんて思い出せるはずがない。

「ど、どうも！来て下さってありがとうございます！」

オレの姿を見るやいなや、その女子は頭を下げて礼を言った。

「えーと……」

「あ、あさがみりようこ麻上涼子です！3年5組の！」

オレが誰かわからず口ごもっているとその女子はオレの考えを察知したのか麻上涼子と名乗った。

「名前…、書いてませんでしたよね…？あとから気付いたんです。ごめんなさい！」

申し訳なさそうにもう一度頭を下げた。

「いや、いいよ。とにかく大事な話ってのを聞かせてくれ」

「あの…、えっと…その…」

なんとなく言いたいことはわかるのだが、オレはそのまま待ってみることにした。

「…如月無月さん…あなたのことが…、す、好きでした!!」

！マーク2つ表示させているが実際その時の麻上の声はそこまで大きくなかった。

だが、元々声が小さいであろう麻上の精一杯の声だということがオレにはわかった。

「ふう…悪いな。オレは今のところ誰とも付き合う気はないんだ」

「ど、どうしてですか…!?!」

麻上は問い詰めてくる。

「女に興味はない。ただそれだけだ」

「そ……そうなん…です…か…」

その声にだんだん悲しみが込められていく。

別段チャラケたようには見えない真面目そうな麻上のことだ。

かなりの覚悟があっただろう。

だがオレにはそれに応えてやることはできない。

オレはオルタナティブで仕事をしている限り、任務で死ぬかもしれない。

そんなときに悲しむヤツをわざわざ増やしたくはない。

これが本心なのだが何も知らないヤツに教えることはできない。

だからいつもこうやって偽ってきた。

まあ実際好きな人はいないんだけどな

「うっ……ひっく…」

とうとう麻上は小さな嗚咽おえつを漏らして泣き始めた。

「泣くな。また他のヤツを探せばいいだけだろう？」

我ながら酷い言葉だと思った。

だがオレから離れてもらうにはこれぐらい言わないといけない。

「じゃ…じゃあ…1つだけ、お願いしても…いいですか？」

麻上は本格的に泣くのをこらえるように言った。

「内容によるけど、聞くだけなら」

「実は私、1学期で転校するんです。親の仕事で……。」

元々5年前にこの島に来たのも親の仕事があったからなんです」

「……………」

オレは麻上が話している間、相槌あいづちも打たず、その話を聞いていた。

「一度だけ……一度だけでいいですから…私とデ、デートをしてくれませんか？」

この島を出ていく前に…忘れたくないたった1つだけ思い出が欲しいんです……」

「ふう……わかった。いいよ、一度だけならな」

オレは少しの間考えてそう答えた。

こんな状況で一度だけという条件ならいいと思ったからだ。

「あ、ありがとうございます！」

麻上はさらにもう一度頭を下げた。

「いきなりですけど…明日でもいいですか？明日の放課後…」

「ああ。わかった」

「よろしく願います！」

てなわけでオレと麻上は明日の放課後一日デートをすることになった。

祢音や奏たちと買い物に出かけることを思い出したのは、帰って祢音がその話をしだした時だった。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

く水月学園・3－5前廊下く

祢音との約束を破り、オレは麻上のクラスの前に来ていた。

ひょいと覗^{のぞ}いてみるが麻上の姿はない。

どっか行ったのか？

「無月さん！」

後ろから声がしたので振り返ってみると、そこに麻上がいた。

「…っと。いたのか」

「はい、すれ違いに出てしまったみたいですね」

そうして麻上はかすかに微笑む。

「じゃあ行くか」

「はい」

そうして歩き出した麻上の肩を掴んで引き止める。

「どうしました？」

「こっちから行こう」

「なんでです？」

「そっちから行くと都合が悪いんだ」

そっちへ進めば3—1の教室の前を通ることになる。

そこにはもしかしたらまだ祢音たちがいるかもしれない。

見られるとやっかいなことになるかもしれないからな。

「別にいいですけど…?」

麻上は疑問に思いながらもオレの言う通りにしてくれ、

オレたちは祢音たちに見られることなく校門を出て商店街へ向かった。

〈商店街〉

「どこに行く？麻上の好きな所でいいぞ」

「あ、あの…お願いがあるんですが…」

急に歯切れが悪くなった麻上は続けて言った。

「付き合っているんですし…あの…その…今日だけ、名前で呼んでくれませんか？」

「へ…？」

呆氣にとられて思わずマヌケな声を出してしまった。

「だから…『麻上』ではなく、『涼子』って呼んでください…」

そう言い終わると髪から少しだけ見える麻上の耳や頬がカッと赤くなる。

「……わかったよ。り…涼子……」

こっちまで恥ずかしくなってくる状況だ。

「ありがとうございます。それともう一つ、手を繋いでください」

「ああ、お安い御用だ」

名前で呼ぶ時、十分に恥ずかしい思いをしたからあまり抵抗なく手を差し出せた。

すると涼子は手を絡めるように繋いできた。

「ふふ…これで立派な恋人ですね。あたたかい…」

そう言って微笑む涼子の手は少し冷たいように感じた。

冷え性なんだろうか？

「じゃあオレからも頼みがある。敬語はやめろ。かたっ苦しいからな」

「これが一番話しやすいんですけど…やめなきゃダメですか？」

「まあ話しやすいってんなら仕方ないか。涼子、どこへ行きたい？」

「あまり考えてなかったです」

「デートなんて初めてだからな、どこへ行けばいいのやら、オレにはよくわからん」

「無月さんの行きたい所でいいですよ、私は」

「行きたいってわけじゃねえんだが、なら…あそこかな？」

というわけで、オレと涼子は商店街にあるゲームセンターへ行ってみることにした。

「ゲームセンター」

「ここ…ですか!？」

オレたちが初めに来たのはゲーセン。

中はさまざまなゲームの音で騒がしい。

涼子の声ならだいぶ張り上げないと聞こえないぐらいだ。

こういう所は涼子みたいなヤツは苦手かと思ったから

「こういう所は苦手か？」

と聞いたが

「いえ、大丈夫です。行ったこともなかったですし、興味あります…」

と答えた。

とはいえ、少しビビっているように見えるんだけどなあ…。

「色々見て回ろうぜ。何かやりたいものがあるかもしれないからね」

「はい」

「あ…これ…」

涼子が立ち止まったのはクレーンゲーム。

中にはネコやイヌやパンダのぬいぐるみが所狭しと置いてある。

「何か欲しいのか？」

オレは涼子に聞いてみた。

すると涼子は

「この…ネコが欲しいです」

と言いながら、中のネコのぬいぐるみを指さした。

「やってみるか？」

「はい。えーと…」

オレの説明を聴き終えると、涼子は財布の中から100円玉を取り出し、投入口に入れる。

「えーと…えーとお…」

あたふたとしながらの1回目。

初プレイだから緊張していて動きがぎこちない。

結局ネコには触れたものの引き上げるまではいかなかった。

続いて2回目のプレイ。

今度は引き上げることに成功したが、動き始めるとあっけなく落ちてしまう。

「ならオレがやってみる」

そしてオレも1000円を投入する。

クレーンゲームなんてやったことが1回くらいあった気がするぐらいだ。

予想通り1回目は失敗した。

だが手応えはあった。

持ち上げ、移動している途中で落ちたから穴にも近づいている。

もう少しうまくやればできそうな感じがした。

こいつはオレの闘争心に火をつけちゃったようだな！

「もう1回だ！」

「頑張ってください！」

そして2回目。

今度も掴むことに成功し、持ち上げるまで落ちることはなかった。

ちらりと涼子を見ると、涼子は食い入るようにその様子を見ている。

そしてその結果…。

「よっしゃあ！」

「やった！」

見事、お目当てのぬいぐるみを手に入れることができた。

「ほらよ」

オレは取出口からぬいぐるみを取ると涼子に渡した。

「ありがとうございます！」

ぬいぐるみを渡すと涼子は満面の笑みを見せてくれた。

珍しく熱くなって頑張った甲斐かいがあつたな。

と思わせるには十分だった。

その後もいろんなゲームをし、オレと涼子は満足してゲーセンを出た。

「楽しかったな」

「はい。少し疲れてしまいましたけど」

「だったらそこで休むか？」

少し前に喫茶店の看板が見えた。

滅多に行かない店だが、まあたまにはいいだろう。

「はい」

く喫茶水月く

「いらっしゃいませー」

店員に案内されて、オレたちは指定された席に向かい合うようにして座る。

「新しい店みたいですね」

「そうだな」

建物自体は前からあったが店が変わって、それに合わせて内装も新しくしたようだ。

「注文は何になさいますか？」

すぐにウェイトレスが来て注文を尋ねた。

「オレはコーヒーで」

「えーと…私は…」

涼子はというとまだメニューを見ている。

眼が色々な方向に動いている所から見ると、見当すらついていないように見える。

「ケーキは欲しいですけど太りますし…」

という呟きが聞こえた。

「今日はせっかくのデートなんだ、好きなものの頼めよ」

それを聞くと涼子は少し赤くなり、小さな声で

「…ショートケーキをお願いします」

と言った。

「かしこまりました。コーヒーに、ショートケーキですね…？少々お待ち下さい」

そう言い、ウェイトレスは去って行く。

しばらくするとコーヒーとショートケーキが運ばれてきた。

オレはコーヒーを、涼子はショートケーキをそれぞれ飲んだり食べたりしながら話している。

「無月さんって、趣味は何ですか…？」

「趣味かあ…特にはないんだけど強いて言うなら音楽を聴くこと、かなあ…？」

「どういうものを聴くんですか？」

「これといって偏ってはいないな。ロックでもバラードでも、それが良ければ聴いてるし。」

涼子はなんだ？

「私は読書です。最近はファンタジー恋愛が面白いのでよく読んできます」

「やっぱり。涼子ってよく本読んでそうだな」

「そう、見えますか…？」

「ああ、頭も良さそうだな」

とまあ喫茶店ではそんな会話を続けていた。

「そろそろ次行くか」

「そうですね」

その後も色々な店を回ったがどこも楽しかった。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「ようやく行ったか…」

「何がですか？」

「いや、別に。そういやそろそろ日暮れだな。

夜まではさすがに心配するだろうし、次の場所で最後でいいか？」

「…はい」

涼子は少し名残惜しそうに言った。

「どこがいい？」

「では…公園でいいですか？」

「いいぞ」

（水月公園）

公園には小学生ぐらいの子供が何グループかでワイワイ言いながら遊んでいる。

「散歩でもしましょう」

「ああ」

散歩をしている間、涼子から話しかけてくることはなく、

オレが話しかけても、うつむいたまま「そうですね」や「はい」、
としか答えなくなった。

だんだん日も暮れ、暗くなってきた。

遊んでいた子供たちも家に帰ったんだろう、この公園に人はいなくなった。

そろそろ一日デートも終わりだ。

「そろそろデートも終わりだな」

噴水の前に来た頃、オレは言った。

「はい」

この時になってまで、涼子はこうだ。

しかし、涼子はうつむき気味のままこう言った。

「無月さん、どうもありがとうございます。今日デートをして私はとても楽しかったです。」

今日が終わるのが今までにないくらい名残惜しいです。無月さんはどうですか？」

「オレも楽しかったよ、とても。」

祢音たち以外の女子とこうやってブラブラしたこともなかったし」

「名残惜しくは……ないですか？」

「惜しくはない、と言ったら嘘になる」

すると涼子は顔を上げ、オレを見つめながら言った。

「どうしても……付き合ってはくれませんか？」

今日一日過ごして、こんな日が明日も続いたらいいとは思いませんか!？」

涼子はどうしてもオレと付き合いたいらしい。

「はぁ……。それは前にも言っただろう？ オレはお前と付き合うことはできない。」

絶対にできないんだ。

それにオレは涼子……いや、麻上のことは恋人としては好きじゃない」

それを聞いた瞬間、麻上の瞳に絶望が見えた。

瞳から涙が流れて、泣いた。

「うつ…うつ…」

麻上はオレに抱き着こうとしたが、オレは麻上の肩を掴み、それを遮った。

「!？」

「オレたちはもう恋人同士じゃない」

しかし麻上はその手を強引に払い除け、無理矢理抱き着いてきた。

「うわあああん!!」

そして思いっきり泣いた。

らしくない強引なことをしてきてまで抱き着いてきた麻上を、オレは引き剥がすことができなかった。

麻上が落ち着いてきた頃を見計らってオレは言った。

「恋人でいることはできない。けど、友達としてなら付き合っている」

「はい。わかりました」

眼を赤くしながら小さく頷くと

「これからもよろしくお願いしますね。無月さん」

そう笑って言うとき麻上は振り向いて走って行った。

これから家へ帰ってまた泣くんだろうかと思うと少しだけ心が痛んだ。

「…帰るか」

祢音に聞きたいこともあるしな。

麻上が見えなくなってからオレは家へ帰るため、麻上が去った方向とは反対方向へ歩き出した。

第14話外伝（後書き）

感想＆評価待ってます。

第15話 「追われる身」

ウーウーというやかましいサイレンと共にその持ち主のパトカーが
ついてくる。

追っているのはオレたち。

「あゝあ、どうするの、この状況」

「だったらなんとかしろ!」

「えゝメンドくさゝい」

「奏! そんな無口無表情で座ってないでなんとかしろ!」

「無理です」

「お前らー!」

現在オレたちはカーチェイスの真っ最中だ。

どうしてこんな展開になったかというと……

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

殺しの任務を請け負ったオレたちは日本の東北地方のある県に来ていた。

調律師が1人増えたから、ってだけでもないんだろうが仕事も多く回ってくるようになった。

相変わらずオレたちは3人1組で行動しているが。

自宅前で難なく任務を終え、さあ帰ろうかとしたその時。

「あ」

と声を上げた祢音を見ると、その視線の先には少し年をとった中年の女性がいた。

オレたちの足下には殺しの標的で、今はもう亡き衆議院議員。

どう考えてもオレらが殺ったように見えるだろう。

コートで身体的特徴は隠せているが顔はどうも隠しようがない。

その女性は悲鳴を上げる。

「ごめんね」

祢音はすぐさま記憶消去の魔法を女性に使う。

女性はそのまま気を失い、その場に倒れるが、

今の悲鳴で周辺に住んでいるであろう人間が何事かと顔を出し、オ

レたちの姿を見る。

こんなに大勢、それに散り散りにいられたら記憶消去の魔法も使いづらい。

どうしようかと考えていると警官たちが、

オレたちを挟み込むようにパトカー2台に乗ってやってきた。

誰かが通報したのだろう。

オレたちはフードを深くかぶり、顔ができるだけ見えないようにする。

魔法などを知らない一般人の前では魔法をできるだけ使ってはいけない。

それはどの世界にいる時でも守らなければならない規則。

『できるだけ』だが、ここで使うつもりはない。

オレたちの住む世界だし、あまり派手なこともしたくない。

見えない所まで撒いて、そこで転移魔法を使わなければならない。

「そこから動くなよ！」

警官が数人パトカーから降りてこちらへ歩いてくる。

―目の前の警官だけ殴れ。んでパトカーに乗って逃走。これでどう

だ？―

オレは2人に念話を送る。

―いいんじゃない―

―了解―

オレたちはまっすぐ走りだし、

正面から向かってくる警官の3人をそれぞれ殴ってひるませるとそのまま正面のパトカーに乗り込む。

運転席にはオレが乗る。

助手席には祢音、そして後ろの席に奏が座る。

「さて、逃げるか！」

バックし、すぐ後ろの十字路で右へ曲がる。

ちなみに方向は勘で選んだ。

すぐさまもう一台のパトカーが追跡してくる。

「これじゃあすぐには撒けないんじゃない？援軍呼ばれるよ？」

「このまま高速に行く。その方がスピードも出せるし、行き止まりがない」

その時看板が見えた。

その通りにオレは右へ曲がる。

「おっと……それでいこ」

「一方通行なら進行方向を把握されて塞がれると思うんですが」

「そんな時はそんな時だ。なんとかなるだろ」

「そうですか」

「てゆうかお兄ちゃん運転できたの？」

「そんなもんアクセル、ブレーキ、ハンドル、ギアチェンジがわか
ってたら走らせるくらいはできるだろ」

「交通事故でお陀仏ってのはやめてよね」

「努力する」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

というわけだ。

高速道路は意外と空いていた。オレたちにとっては都合のいいこと

だ。

「うわぁ、数増えてる」

ちらりとサイドミラーを見るとパトカーが4台に増えている。

まあそんな変わりないと思うが。

「そろそろ飽きてきたから終わりにしたいんだけど？」

「お前飽きたってなぁ……」

「左に車近づけないで。んで、できるだけまっすぐに走って」

「は？」

すると称音は窓を開けるとそこから銃を握った右腕と顔を出し、後方のパトカーを見る。

「おい、それじゃあ顔見られるぞ。それにその銃は実弾は撃てねえだろ？」

「大丈夫大丈夫」

目の前をちんたら走ってる車がいたからオレは左へ避ける。

「つと…こらぁ！揺らさないでって言ったでしょ！」

「そうしなきゃぶつかるんだよ！」

「壁ぶつけたら怒るよ？」

「はいはい。……右曲がるぞ！」

そう言って次は右へ曲がる。

車が称音にぶつからないように早めに曲がった。

「前なんもねえから今がチャンスだ！」

「オーケー」

タァン！

1発かわいた銃声が鳴った。

弾は先頭のパトカーのタイヤをとらえ、タイヤをパンクさせる。

そのパトカーはコントロールを失い、後ろのパトカーを2台巻き込んで視界から消えていく。

「こうゆう時のために実弾が撃てるように改造してもらってたの」

「止まるぞ！」

「きゃあっ！！」

「…挟まれた」

前方にはパトカーで作られたバリケード。

「顔隠しとけよ」

「これじゃあ本物の殺人犯だねえ」

と言いつつもしっかりと顔を隠す柵音、そして奏。

「さっさと気絶させて帰るか」

高速道路は上りも下りも閉鎖中。

これなら見てるヤツも両側にいる警官たちだけだ。

あゝあ、別世界なら魔法使ってさっさと終わらせられるんだけどなあ。

パトカーを降りると早速拳銃を突きつけられる始末。

―奏、お前は右側。柵音はここで支援頼む―

―わかった―

―了解―

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「最初っからこうすればよかったじゃん」

「あほか。あの場でこんなことやったら面倒なことになるだろ」

そう言いながらオレは転移魔法を使う。

本部に帰っても面倒なことになりそうだな。

予想通りオレたちは本部へ帰ると殺しを見られたことなど、

大騒ぎになったことを咎められることとなった。

第15話 「追われる身」 (後書き)

感想&評価待ってます

第16話 「初任務」

「メデスはなんでそんなにへばり付いてくるんです？」

久しぶりにメデスが家に来たある休日の午後、独り言を言うようにふと奏が呟いた。

「ん？どうしたの、いきなり」

「ラグナロク以前は調律師がたくさんいましたが、会うのはメデスばかりでしたから……」

「へえ。気になる？」

「いえ、気になるというほどでは…」

「ならオレが教えてあげよう」

メデスが意気揚々と奏の傍に来るが

「情けねえ話だからするな」

と、オレが止める。

「無月がそういうのでしたら、私は余計気になりますか？」

「お前なあ……」

「わたしは別に構わないから話していいよ。いいよね？」

「いや、オレが話す」

「へえ、珍しい。ならよろしく。おっと、お茶でも準備しようかな」
4人がテーブルに座り、お茶と菓子が用意される。

「あれは何年前だったっけな…。

調律師にもなっていないオレたちの初めての任務の時だった。

任務の内容はある市の市長、皇^{すめらぎ そつじろう}宗二郎の麻薬取引の現場を

写真に撮り、その証拠写真を持って帰ること。

それさえあれば皇はいい金づるになるからな。

近々取引があるから、そこで写真を撮ってくるってことになったんだ」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

くオルタナティブ本部・総帥の間く

「お前たちの最初の任務だな。最初にしては荷が重いかと思うが」

「大丈夫です」

「そうか…なら任せよう」

〽本部・廊下〽

「いよいよ初任務だね」

「ああ」

「がんばらなくっちゃ！」

隣で右手をグーにする柊音は少し興奮しているようだ。

「初の任務だからな、失敗はできない」

「わかってるよ」

オレたちはまだ転移魔法を使えない。

だから転送してもらうために転移魔法が使えない者が移動するため
に作られた部屋へ向かい、転送してもらった。

〽日本・某所〽

「任務の計画の確認をするぞ」

「うん」

オレたちは計画の確認をした。

今夜取引は廃工場で行われる。

オレたちは天井近くで物影に隠れつつ写真を撮る。

内容だけ言うなら簡単なものだった。

「じゃあ早速行こうか。もうそろそろ日が沈むよ」

オレたちはその廃工場へと向かった。

廃工場には窓はほとんどなく、夕方でも中は結構暗くなっていた。

そしてオレたちは取引が行われる午後10時まで隠れて待機する
ことにした。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「来た……！」

丁度時間通りに2台の車がやってきた。

まず1台の黒い車から男が5人ほど降り、続いてもう1台の車から同じように男が5人降りてきた。

そこには皇もいた。

取引相手はどこかの暴力団だろうか、お世辞にも人の良さそうなヤツには見えない。

まあこんなことしてるヤツらがいい人に見えるはずがないのだが。

「さあ、取引を始めようか」

廃工場で5人づつ向かい合って取引を始めた。

まず皇側が銀のスーツケースを渡し、暴力団側が中身を確認すると白い粉の入った袋を渡した。

その瞬間を写真に撮った。

そこまではうまくいったのだがここからだった。

「誰だ!？」

背後から声がし、振り向けば暴力団の仲間と思える男がいた。

どうやら皇側がルール違反をしないよう見張っていたようだった。

その声が廃工場あたりに響き、オレたちがここにいることはそこにいる全員に知れ渡ってしまった。

「ちっ！」

オレはすぐにその男を刀で斬り殺すと下へ飛び降りた。

「何者だ!?!」

皇が叫ぶ。

「お前に教える必要はねえよ！」

そう言いながら廃工場の出口へ走るが

「あらあゝダメだこりゃ」

出口には暴力団のヤツらが何人も待ち構えていた。

「おい! どういうことだ!?! 取引は5人づつでやるという決まりだろ！」

「お前がズルしないようにな。万が一の保険だ」

これは皇にも予想外だったようだ。

なんてやってる間にもオレたちは囲まれてしまう。

「どうしょっか?」

「ここから脱出すればそれでいい。殺しは許可されてる」

「りょーかいっ」

それからごちゃごちゃとした乱戦となった。

皇たちは逃げたのかどうか確認すらできないほど忙しく動いている。

するとしばらくした所だった。

「ちょっと！放してよ！！」

柰音の声がした。

すると円のように囲まれている状態から半円のようになり開かれた場所には柰音と柰音の四肢を掴む男たち。

1対1なら余裕だし、ある程度人数がいても十分対処できる技量はあるつもりだが、

一斉に飛び掛かられればさすがに対処できないこともある。

「これ以上暴れるな。こいつがどうなってもいいのか？」

「どうしろと？」

「そのデジカメを渡せ」

「ダメ！任務優先だって言ってたでしょ！」

「渡せ！！」

ヤツらとの距離は5 m程度。

この距離じゃ柵音を助ける前に柵音が殺られる。

手も足も出ないか：

任務と妹、どちらをとるかってヤツだな

まさかこんなことがあるなんてな。

マンガの中だけだと思ってたぜ。

「渡せばちゃんと解放してくれるんだろうな？」

「当たり前だろ」

「わかった」

「お兄ちゃん！」

まだまだ甘いな、オレも。

「良い子だ。まずは刀を捨てろ」

「ああ」

オレはヤツらの足元へ刀を投げる。

他の男がその刀を持つ。

「よし、まずはお前からだ」

オレはポケットからデジカメを取り出すと左へ投げる。

そしてたまたまそこにいた男が慌てながらもそれを落とさずに受け取る。

「オーケー。じゃこいつを受け取りに来い」

罠がありそうな気がかなりしたが、

人質をとられていてはオレはそれに従うしかなく、オレは歩き出した。

だんだんとヤツらとの距離が近づき、ここからなら何とかできるかもしれないという所で

「ほらよ！」

「きゃっ！」

と、急に祢音の背中が押され、祢音はオレにぶつかってくる。

「2人仲良く死ねやあ！」

すぐさま周りの何人かが銃を構える。

「くそお！」

だが次の瞬間、銃を撃とうとしていたヤツらは銃を落とし、赤く染

まった手を抑えている。

「まだまだガキだな」

その後上から1人の男が目の前に飛び降りてきた。

「お前は…確か…ジュライアス？」

「そ。オレは水の調律師の『メデス・ジュライアス』。ほらよ、お前の刀だ」

ジュライアスはいつの間にか取り戻していたオレの刀を渡す。

「なんでここにいる？」

「その話は後だ。市長は逃げた。」

こいつらの頭はいねえし、下っ端なら全員殺してもいいだろ。証拠写真もあるしな」

ジュライアスの手にはデジカメも握られていた。

「いつの間に……」

「市長は放つといい。敵はこいつらだ。いけるな？」

「ああ」

「任せて」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

ジュライアスが最初に放った一撃はヤツらに動揺させることができた。

恐れを抱いたヤツは敵ではない。

まあ数が問題なだけで、もともと敵ではなかったが…

「で？なんでここにいる？」

戦闘終了後、改めてオレは訊いた。

「総帥に頼まれたんだよ。案外親バカなんだなあ、あの人」

「余計なことを…」

「でもおかげで助かったんだし、あとでお礼言わなくちゃね。ジュライアスさんにも」

「オレのことはメデスでいい。これから長い付き合いになりそうだしな」

「そう？助けてくれてありがとう、メデス♪」

「おう、用も済んだし、帰るか」

☆
★
☆
★
☆
★
☆
★
☆
★

「その後も何かと会うことが多くな。

それでこんな関係になったわけだ。

こいつがものすげえ女好きなのを知ったのはもう少ししてからだったよ」

「そうだったんですか。よくわかりました」

「オレはこの2人の命の恩人ってわけだな。借りは大きいぞ」

「返す気はさらさらないけどな」

「ふふっ、大きすぎて何されるかわからないからね」

「お前ら、助け甲斐ないな」

第16話 「初任務」 (後書き)

感想&評価待ってます

キャラクター紹介 闘争曲編（前書き）

キャラクター紹介が欲しいとの要望があったので作ってみました。
全員というわけではないのですが…。

身長や体重の割合とかわからないので（特に女性と巨人の）結構適当な所もあるんですが、

こんなものであればどうぞ。

キャラクター紹介 闘争曲編

☆如月家★

名前…如月 無月

性別…男

出身国…日本

年齢…18歳

生年月日…1990年6月24日

星座…蟹座

血液型…B型

身長…176cm

体重…61kg

趣味…特にないがあえていうなら音楽鑑賞

好きな食べ物…特になし

魔力属性…火

武器…剣・レーヴァテイン

聖霊…フェニックス

好きな言葉…強さ

容姿…髪は男にしては少し長めで、特にいじってはいない。

体型は太っている感じでも痩せた感じでもなく標準的。

顔は美形というわけでもなく、クールな感じ。

名前…如月 柰音

性別…女

出身国…日本

年齢…18歳（造られてから15年経っている）

生年月日…戸籍上では1990年6月24日（製造月日（容器から出たのは）1993年8月1日）

星座…蟹座

血液型…B型

身長…160cm

体重…43kg

趣味…買い物、マンガ

好きな食べ物…お菓子全般（特に甘い物）

魔力属性…風

武器…2丁拳銃・レリーフとフリューゲル

聖霊…ハーピー

好きな言葉…絆

容姿…髪は肩甲骨辺りけんこうこつまでである。

眼は大きくぱっちりと開いていて、活発な印象を受ける。

名前…サラ（天使の祢音）

性別…女

出身国…不明

年齢…身体年齢は祢音と同じ

生年月日…不明

星座…躰は祢音のものなので祢音と同じ

血液型…祢音と同じ

身長…祢音と同じ

体重…祢音と同じ

趣味…お茶

好きな食べ物…ケーキ全般

魔力属性…光

武器…物質としては無し。魔力を使用
容姿…祢音に白い翼が生えただけ。

名前…ルナ（悪魔の祢音）

性別…女

出身国…不明

年齢…身体年齢は祢音と同じ

生年月日…不明

星座…祢音と同じ

血液型…祢音と同じ

身長…祢音と同じ

体重…祢音と同じ

趣味…寝ること

好きな食べ物…ケーキ全般

容姿…祢音に黒い翼が生えただけ。

名前…如月 奏

性別…女

出身国…一応日本

年齢…18歳（造られてからは2年しか経っていない）

生年月日…1990年12月6日（製造月日は2006年7月3日）

星座…射手座

血液型…AB型

身長…156cm

体重…41kg

趣味…世の中観察

好きな食べ物…チーズケーキ
魔力属性…幻妖
武器…剣・ミスティルティン
聖霊…九尾の妖狐
好きな言葉…絆
容姿…髪は女性にしてはわりと短い。眼は少し閉じていて、大人しい印象を受ける。

名前…如月 日向
性別…男
出身国…日本
年齢…41歳
生年月日…1965年8月20日
星座…獅子座
血液型…B型
身長…190cm
体重…75kg
趣味…無月たちの成長を見ること
好きな食べ物…和食（任務で他国へ行くなどして食べる機会が少ないため）
魔力属性…音
武器…大鎌・デスサイズ
聖霊…ラグタイム
好きな言葉…愛情
容姿…髪は短く、立っている。がっちりとした筋肉質。

名前…如月 桔梗

性別…女

出身国…日本

年齢…38歳（とは見えないほどの若さをもつ）

生年月日…1968年9月10日

星座…乙女座

血液型…A

身長…164cm

体重…45kg

趣味…裁縫

好きな食べ物…和菓子全般

魔力属性…霊

武器…笛・沙羅奏樹

聖霊…卑弥呼

好きな言葉…愛情

容姿…長い黒髪を先の方で束ねている。体型はほっそりタイプ。

☆アカシャの末裔★

名前…フェイト・天照・アカシャ

性別…女

出身国…不明

年齢…不明だがかなり長く生きている。5000やら10000やら言われている（ちなみに身体年齢は18歳ほど）

生年月日…不明

星座…不明

血液型…不明
身長…160cm
体重…43kg
趣味…TVゲーム
好きな食べ物…雪見大福
アカシャの能力…『天照』高密度の魔力の玉を放つ。魔力の度合によるがかなり広い範囲に攻撃が可能
好きな言葉…運命は変えられる（それが可能不可能は関係なし）
容姿…腰辺りまである長く白い髪をもち、体型は細身。

名前…フェイト・久遠・アカシャ
性別…女
出身国…不明
年齢…不明だが天照に同じくかなりの長寿。だが天照よりは年下らしい。

生年月日…不明
星座…不明
血液型…不明
身長…162cm
体重…47kg
趣味…天照弄り
好きな食べ物…雪見大福
アカシャの能力…『久遠』自分の選んだ事象や常識、法則などと切り離れた空間を創造する
好きな言葉…運命は変えられない（好きな言葉というより信念に近い）

容姿…天照とは反対の黒い髪を持ち、それと対になるような白い肌。

名前…フェイト・月詠・アカシャ（通称魅夜）

性別…女

出身国…一応夜魔国

年齢…不明だがかなりの長寿（身体年齢は17歳程）

生年月日…夜魔国ではその世界の暦で562年1月12日

星座…世界に星座という概念なし

血液型…AB型

身長…164cm

体重…48kg

趣味…夜空を眺めること、宇羅々や佐次と話すこと、宴会

好きな食べ物…ウナギ。

アカシャの能力…『魅夜』魔眼を持っていた時はそれと併用した超強力な幻術だが現在使用可能かどうかは不明。

好きな言葉…全てはみんなの笑顔のため（これも信念のようなもの）
容姿…動きやすいように髪はある程度短くしている。よく動いているため、体は引き締まっている。

名前…フェイト・ゼロ・アカシャ

性別…男

出身国…不明。元々人間なので天照たちとは違う世界だが無月たちのいる世界でないのは確か

年齢…前ラグナロク終結からアカシャの一人となったので天照たちより遙かに若いがそれでも3ケタはある

生年月日…不明

星座…不明

血液型…A型

身長…178cm
体重…63kg
趣味…宝石収集
好きな食べ物…高級なものであればある程度好き
アカシャの能力…『ゼロ』後天的なアカシャの末裔であれど固有能力はあるようだが不明
好きな言葉…世の中金
容姿…男性にしては細身で、髪は短めになっている。

名前…フェイト・ドラキュラ・アカシャ
性別…女
出身国…不明
年齢…とにかく長寿。天照たちより長く生きている
生年月日…不明
星座…不明
血液型…不明
身長…170cm
体重…55kg
趣味…血を飲むこと。ワイン
好きな食べ物…血
アカシャとしての能力…相手の血液を飲むことで自分の下僕とする
など血に関係した能力を持つ
好きな言葉…血
容姿…長い金髪でいわゆるグラマーな体型をしている。

☆オルタナティブ★

名前…オーデイン
性別…男

出身国…不明

年齢…122歳ぐらい

生年月日…1886年10月10日（正確には今回生を得た日）

星座…天秤座

血液型…A型

身長…196cm

体重…78kg

趣味…なし

好きな食べ物…なし

魔力属性…ルーン

武器…槍・グングニル

好きな言葉…全てはラグナロクの阻止のため

容姿…白髪で長い。老人にしては筋肉のついた体をしている。

名前…レミア・シルヴァーレ

性別…女

出身国…イギリス

年齢…25歳

生年月日…1983年9月3日

星座…乙女座

血液型…A型

身長…167cm

体重…50kg

趣味…読書

好きな食べ物…ケーキ

魔力属性…時（正確にはリズムを操る）

武器…レイピア・ケニングと宝具・魔導楽譜『無限楽譜』

聖霊…ペガコーン。ユニコーン＋ペガサスな獣

好きな言葉…臥薪嘗胆

容姿…ストレートの髪は腰辺りまでである。案外華奢な体で、胸は結構ある。

名前…メデス・ジュライアス

性別…男

出身国…ドイツ

年齢…24歳

生年月日…1984年2月14日

星座…水瓶座

血液型…O型

身長…186cm

体重…69kg

趣味…ナンパ（やはり成功率低）

好きな食べ物…玉子料理

魔力属性…水（氷含む）

武器…槍・ゲイボルグ

聖霊…ウンディーネ

好きな言葉…恋をする度人は大きくなる

容姿…髪は少し長く、浮かした感じにしている。力はあるが外見からはあまりそう見えない。

名前…ルリア・カルレット

性別…女

出身国…アメリカ

年齢…27歳

生年月日…1981年5月28日

星座…双子座

血液型…O型

身長…170cm

体重…53kg

趣味…酒を飲むこと。うわばみのように飲む。

好きな食べ物…酒

魔力属性…木

武器…羽扇・扇風神

聖霊…句句くくのち廻馳

容姿…くせっ毛のある髪は肩甲骨辺りまである。

好きな言葉…酒飲み放題

名前…李白

性別…男

出身国…中国

年齢…67歳

生年月日…1941年5月3日

星座…牡牛座

血液型…A型

身長…175cm

体重…64kg

趣味…物書き

好きな食べ物…饅頭
魔力属性…雷
武器…クナイ・雷牙
聖霊…応龍
好きな言葉…堅実
容姿…白髪でオールバック。顔のしわは平均より少し多い。

名前…バトラ・ジエグナン
性別…男
出身国…オーストリア
年齢…24歳
生年月日…1984年11月12日
星座…蠍座
血液型…AB型
身長…177cm
体重…64kg
趣味…武術
好きな食べ物…焼き鳥
魔力属性…武
武器…剣、槍など何にでもなれる腕輪・武神
聖霊…阿修羅
好きな言葉…攻撃は最大の防御
容姿…短髪、武術で鍛えていて体は筋肉質。

名前…ゴート・バーニア
性別…男

出身国…オーストラリア

年齢…41歳

生年月日…1967年3月23日

星座…牡牛座

血液型…O型

身長…192cm

体重…81kg

趣味…動物の世話（気は優しくて力持ちなのだ）

好きな食べ物…トマト

魔力属性…土

武器…大剣・グラム

聖霊…ゴーレム

好きな言葉…動物愛護

容姿…大柄で筋肉質、つまりはムキムキな体。ちなみに調律師中、力が一番強い。髪は短髪。

名前…リルラ・ソルダート

性別…女

出身国…不明

年齢…17歳

生年月日…1991年2月14日

星座…水瓶座

血液型…B型

身長…160cm

体重…43kg

趣味…食べ歩き

好きな食べ物…さくさくビスケット

魔力属性…空間

武器…大鎌・名称無し

特殊能力…パーサーカー（基礎能力が大幅に上昇する）

好きな言葉…一生懸命

容姿…軽くクセのある長髪。

名前…リスト・ソルダート

性別…男

出身国…不明

年齢…14歳

生年月日…1994年2月14日

星座…水瓶座

血液型…B型

身長…170cm

体重…57kg

趣味…任務遂行

好きな食べ物…無し

魔力属性…時

武器…大鎌・名称無し

特殊能力…バーサーカー

好きな言葉…任務

容姿…長髪でもなく短髪でもない。前髪は長めで左右に分けている。

名前…ロイ・ルール

性別…男

出身国…イギリス

年齢…25歳

生年月日…1983年9月8日

星座…乙女座

血液型…AB型

身長…175cm

体重…66kg

趣味…釣り

好きな食べ物…ピザ

武器…ナックルダスター・バーストナックル

聖霊…アイアン

好きな言葉…勝利

容姿…金髪でイケメン。顔だけで実はそんなに強くなかったり…

☆紅き月★

名前…ロキ

性別…男

出身国…不明

年齢…122歳（容姿は20代前半）

生年月日…1886年10月10日（正確には今回生を得た日）

星座…天秤座

血液型…O型

身長…185cm

体重…66kg

趣味…ゲーム（TV、ボード、カードなんでもできる）

好きな食べ物…ステーキ

魔力属性…ルーン、闇

好きな言葉…詰まったときはレベル上げ
容姿…髪は程々に長い。体型は標準的。

名前…葛城 雫

性別…女

出身国…

年齢…24歳

生年月日…984年8月31日

星座…涙星座

血液型…B型

身長…170cm

体重…53kg

趣味…読書

好きな食べ物…ガム

魔力属性…創

武器…魔力を物質化したもの

好きな言葉…今できることは今の内に

容姿…髪を後ろの方で一つに束ねている。女性にしては背が高く体格は標準的。

優しそうな顔をしているが本心はそうでもなかったりする。

名前…スルト・巨人族

性別…男

出身国…ムスペルヘイム

年齢…321歳

生年月日…暦無し

星座…無し
血液型…A B型
身長…530 m
体重…321 kg
趣味…火山弾投げ
好きな食べ物…溶岩焼き
武器…レーヴァテイン
好きな言葉…燃え滾る^{たぎ}
容姿…かなりの巨体で、髪は短い。大食らいで太り気味。

名前…フェンリル
性別…男
出身国…不明
年齢…524歳
生年月日…暦無し
星座…無し
血液型…B型
身長…177 cm
体重…64 kg
趣味…鍛えること
好きな食べ物…肉全般
武器…槍・ブリューナク
好きな言葉…力
容姿…背中に翼があり、足が発達していて太い。

名前…ヘル
性別…女

出身国…ヘルヘイム
年齢…523歳
生年月日…暦無し
星座…無し
血液型…B型
身長…163cm
体重…42kg
趣味…暇潰し
好きな食べ物…特に無し
武器…骨
好きな言葉…特になし
容姿…半身が死に、半身が生きている。美女の内に入るが、奇妙な姿で嫌悪を感じる。

名前…ヨツン
性別…男
出身国…ヨツンヘイム
年齢…600歳
生年月日…暦無し
星座…無し
血液型…A型
身長…360cm
体重…200kg
趣味…鍛えること
好きな食べ物…肉全般
武器…青龍偃月刀
好きな言葉…力
容姿…普通の巨人族と変わらないが、聖獣を憑依させるとそれぞれ

の特徴が体に現れる。

名前…ユミル

性別…男

出身国…不明

年齢…不明

生年月日…不明

星座…不明

血液型…不明

身長…10m

体重…不明

趣味…不明

好きな食べ物…不明

武器…魔法

好きな言葉…不明

容姿…本編登場時は不完全な状態で脆く、上半身のみ。

☆異世界の者たち★

名前…ライ・イールス

性別…男

出身国…ルイシュ国

年齢…18歳

生年月日…870年7月8日（ルイシュ国のある世界の暦で

星座…三日月座
血液型…B型
身長…172cm
体重…62kg
趣味…散歩
好きな食べ物…辛いもの
武器…剣
好きな言葉…自由
容姿…無月と同じくらいの長さの金髪で碧眼。白人なので肌は白い。
体格は見た目細身。

名前…ルーエ・イールス
性別…女
出身国…ルイシュ国
年齢…28歳
生年月日…860年8月2日
星座…太陽座
血液型…A型
身長…161cm
体重…45kg
趣味…お茶
好きな食べ物…紅茶
好きな言葉…金
容姿…髪は非常に長く、ライと同じで金髪碧眼。巨乳。

名前…ユイ・フルーリー

性別…女

出身国…ルイシュ国

年齢…24歳

生年月日…864年7月7日

星座…三日月座

血液型…A型

身長…158cm

体重…42kg

趣味…アクセサリー集め

好きな飲み物…いちごミルク

武器…銃

好きな言葉…ラブラブ

容姿…祢音ほどの長さの金髪を持つ。ルーエと同じくらいグラマー

名前…フロウ・ノーヴェ

性別…男

出身国…ルイシュ国

年齢…25歳

生年月日…863年9月29日

星座…満月座

血液型…AB型

身長…178cm

体重…60kg

趣味…頭を使うゲーム

好きな食べ物…なし

武器…短剣＞とうてきよう投擲用＜

好きな言葉…時は金なり

容姿…メガネをかけ、短い茶髪で痩せているが健康に問題はない。

名前…オルグ・フォールス
性別…男

出身国…ルイシュ国

年齢…34歳

生年月日…854年12月1日

星座…新月座

血液型…O型

身長…203cm

体重…85kg

趣味…特になし

好きな食べ物…なし

武器…格闘

好きな言葉…忍耐

容姿…大柄、巨体。ちなみに無口な性格

名前…佐次

性別…男

出身国…夜魔国

年齢…35歳

生年月日…544年8月19日

星座…世界に星座という概念なし

血液型…O型

身長…180cm

体重…75kg

趣味…体を鍛えること

好きな食べ物…りんご

武器…主に剣を使う。場合によっては斧、弓なども使用

好きな言葉…世のため人のため。

容姿…筋肉隆々。髪は短く、適当に切っているため、長さはバラバラ。

名前…宇羅々

性別…女

出身国…夜魔国

年齢…24歳

生年月日…555年7月2日

星座…世界に星座という概念なし

血液型…A型

身長…170cm

体重…51kg

趣味…魅夜の世話

好きな食べ物…牡丹餅

好きな言葉…奉仕

容姿…長い黒髪を持ち、白い肌をしている。

名前…リーガル・シュティン

性別…男

出身国…ハイリヒレーベン

年齢…61歳

生年月日…2192年10月21日

星座…水神座

血液型…O型
身長…170cm
体重…75kg
趣味…金儲け
好きな食べ物…チョコレート
武器…魔法
好きな言葉…時は金なり
容姿…少し太り気味ではあるが動きは悪くなく、様々な宝石を身につけている。

☆水月学園の友人★

名前…新田 康宏
性別…男
出身国…日本
年齢…18歳
生年月日…1990年5月5日
星座…牡牛座
血液型…O型
身長…170cm
体重…68kg
趣味…ゲーム
好きな食べ物…寿司
好きな言葉…明日は明日の風が吹く（言い訳
容姿…短髪、ワックスでたてている。体格はいい方。

名前…安井 祐介

性別…男

出身国…日本

年齢…18歳

生年月日…1990年8月20日

星座…獅子座

血液型…B型

身長…165cm

体重…59kg

趣味…読書

好きな食べ物…から揚げ

好きな言葉…休む時は休む

容姿…髪は一般的な長さより少し長め。小柄で大人しそうな顔。

名前…新山 千春

性別…女

出身国…日本

年齢…18歳

生年月日…1990年12月25日

星座…山羊座

血液型…B型

身長…158cm

体重…42kg

趣味…マンガ、カラオケ

好きな食べ物…甘い物

好きな言葉…何とかなる

容姿…髪は祢音より少し短い。胸はある方。

キャラクター紹介 遊戯曲編（前書き）

こちらは遊戯曲編です。

キャラが増える度に追加していこうと思います。

キャラクター紹介 遊戯曲編

名前…来栖 真夜^{しんや}

性別…男

出身国…一応日本となっている

年齢…不明

生年月日…不明

星座…不明

血液型…不明

身長…170cm

体重…60kg

趣味…散歩

好きな食べ物…特になし

魔力属性…偽

武器…???

容姿…スラリとしたアイドルのような美形。

名前…来栖 真夜^{まや}

性別…女

出身国…しんやに同じ

年齢…しんやに同じ

生年月日…しんやに同じ

星座…しんやに同じ

血液型…しんやに同じ

身長…しんやに同じ

体重…しんやに同じ

趣味…散歩（夜限定）

好きな食べ物…野菜ジュース

名前…麻上 涼子

性別…女

出身国…日本

年齢…18歳

生年月日…1990年8月20日

星座…獅子座

血液型…A型

身長…152cm

体重…40kg

趣味…読書

好きな食べ物…牡丹餅

好きな言葉…小さなことからコツコツと

容姿…長い髪で大人しそうな顔をしている。勉強や読書の時だけメ
ガネをしている。

キャラクター紹介 遊戯曲編（後書き）

最後の空白は小説は600字以上でないと投稿できなく、足りない
ので空白を作りました。

第17話 「暇潰しで恋物語!？」 (前書き)

これはちよつと長くなります。

恋愛物なんですが初の試みですし、なんか付き合うまでの過程が簡単かと思ってたんですがよろしくお願いします。

第17話 「暇潰しで恋物語!？」

くオルタナティブ・本部く

「退屈だなあ…本部にいても…」

オレたちは本部のある一部屋に集まっている。

いるのはオレと柰音と奏。

柰音がベッドに寝転がり、退屈そうに天井を見ている。

「……やっぱり…退屈だなあ…」

「なんならやってみますか？私の気分転換」

「うわっ！ビックリしたあ」

急に扉が開き、天照様がそこにいた。

「気分転換ですか？」

「はい。ちょっとしたゲームです。どうですか？」

「行きます行きます♪」

「ではついてきてください」

「丁度ゲームをやりにいこうと思ってたんですよ。」

その途中で声が『退屈だ』という聞こえてきたものですから声をかけてみたんです」

「天照様はゲームするんですか？」

「意外としますよ。こんな身ですから自由に外を出歩くこともないですしね……着きました」

するとある部屋の前で止まった。

「ここですか？」

「はい。…久遠、準備できてますか？」

部屋はかなり広かった。

水月学園の体育館の半分ぐらいの広さがある。

そこに人が入れるぐらいのカプセルが10個。

そして中心に大きなややこしそうな円錐状えんすいじょうの機械がある。

久遠様と来栖がその機械をいじっている。

「できてるわよ……って、そいつらも？」

久遠様はオレたちの姿を見ると少し眉をひそめる。

まあそれは疑問からであって嫌悪からではなさそうだ。

「はい。大丈夫でしょ？」

「まあそのぐらいならね。え…と…5人ね。じゃ始めるわよ」

「待ってください。ゲームって言ってましたがどんなゲームなんですか？」

「簡単にいえばこれはロープレよ。仮想空間で遊ぶゲーム。

そのメットを被ってそのベッドに寝転んでもらう。

そうすれば意識だけが仮想空間に送られて遊ぶことができるわ。

与えられた役割を疑問に思うことなくプレイできる。

言ってみるなら超リアルな夢って所かしら。

ほら、夢の中じゃ自分がどんな状況におかれても疑問に思うことはほとんどないでしょ？

そういうことよ。わかった？」

なんでそんなもんがここにあるんだよ。

「なんとなくですが…」

「百聞は一見に如かず、やってみたらわかるわよ」

オレたちはそれぞれ脳波を調べるようなメット型の機械を被り、指定されたベッドに座る。

するとガラスに覆われ、カプセル状態となる。

「今回のシチュは恋愛物、私が創ったシナリオで進むからそのつもりで」

恋愛か……オレには向いてなさそうだな。

「そうそう、無月。今回はあなたが主役よ」

「ちょ！オレはそんなのは無理ですよ！？」

「他にいないんだしいじゃない。大丈夫よ、夢の中なんだから。

相手は……秘密。ふふふ、楽しみなさいよ」

オレの意識は眠るように途切れてしまった…

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

この物語はフィクションであり、

実在する人物……以下略

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「いいもんだな、1人で登校できるのは」

オレは如月無月。水月学園に通う普通の高校生だ。

ちなみにクラスは2－1。

現在オレは水月学園への道の途中でのんびり登校中だ。

普段は祢音と奏という妹たちも一緒に登校しているのだが、今日は何か用事があるようなので先に行った。

祢音の方はいつも隣で色々話してくるため、

基本的に朝はテンションが低いオレにとっては、1人で登校できる日というのは貴重なものだ。

今日も学園へ遅刻するギリギリまでのんびりとだらけながら朝のニュースを見ていた。

だが、せっかくの時間はある2人の人間によってぶち破られた。

「こらー！」

叫び声とドタドタと人の走る音がしたので後ろを振り返れば2人の女子が走ってきた。

主に走っているのは白色の髪をもつ方。

もう一方の黒髪女子は面倒くさそうに手を引っ張られて仕方なく、
という感じで走っている。

そいつらとのすれ違い様にオレは手を握られた感触がしたかと思うと

「うわっ！」

と、オレの体は後方に引っ張られる。

「遅刻ギリギリだったのに何ボケーツと歩いてるんですか!？」

「…一応間に合うんだけど……」

「あんた不運ね。こんなのに見つかるなんて」

オレと一緒に引っ張られる女子が言った。

結局そのまま引っ張られ続け、オレは余裕で登校した。

く水月学園・2—1く

「疲れた……」

「珍しいね。余裕で登校してくるなんて」

自分の席に着いて早々祢音が声をかけてきた。

「なんか変なのに見つかってな：引っ張られてきた」

「へえ：誰だろ？」

「生徒会長だよ！」

自信を持ってそう言ってきたのはメデス。

オレの友人Aだ。

「ああ！赤司^{あかしや}邪^{あまてらす} 天照さんだね」

生徒会長か：どうりで見覚えがあると思った。

「そう！英語を中心にほぼ全ての教科がこの学園のトップクラス。

ただ唯一、並なのが体育。体が平均より小さいせいカ力を求める競技には成績が伸びないようだが、

またそこがいいというヤツも多い。

性格も明るく、男女ともに人気が高い。

さらにリーダーシップも高いため、生徒会長でもある。

そして極めつけは万人を虜^{とりこ}にする謳声だ！

それを聴いた者で彼女のファンにならないヤツはいない！

だがそれを聴けるのは文化祭のみ。

まれに屋上で練習していることもあり、

それを聴きに休み時間の度に屋上へ足を運ぶヤツも少なくはないというほどの謳声！」

「熱いね…」

「そして同じくして登校してきたのは双子の妹、赤司邪 久遠くおんちゃん。

姉の天照とは違い、成績は並だがそれはめんどくさがりというその性格ゆえ。

実は姉ほどの頭脳、そして身体能力を持つとまで噂される美少女だ。

性格は姉とは正反対でクールな皮肉屋。それゆえのファンも多い。

それでいつも姉の天照をからかって楽しんでいるんだ。

さらに天照と同様の謳声を持つがクールな性格のせいか姉以上にその謳声を聴ける機会は少なく、

オレでさえどこから聴こえてきただけで、目の前で謳う所を見たヤツは聞いたことがない。

そのため、この2人は『水月の謳姫』として双壁をになっているのだ！

一度でいいからあの2人のデュエットを聴いてみたいぜ!」

「はいはい、読者への説明ご苦労さん」

「ん? 読者?」

「なんでもねーよ」

「で?なんでそんなアイドルと一緒に登校してたのよ?」

柊音は完全におもしろがった顔で訊いてくる。

「ただ引っ張られてきたんだよ。遅刻するからって」

「な〜んだ。おもしろくない」

そこでチャイムがなり、ここはお開きとなった。

第18話 「滅茶苦茶姉妹」

そして時は過ぎて放課後…。

「さあて帰るかな。………ん？」

ふと、ズボンのポケットに手を突っ込ませた時によりやく気付いた。

「どうしたの？」

一緒に帰ろうと奏と一緒に近づいた祢音が訊く。

「…ケータイがない」

「えー！？何してんの！？ケータイなくすなんて——」

ピンポンパンポン♪

—2年1組、如月無月くん。手が空きましたら生徒会室まで来て下さい。繰り返しします。

2年1組、如月無月くん。手が空きましたら生徒会室まで来て下さい。—

ピンポンパンポン♪

「…いいタイミングだな」

「行ってらっしゃい。教室で待ってるよ」

「早く帰ってきてくださいね」

「はあ…」

（水月学園・生徒会室）

「早かったですね」

目の前にはメデスが熱く語り、なりゆきとはいえ、朝一緒に登校してきた生徒会長、

そして側近と思われる女子生徒が2人、合計3人が待っていた。

「これは何でしょう？」

そう言って掲げる『コレ』はまさしくオレのケータイだった。

「落ちてたんですか？」

誰が見られて困るものは何もないが少し心配だ。

「いえ、私がスリました♪」

「おいしい!!」

オレは反射的に即座にツツコんだ。

「本来持ってきてはいけないこうゆう物を持つてくるのはどうかと思いますねえ」

生徒会長は目の前のテーブルにケータイを置いた。

「いや、それよりも他人ひとの物をスツた方がどうかと思いますが？」

「これを返してほしければ、今後絶対に持つてこないということを誓ってもらいます。」

先生たちにはまだ言ってますから、今のうちですよ」

シカトかよ。

「はい誓います」

「誠意が感じられませんか。もう一度」

さっさと返して帰してほしいんだけど…。

コンコン

突然後ろのドアがノックされる。

「誰ですか？今は取り込み中なので待っていてください」

そういう言葉にも拘らず、ドアはゆっくりと開き、

隙間から野球ボール大の球が転がってきた。

「まさか!？」

そのボールは急に煙を放ち、室内が真っ白になる。

「目を閉じて! 息もしないで！」

ここにいない、誰かの声を聞いてオレはとっさに言われた通りにする。

「つくしゅん！」

「眼が…」

その煙には何か仕掛けがあったようで室内は混乱状態になる。

しかもオレまで巻き添えになっている。

「ほら、行くわよ」

「ちょ…!」

眼を閉じているのに急に手首を握られ、朝と同じように引っ張られる。

そのまま生徒会室を出る。

「もう開けていいわよ」

そしてようやくオレの手を引っ張ったヤツの姿が見えた。

「お前は…」

「また会ったわね」

朝会った女子生徒だった。

生徒会長の双子の妹の名前は…赤司邪 久遠。

そのまま階段を3階分降り、外へ出ると上履きのまま少し離れた体育館の裏まで走った。

「はあ……はあ…」

「あら？こんな距離でもう息切れ？だらしないわね」

久遠は全く息が切れていない。

「うるせえ…体力作りなんて…普段からやってねえんだよ。」

それに…あれだけの距離走ったら…誰だって切れるだろ」

校舎の方では何やら騒がしくなっている。

まあ原因はこいつだろうが…。

「ほら…ケータイ」

目の前にオレのケータイが差し出される。

「ありがとう。…あれは何だったんだ？」

「あれ…？ ああ、あれは私が造った煙玉。

コショウを浴びた時のくしゃみと、催涙ガスで起こる眼や鼻への刺激を組み合わせたものよ。

ちなみに、無味無臭」

無味は必要ないだろ。

「どうするんだよ…こんなこととして」

「大丈夫よ。慣れてるから」

「は！？」

「今まであった定期テストの妨害、この間の生徒総会で生徒会長の
上から大量の水が降ってきたのも、

そんな大きな事件は全部私がやってたのよ。協力者もいたけどね」

あれはお前の仕業だったのか。

「本当だったのか。そんなことしていたのがお前だなんて。

外見だけならそんな風には見えねえし。クールなアイドルって言わ

れてるらしいしな」

「そりゃあね。外見には特に気を遣ってるから。」

それにしても…アイドルねえ…：ロクなもんじゃないわね、そんなもん」

そして呆れたように小さく息を吐く。

「なんでそんな騒ぎ起こしてるんだよ。生徒会長が嫌いなのか？」

「そんなことないわ。むしろ好きよ」

「だったらなんで」

「あの子をいじめるのが好きだからよ。あの慌てふためく様がね、おかしいじゃない」

そう言ってその様子を思い出しているのか、ニヤニヤと笑っている。

なんてやつだ…そのためにこんなことしてるのか。

「そうかい。じゃあオレは戻ってるぞ。助けてくれて、ありがとな」

「どういたしまして」

「あ、帰ってきた」

「遅い…」

「まあ色々あってな」

「大変だったね。生徒会室で騒ぎがあったんだってね」

「まあな」

ほんと…大変だったよ。

第18話 「滅茶苦茶姉妹」 (後書き)

感想&評価待ってます。

第19話 「生徒会長の提案」

く水月島・並木道く

「それでさー千春がねえ…」

「ふーん。へえー。ほおー」

「って聞いている！？…わけないか」

昨日と違い、今日はいつも通りの通学…ではなかった。

「こらあー！！！」

「ん？」

怒声に振り替えると向こうから昨日の2人が走ってきた。

それも目の前に。

「邪魔よ」

「のわっ！」

久遠は横へ避けようとせず、オレを押しつけて直進していった。

「すみませんでした！久遠！」

その後やってきた天照は、一時停止して慌^{あわ}ただしく一礼すると、

すぐに久遠を追って走って行った。

「つてえ…！」

オレが体勢を整えた時、

嵐のように来ては去って行った2人の背中はかなり小さく見えていた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「まあ押されただけだしな、大丈夫だ」

疲れは増したけどな…。

く水月学園2—1く

「無月！」

「はい」

その日の放課後、担任の御影日向みかげひゆうがに呼ばれた。

「これを生徒会室に届けてくれないか？」

そうして渡されたプリントはこの前のLHRで、

もうすぐある、遠足はどこへ行くかというアンケートをとったプリントだった。

1年、2年、3年で行く場所と日にちは違うがだいたい同じ時期にある。

「オレがですか？」

それぐらいの役目なら他にいくらでもいるのに、
なんでオレを選んだのか気に入らなかったから訊いてみた。

「そう言うな。どうせこれから暇だろう？」

「まあ：そうですね」

部活にも入っていないオレはこう言われると何も言い返せない。
仕方なくアンケートの束を受け取った。

はあ：またあそこに行くのか。

「わたしもついていこうか？」

「ああ、だが生徒会室の外で待っていてくれないか？」

あの2人のゴタゴタに巻き込みたくないしな。

「ん、わかった。じゃあ行こ」

生徒会室

「遠足のアンケート持ってきましたー」

「はい。ちょっと待って下さい」

部屋には前回来た時と同じように生徒会長が座っていた。

だが前回と違うのは何人かの生徒とせっせと書類整理をしている所。

「では受け取ります」

しばらく待っていると天照は手を休め、こちらを見ると両手を差し出してきた。

そしてプリントを渡すと

「ご苦労様です」

「じゃ、オレはこれで…」

今回は無事に終わりそうだな。

オレが生徒会室のドアノブに手をかけると

「そういえば無月さん…」

と天照から声がかかった。

げ。

「なんですか…?」

「久遠…見ませんでしたか?」

「いえ、今朝以外は会ってませんけど?」

「ちょっと…探してきてくれませんか?」

「え…なんでわざわざ災いの元を…」

わけわからんな。

「監視しておいて欲しいんですよ」

「監視?..?」

ますますわけわからん。

「これから忙しくなるんですよ。そんな時に邪魔をされでもしたら面倒な事になるので。」

あの子はこっちの都合なんてお構いなしですからね」

「なぜオレを…?」

「そこにいますから。それにこれ、必要ですよね?」

「く…いつの間に」

手に持っているのは間違いなくオレのケータイ。今回はサイフまで盗られてしまった。

「必要でしたらこれから最大1週間、放課後1時間だけで結構ですから久遠を監視してくれませんか？

一緒にいて、生徒会室に何かしようとしたら全力で止めてください。

契約料としてこれらは返しますし、

成功報酬として体育祭と文化祭での2年1組の予算、いくらか融通ゆうずうきかせますよ？」

手段を選ばない会長なんだな、それでここまでのし上がってきたのか？

そもそもこれは脅迫じゃないか？

成功報酬はどーでもいいが、ケータイとサイフは返してもらわなくちゃならない。

「わかりました。だからさっさとケータイとサイフ返して下さい」

「ありがとうございます。それでは今から早速お願いしますね」

ケータイを返してもらい、オレはようやく生徒会室から出ることができた。

（生徒会室前）

「お兄ちゃん！絶対成功させてよね！」

ドアを閉じると祢音がそんなことを言いだしてきた。

「聞いてたのか」

「結構長かったしね。ヒマだったから盗み聞きしちゃった」

「なら説明する必要ないよな？オレは今から久遠を探しに行く。お前らは先に帰ってろ」

「ううん。わたしも手伝うよ」

「別にいいって」

「いや、手伝わせてもらうよ！全ては予算のため！」

そして祢音はグッと手を握り締めた。

「そんなに予算が欲しいのか？」

「当たり前だよ！少しでも上がった方がいいものが創れるじゃん！

だから、だめだと言っても手伝うからね。

おっと、こうしちゃいられない！さっさと捜しに行かないと！行く

よ奏ちゃん!」

「私はもう帰りたいんですけど…?」

「問答無用!!」

柰音は奏の腕を強引に掴むと振り向いて走って行った。

「はあ…どういつもこいつも…」

柰音に任せておけば、オレはこのまま帰っても良さそうだなとは思った。

だがオレは約束を破るのは好きじゃない。

仕方なくオレは柰音と反対方向にトボトボと歩きだした。

「まったく、どこ行ったんだ?」

だいたいのを回ったが全く見つからなかった。

まさかもう帰ってるんじゃないだろうな。

♪♪♪♪♪

廊下を歩いていると窓の外から歌声が聞こえてきた。

「歌…?」

外かと思い、窓から外を見渡すがその歌声の持ち主は見えない。

聞こえてきた歌声に耳を澄ませる者や、それを知ってか知らずか普通に過ごしている者もいる。

屋上か…？

屋上へ繋がる階段への唯一の扉は常に鍵がかけられているがあいつなら何とかできそうな気がする。

オレはその扉がある方向へ体を向けた。

第19話 「生徒会長の提案」(後書き)

一つ質問があるんですが今までは奏は無月を呼び捨てにし、兄として認識していませんが、兄として呼ばせたいですか？

呼ばせたいか呼ばせたくないか、できれば理由も添えて私の作者紹介ページからメッセージを送ってください。

この結果で今後どうしていくかが決まりますので意見がある人はできるだけメッセージください。

そうでないと私が勝手に決めてしまい、あなたの希望通りにできないかもしれませんのでよろしく願います。

感想&評価お待ちしております。

第20話 「屋上の謳姫」

〽水月学園・屋上〽

ガチャ…キィィ…

重そうな音を立て（実際重かったんだが）、屋上への扉が開いた。
すると屋上の中で歌う久遠を見つけた

「♪~~~~♪~~~~♪~~~~~~~~——っ誰!？」

オレの気配を感じ取った久遠は途中で歌うのを止め、こちらへ振り向いた。

「あなたは…」

そこで言葉を止めたが、ここ最近顔を合わせているからオレのことはすぐわかっただろう。

「こんな所で歌ってたんだな」

「なんでここに……」

久遠余計な所を見られた、というような顔をしている。

「生徒会長からあんたを見張るように頼まれたんだよ。」

忙しい時に邪魔されちゃかなわないからって。んで捜してたら歌が

聞こえてきて屋上へ来たわけだ」

「鍵は……閉めた覚えがないわ。らしくないミスね」

なんで鍵持ってるんだ？

「どうしたんだ？歌ってる途中だったんだろ？

オレは見張ってるだけで生徒会の邪魔をしないようなら何もしねえし」

「存在自体が邪魔なのよ……。はぁ……帰る」

すっかり気分を削がれてしまったようで、溜息を一つ吐くと傍にあったカバンを持ち、扉の前まで歩いた。

そこで止まると

「何ボーツとしてるのよ。あなたが帰らないと鍵閉められないじゃない」

と、呆れたようにオレに言ってくる。

「あ、ああ」

とりあえず、オレも屋上から出ることにした。

（水月学園・4階廊下）

「あーっ！こんな所にいた！」

扉を開けると丁度祢音と奏が目の前を通り過ぎようとした所に出くわした。

「久遠さん！わけあって監視させてもらいます！」

すると祢音は久遠の後ろに立つオレの隣に立ち、奏もそれに続いた。

「天照も余計なことしてくれるわね。」

私はもう帰るわよ。天照の邪魔しないからさっさと離れてくれる？」

ちよつと不機嫌そうだな。

まあ自分の楽しみを邪魔されたんなら仕方ないことなんだろうけど。

「私なんか監視してるより天照を手伝ってあげた方がよっぽど役に立つわよ。じゃ」

そして久遠は下駄箱の方へ向かって歩き出した。

「だったら私と遊びませんか？久遠さんの趣味も知りたいですし」

そうするとコロツと態度を変えた祢音は久遠について行き、さらに奏も後を追う。

「あまりへばりつかないでくれる？」

「いやいや、今日は一日お供させてもらいますよ」

そこで祢音は振り返り、ウインクする。

なんのサインだそれは。

「はぁ…勝手にしたら？」

「そうさせてもらいます♪」

そんなやり取りをしながら3人は階段を降りて行った。

「…………手伝った方がいいのか？」

あのウインクが行けということなら行った方がいいんだろうな。

メンドクせ。

とは言いつつもオレは生徒会室へ足を運んだ。

生徒会室

「生徒会長ー。ちょっといいですか？」

「? どうしました？」

生徒会長は休憩中だったのか、口につけていたティーカップを離して訊いてきた。

他の生徒はいない。もう帰ったんだろうか？

「久遠さんに邪魔しないから監視するぐらいなら生徒会を手伝ってこいって言われた上、

妹にも会長の評価を上げておいてくれというウインクまでされて手伝いに来たわけです」

「心の通じ合う兄妹なんですね」

「いや、それはないと思いますけど」

嬉しそうに言う生徒会長には申し訳ないがそれは否定させてもらおう。

通じ合っているというか魂胆が見え見えという方が表現が合っている。

「そうですか…。無月さんは手伝う気はありますか？別に無理にとは言いませんよ？

無月さんには無月さんの都合があるでしょうし」

どうせ帰っても暇だしなあ…。

かと言ってわざわざメンドくさいことに飛び込むのもなあ…。

まあいっか。

「いいですよ。素人のオレが力になれるんでしたら」

「ありがとうございます」

生徒会長は満足そうにお礼を言った。

「じゃあ早速ですけどこれからすることについて説明していいですか？」

「はい」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「無月さんにしてもらうことはこんなものですかね」

説明はだいたい5分かそれぐらいで終わった。

仕事は第一に郊外研修という名の遠足で行く所について各クラスで集めたアンケートの集計、

それが終われば後1ヶ月後に迫った体育祭についての書類整理。

アンケートの集計という単純な作業の割に一番時間がかかるからこの時期は忙しくなるんだそうだ。

人気にんきがないのか生徒会の役員も少ない。

それで余計に忙しくなる。

そこでオレはアンケートの集計を1人でこなすことになる。

だが2人か3人でやった方が早いし、ミスも確認しやすい。

だから誰か他に手伝ってくれる人を探して手伝ってもらってほしいとのこと。

まあその辺は祢音や奏にでも手伝ってもらうか。

丁度そこで下校時刻が近づいているという放送が入る。

「それじゃあオレはこれで…」

そして席を立つと

「あ、私も帰りますので待っていてくれませんか？」

「え……あ、いいですけど」

意外な言葉だったから返答するのに少し時間がかかってしまった。

生徒会長は書類の束を引き出しに入れたり後片付けをするとカバンを持って

「では行きましょう」

と言った。

（通学路）

「……………」

「……………」

無言だ…。

なんとなく気まずい。

「生徒会長は普段家で何してるんです？」

必死で考え抜いたありきたりな疑問を言ってみる。

「私は家事ですねえ。妹の久遠は自分から手伝おうとしませんか」

「家事は母親とでも一緒に？」

「ええ。お父さんは仕事で海外にいるので2人でやっています。

良い職に就いていて、家も大きいんですよ？」

へえ…、お嬢様ってヤツか…。

久遠の方はワガママお嬢様って感じだけだな。

「久遠ももう少し家事を手伝ってほしいんですけれど…」

「苦労してるんですねえ。その上ちょっかい出してくるなんて」

「まったくです……。あ、私はここで」

止まった所はバス停。

もうすぐバスが来る時間のようで、すでに何人かの生徒が喋りながらバスを待っている。

なるほど、バス通か。

「じゃ、また明日」

「はい。また明日」

第20話 「屋上の謳姫」 (後書き)

感想&評価待ってます。

第21話 「上を見れば蜘蛛」

〽水月学園・2―1〽

「いいよ」

「私입니다」

放課後、オレは生徒会の仕事を手伝ってほしいと妹2人に頼むと二つ返事でOKしてくれた。

「そう言ってくれると思った。んじゃあ早速行こうぜ」

「うん」

〽生徒会室〽

「ちわっす」

「「こんにちは」」

ガラガラっとドアを開けると既に生徒会長や2人の生徒会員がせつせと仕事をしていた。

オレたちも遅く来たわけではないのだが、それ以上に早く来ていたようだ。

「あ、早速来てくれたんですね。ありがとうございます！」

作業の手を止め、こちらに來ると小さくお辞儀した。

「そちらの2人も手伝ってくれるんですか？」

「はい！如月祢音です」

「如月奏です」

「3人もいれば集計の方は任せられますね。ではこちらに來て下さい」

プリントが積まれた1つの机の前に案内され、簡単に説明を受ける。

「ではよろしくお願いします」

そうして生徒会長は自分の仕事に戻って行った。

「さて、始めるか」

そうしてオレたちも作業を始めた。

プリントは今から丁度1週間後の木曜日、その日の遠足にどこへ行くかアンケートをとったものだ。

水月島散策や遊園地など、様々なプランの候補があり、そこから選択するものだ。

ちょっと始めただけだが、やはりこんな小さな島より、普段行かない本州の方に票が集まっている。

学年の人数は277人。クラスは7クラスある。3人とはいえ、ちよつと時間がかかりそうだ。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「無月さん、今どのくらいですか？」

声がしたので振り返ると生徒会長が自分の手を休めずに訊いてきた。

「今、半分ぐらいですかね…」

積まれているプリントを見比べてだいたいの予想を答える。

「お疲れ様でした。今日のところはここまでです」

「まだそんなに時間経ってませんよ？」

始めてからたった30分程度しか経っていない。

柰音が訊くと生徒会長は

「元々半分以上できてたら帰すつもりでしたし。

週末に先生方が下見に行ってくださいるので、金曜までに提出すればいいんですよ」

「：：そうですか。生徒会長がそう言うんなら：。柰音と奏もそれでいいよな？」

それでいいか2人に訊くと

「私はいいよ」

柰音はそう答え、奏はこくりと頷く。

ということだったので帰ることにした。

「じゃあお疲れ様でした」

「「お疲れ様でした」」

「はい、お疲れ様でした」

そして今日のところはオレたちは帰った。

く下駄箱く

「さく、帰るか」

靴を履き替え、柰音と奏が準備できたのを見計らって独り言のように言う

「ちょっと待って下さいーい！」

生徒会長の声がした。

それだけでは誰に言ってるかわからなかったが、

おそらくオレたちの事だろうと思い、振り返ると後ろに生徒会長がいた。

「何かミスでもありましたか？」

また戻るの面倒だなと思いつつそう訊く。

「いえ、どうせなら一緒に帰ろうかと思ひまして」

だが嬉しい事に予想は外れてそういう事だそうだ。

「生徒会は忙しいんじゃないかなかったですか？」

という称音の質問には

「いえ、みなさんが助けてくれ、余裕ができたので終わらせて来ました」

と答える。

「そうですか、そんなに余裕ができたのなら良かったです。一緒に帰りましょうか」

〽水月公園・並木道〽

目の前では3人が話している。

まあ主に話しているのは祢音と生徒会長だな。

「生徒会長もっとしつかりした人だと思ってましたよ」

「そうですか？」

「いつも前で話してる時とかキビキビしてますし、声にも力がありますし」

「そういう所では少し演技してますよ。」

それと、生徒会長と敬語は止めて下さい。

学園外では友達として付き合っていきたいですから呼び捨てでもいいですよ」

「はい。ですけど敬語は年上ということで使わせてもらいますよ？」

「わかりました。無月さんも、よろしくお願いしますね」

それをわざわざ振り返ってオレにそう言ってきた。

「わかりました」

「…ちよつとちよつと、天照」

すると桜の木の陰から手招きする人影が…。

「久遠？」

その人影は久遠だった。話しかけてきてからずっと手招きしている。

「どうしたんですか？」

天照さんは何の疑いもなく、久遠に近づく。

「上上…」

天照さんが傍まで近寄ると、今度は人差し指を上へ向ける。

「上…？」

そして上を向くと

「それ！」

というかけ声と共にピツと音がし、丁度天照さんの上からクモやらムカデやらが大量に降ってきた。

「きつ…きゃあああああああ！！！！」

1秒ほどの溜めがあった後、大きな悲鳴が聞こえた。

天照さんは悲鳴を上げながら、頭を抱えてしゃがみこんだ。

「じゃあね〜」

その様子を満足そうに見届けると久遠は走って去って行った。

「う…うう…」

震えてしゃがみこんでいる天照さんの傍まで駆け寄り、下を見るとクモやらムカデやらの人形が落ちていた。

「人形…」

奏が摘み上げた人形をよく見ると本当によくできた人形だった。

今回はちょっとやりすぎじゃないか？

「ひどいよ！喋ってる時にはいい人だったのに！」

「はあ〜…：…久遠にも困ったものです。いつもいつも…」

落ち着いた天照さんは立ち上がると片手で頭を抱える。

「なんか正反対な性格ですね。双子って聞いたんですけど…」

「結構似てる所もあるんですけどね」

そんなハプニングがあつたが、この後は大したこともなく平穏に帰れた。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

そんなこんなで遠足前日まで過ぎて行った。

そしてどういうわけか、今日は珍しく久遠も一緒に帰ることになった。

く水月公園・並木道く

「今までお疲れ様でした。明日は存分に楽しんでくださいね」

帰る途中で天照さんが^{ねぎら}劳いの言葉をかけてくれた。

「はい。私たちも天照さんの手伝いができてよかったです」

実はオレたちはアンケートの集計が終わった後も生徒会の手伝いとして今日までやってきた。

普段生徒会なんて意識していなかったが、大変なことをしていると
いうのがわかった。

毎年の体育祭の時も文化祭の時も、こうやって頑張ってきたんだな。

「何で生徒会長になったんですか？」

オレはふと、疑問に思ったことを訊いてみた。

「そうですねえ…。やっぱりみんなの学園生活を支えられるということですかね？」

嬉しいじゃないですか、自分が頑張ってきた行事でみんなが楽しんでくれるのを見ると」

その時の光景を思い出しているのか、そう言って天照さんは笑った。

「生徒会が頑張ってくれてること、みんなほとんど実感ないんじゃないですか？」

実際オレはなかったですし」

「それでもいいですよ。縁の下の力持ち。褒められるためにやるんじゃないんですから」

自分より他人に尽くすのか…。

「立派ですね」

「ありがとうございます」

「で？結局どこへ行くことになったわけ？」

話が一段落ついた所で久遠が話した。

「本州にあるTDL、とってもドラマチックランドですよ」

その問いに柊音が答える。

「へえ」。船に乗るわけね。何時？」

「7時半ですけど、それが何か？」

「何も…。7時半…かあ……」

そんな会話があったことを、オレは覚えておくべきだった…。

第21話 「上を見れば蜘蛛」 (後書き)

感想&評価待ってます。

第22話 「TDL」

く水月港く

「ふわく…ねむ…」

現在時刻は8時25分。

8時30分に水月港に集合ということだった。

これから2時間ほどかけて目的地のTDLへ向かうわけだ。

オレは島内散策でよかったんだけどなあ。

あゝ眠い眠い。

「よし！船に乗れー！」

その一声でみんなが船に乗り込んでいった。

く船く

船の中では早くも写真撮る者あり、酔う者ありな光景だ。

まずは船で1時間ほどかけて本州へ辿り着くわけだ。

「さく、着くまで何しようかな…」

「オレはボーっとしてるから2人で何かやっててくれ」

「つれないねえ…。仕方ない。私たちは船の中散歩してよっか」

「はい」

そして船の後バスに乗って1時間、ようやくとってもドラマチック
ランドに着いた。

くTDLく

「さてお兄ちゃん、どこ行こっか？」

バスを降りるやいなや2人そろってオレについてきた。

ちなみにメデスは一緒に遊ぶ女子を探してさっさと消えた。

「お前らは友達と行けよ。オレはテキトーにブラブラしてるから」

「そんなことしたらお兄ちゃん寂しいでしょ？」

せっかく一緒に遊んであげようってんだから素直になりなよ」

「…好きなようにしろ。ただオレは後ろについてくだけだからな」

「OKOK。じゃ行こっか」

「……で、これ最初に乗るのか？」

目の前では大きく水しぶきをあげて滑ってくる乗り物。

まあいわゆる急流すべりだ。

「そ。ビビったの？」

挑発するようににやける祢音。

「そんなことねえよ。さっさと行くぞ」

「へいへい。行くよ、奏ちゃん」

「濡れるのは好きじゃないんですけど…」

「大丈夫だって、雨具みたいなのが貸してもらえるだろうし」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「ビシヨ濡れ……………」

「いやぁ！楽しかったねえ！」

「お前なあ…」

急流すべりに乗る前にカップのようなものを借りれるだったが、
祢音の「全員いりません♪」の一言でカップ無しで乗った。

そして結果はビショ濡れ。

奏も強引に押し切られしぶしぶカップ無しで乗った。

「これ最初にやるべきじゃあなかっただろ」

「ちゃんと先の事を考えて下さい」

「今さら言っても遅い遅い。太陽出てるし、そのうち乾くよ。さあ
次次い」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

それから乗り回したのは全て絶叫系のアトラクション。

くるくる回ったり急上昇&急降下したり左右に振れたり…。

飯食ったし、もう乗りたくないな。

「あゝ死ぬ…」

「あれ？お兄ちゃん、もうギブアップ？まだまだあるのに」

「もうギブだ…。少し休ませろ」

それよりなんでお前らそんなに平気なんだ？

「うゝん。せっかくのフリーパスだから遊びつくしたいんだけどなあ…。あ…。あ…」

祢音がオレの後ろ方向を見て固まったから振り返るとそこには…。

「久遠…。もうちょっとファンシーなものにしませんか？」

「何言ってるのよ。遊園地と言えばジェットコースターに決まっているじゃない」

本来ならば学園で授業中で、ここにいるはずのない赤司邪姉妹だった。

「天照さん！？」

「と久遠さん！？」

その声が届いたのだろう、2人はこちらを見ると天照さんはバツの悪そうな顔をして、

久遠は眉をひそめてこちらへ来た。

そして傍まで近寄ると顔を寄せて

「そんなに叫んだら教師共に見つかるじゃないの！！」

と怒鳴った。

「いや、お前の方がうるさいだろ」

「どうしたんですか？今学園で授業中じゃあ…」

「学園で授業なんてつまらなさすぎるから天照と遊びに来たの。あなたたちもいるしね」

「私は止めたんですけど…」

天照さんはいつものオーラはなく、しょんぼりとしている。

「強引に連れてきたの。でもこの子絶叫系でんでダメで…。なんのための遊園地なんだか」

「私はもつとゆったりしたのがいいんです！」

そう言う天照さんを見、久遠はオレと称音、奏を見る。

「見た所、そっちも同じ状況のようね…。どう？そこの無月と私、交換しない？」

それを聞いたオレたちは一瞬^{あつけ}呆氣にとられていたが

「それいいですね！じゃあ早速行きましょう！」

「無月、健全な行動を心がけて下さい」

「2人は仲良くメリーゴーランドにでも乗ってなさい」

3人はそれぞれ言いたいことを言うと言つてパンフを見ながら去って行った。

「はあ…仕方ないな。どうします?」

人混みの中に消えて行くのを見送った後、オレは天照さんに訊いた。

「そうですね。では何か乗りましょうか」

「わかりました。何にします?」

「ちょっと歩きながら考えてみましょう。パンフも持ってますし」

「コーヒーカップですか…」

子供ん時に乗ったような気はするが記憶にないアトラクションだな。

「さ、行きましょ!」

フリーパスの証を見せ、青いラインのあるカップに乗った。

「全力で回して下さいね」

「いいんですか?動きの激しいものは苦手そうでしたが…」

「これぐらいなら大丈夫ですよ」

強がりかどうかはわからないが生徒会長は笑顔で答える。

「じゃあ遠慮なく」

「大丈夫ですか？」

「なんとか…」

コーヒークップを降りると天照さんはふらふらで足元が覚束おぼつかなかった。

「やっぱり動きの激しくないのですね」

「では、メリーゴーランドなんてどうでしょうか？」

……………。

「あれなら私大丈夫ですから」

「そ、そうですか…。それじゃあそれで」

「オレは止めときます。天照さんだけで乗ってください」

メリーゴーランドを目の前にした時、オレは言った。

「? どうしてですか?」

本当に疑問に思っているようで、首をかしげてこちらへ振り向く。

「この年になってこういうのはちょっと…」

「さっきコーヒークップに乗ってたじゃないですか。一緒ですよ。それとも…私と乗るのは嫌ですか?」

「いや……そういうわけではないのですが…」

「無月さくん!」

………恥ずい。かなり恥ずい。

目の前で白馬に跨またがって手を振る天照さんは楽しそうだがこっちはたまったもんじゃない。

こんな目立つことしてると…

「おい、如月がメリーゴーランド乗ってるぞ」

「それより、あれ…うちの生徒会長じゃね?」

こんなヤツが来るわけだな。

「楽しかったですねえ」

「少し離れましょう！」

オレはここから離れるために天照さんの手首を掴むと走り出した。

「え？ きゃっ！」

「はあはあ……どうしたん……ですか……急に……」

「いや、ちよつと走り出したくなりました」

「？ よくわかりませんが……。じゃあ丁度いいですね、これに乗りましょう」

天照さんが指さす、目の前のアトラクションは……。

「観覧車ですか」

この辺りでは一番の大きさを誇る観覧車。

集合時間的にもこれに乗って1周する頃には丁度いい時間になるはずだ。

「いいですよ」

そしてオレたちは観覧車に乗り込んだ。

「観覧車なんて久しぶりです。遊園地すら滅多に行かないのに久遠に振り回されてばかりでしたから」

「いつも振り回されてますよね」

「そうなんですよねえ。小さい頃から私がいないと危なっかしくて……」

4分の1あたりまで回った所で天照さんの携帯が鳴った。

「あ、すみません。ちょっと待ってもらえますか？」

メールのようで天照さんはケータイを開き、眺める。

するとポンと顔が赤くなり、パチンと力強くケータイを閉じると窓の外を向いた。

それっきり会話はなく、天照さんは窓の外を見ながらぶつぶつと何かを呟いている。

そして一番上に来た時、ようやくオレに聞こえるほどの声で呟いた。

「あ、あの……実は言いたいことがあります……」

「なんですか？」

「私のこと…どう思いますか？」

「どうって…いい先輩だと思いますけど？」

「突然で…申し訳ないのですが…私と付き合ってくださいませんか？」

「……………へ？」

あまりに突然のことでこれしか言えなかった。

「で、ですから…私と付き合ってくださいませんか？」

……………。

「一目惚れ…だったんです。こんなことないと思ってたんですが…私も驚きました」

「いいですよ」

オレは驚きに強張^{こわば}った顔を弛めて言った。

「いいんですか!？」

天照さんはビュツと身を乗り出して訊き返した。

「はい。オレも付き合えたらな、と思ってましたから。」

もしかして、さっきのメールは久遠からですか？」

「はい。背中を押されてしまいました。それで、お願いがあるんですけど…。

キス…してもいいですか？」

「はい。喜んで」

「わっ…じゃ、じゃあ、いきますよ」

天照さんは恐る恐る顔を近づけてきてそして――

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「……アレ？」

目の前に見えるのは天照さんの顔ではなくガラス越しの見覚えのある天井だ。

「つて……なんだ今のはあ！！！」

叫びながらバツと起き上がって祢音たちを見る。

祢音たちも起きたようで上半身を起き上がらせてきた。

そこからは阿鼻叫喚とでも言えそうな光景が…。

「久遠！なんでそこで止めるんですか！？あと少して——」

「だっておもしろくなかったんだもん。それに夢はいい所で終わるもんでしょ」

「奏ちゃーん。私たち出番少なかったねえ……。久遠様ー！なんとかならなかったの！？」

「脇役以下……」

それぞれの感想が聞こえてくる。

「オレはこんな性格じゃねえぞー！！」

そこにオレの感想も加える。

「うるさいわねえ……」。

まず祢音、あなたたちは予告無しに來たから即興で組み込むことができなかった！

そして無月、この^{ドラマチック}Dramatic^{リアル}Real^{イクセントリック}Eccentric^{アミューズメント}Amusement^{マシーン}Machine。

通称『^{ドリーム}DREAM』はその人物の人格を自由に換えられるのよ！

最後は付き合えてめでたしめでたし、ってことでいいじゃない！」

「「「よくなーーーーーい！！！！」」」

「バカばっか…」

第22話 「TDL」 (後書き)

感想&評価お待ちしております

第23話 「イミテーション」 (前書き)

これでストック0です…

第23話 「イミテーション」

「お兄ちゃーん！！大変大変大変態変態変態！」

「大変なのはわかったからまあ落ちつけ」

本部での休養中、柰音が突き破らんばかりにオレの部屋へのドアを開けた。

そしてそれについて奏も入ってくる。

「寝転んで本なんか読んでる場合じゃないんだよ！」

柰音は本を強引に取り上げ、自分の方へ注意を向けさせる。

「どうした？」

オレは鬱陶しく思いながら不機嫌に聞こえるような返事をする。

「いたんだよ！お母さんが！！」

「……！？」

オレの想いも伝わらず発せられたこの言葉にはさすがに驚いた。

柰音がこうなるのも無理はない。

「はぁ！？んなことありえねえよ。夢でも見てたんじゃねえのか？」

「それが夢じゃないんだよ！ほとんど一瞬だけど間違いなくお母さんだったって！」

「奏も見たのか？」

オレの肩を前後に激しく揺らす柁音を静止させ、その様子をいつも通り見ている奏に訊く。

「いえ…」

奏は見えていないようだが柁音がこんな嘘を吐くとは思えない。

こんなのは笑えない冗談だ。

となると…母さんの姿を見たのは間違いなさそうだ。

本人かどうかはわからないが。

「どこでだ？」

「2階の資料室の前！」

「行ってみるか」

「うん！」

と言うやいなや、柁音はオレの手首を掴み、走り出した。

よっぽど興奮しているようだ。

あまり期待しないほうがいいんだけどな…。

「ここか…」

資料室の前は丁度T字路になっている。

角を曲がる際に見たという感じか。

だが姿は見えそうも――

「お兄ちゃん！」

急に肩を後ろへ引っ張られ、前を見ると目の前に間違いなく母さん、如月桔梗がいた。

見た目は全く寸分の違いもなく本人だった。

だがオレにはそれは母さんではないということがわかっている。

「ウソ……」

「誰だ、お前は？」

オレは敵意を込めた視線を送る。

しばらく何も言わず、表情すら変えなかったがそいつはようやく話し始めた。

「よくわかったな。アタシが如月桔梗本人じゃないって」

そいつが母さんの姿のまま話し始めるとオレは剣を取り出し、突き付ける。

「さっさと正体を現わせ！その姿でいられると目障りだ」
めざわ

祢音はというと何が何だかわかっていないようで、ポカンと様子を見ている。

するとそいつはほんの一瞬姿が真っ黒になり、次の瞬間には見たことのない細身の女性になった。

「いや悪い。そこまで怒るとは思ってなかったから…」

その女性は観念したように両手を少し上げる。

「お前は誰だ？」

オレは剣を下ろさず訊く。

「アレ……？はじめましてだっけ？そうかそうか…そいつは失礼」

オレの問いが意外だったようで少しの間眼を丸くし、その後懷ふところからタバコを取り出し吸い始める。

「はじめまして、アタシは来栖真夜。くむす まや真夜しんやのもう一つの人格だ」

そいつの正体がわかり、オレは剣をしまう。

「ねえ。今お母さんの姿だったけどそれどうやったの？」

ようやく柵音も会話に入ってきた。

「ああ、これアタシの魔法の能力。ちから

写真でも何でも一目でも見たならそいつに变身できる。

隠密にはうってつけなんだ。なんせそのままコピーできるわけだからな。

そういやどうしてわかった？少し聞かせてほしいね」

「母さんはもう死んでる。死んだ人に似せたモノは創れても本人生き返らせることはできない。

それは骸むく使いによって操られているか、別の誰かとか…。

とにかくどの世界でも絶対に死者を蘇らせることはできないということを知っている」

これはオレがなんとかして2人を生き還させられないか様々な異世界の本を読んで知ったことだ。

「へえ…。物知りだな。専門外だろ？」

「まあ…ちよつとな…」

「そっかそっか。んじゃまたな」

マヤは一方的に話を終わらせ、一方的に去って行った。

「何しようとしてたんだろ？」

「よくわからない人です」

同感だ。

「あ、ちよつとごめんね。チェーレンジ！」

「何が？」と訊く前に祢音から黒い翼が生えた。

「「!？」」

オレと奏は反射的に構える。

「ストップストロープ!!」

悪魔は先ほどのマヤのように両手を上げる降参ポーズをした。

「悪魔、今度は何する気だ？」

「大丈夫、わたしはもうそんな事しないって約束したのよ。

それにわたしは悪魔なんて名前じゃないのよ」

今度の悪魔は殺気が感じられない。

「いやあーっ！久しぶりの外だーっ！」

ぐっと伸びをする悪魔のフィンキはどことなく普段の祢音に似ている。

なので少しだけ警戒を解いてみる。

「わたしの名前は『ルナ』。そして天使のわたしの方は『サラ』。

こないだわたしたちの会議で決まったの。よろしく」

「ルナか……。何もしないって言葉、本当に信じていいんだろうな？」

「大丈夫よ。見てなかったの？主人格の祢音が自分から軀を渡したの。

それは信用に値すると思わない？」

「…それも一理あるな。

「本当に大丈夫なんだな？」

「うっさいわね。大丈夫って言ってるじゃない。何回言わせるつもり？」

苛立っているルナ。

まあ……………いいか。

「わかった。だが、奏を連れていけ。見張りだ」

「何で自分でしないんですか？」

奏は眉をひそめてオレを見る。

「めんどくせえ」

そしてオレは即答する。

「……バカ。」

仕方ありません。危険なことをしなければ空気でするのでどうぞ
お好きなように……」

「そ。じゃあ行くわよ」

そして2人はマヤが去って行った方向へと走り出した。

「さて、寝るか」

＼ルナSIDE＼

「どこ行ったのかしらねえ？」

すれ違う人が私を見て驚いた反応をするけどほうっておく。

「あ、いたいた」

タバコを燻くゆらせて気だるそうに歩く後ろ姿が見える。

「ちょっとちょっと!」

私が名を呼ばなくてもマヤには自分が呼ばれているとわかってくれたようで、すつと振り返った。

「お、さっきの…いや、それは…」

「大丈夫よ。危害は加えないわ。ところでさ、その変身の能力おもしろそうじゃない。

一ついたずら考えたんだけど参加してみない?」

「いたずらねえ……よし、丁度暇だしやってみるか。

で、どんないたずらするか考えはあるのか?」

興味を持ってくれるみたい。よし…。

「うん。ちょっと無月の野郎を困らせてやろうと思ってね。

奏、今回は邪魔するんじゃないわよ。姉からの命令よ」

「あなたは私の姉ではないです。

ですが別に姉からの命令でなくても危険なことをしなければ…」

「別にいいじゃない。同じ軀なんだし。

まあいいわ。無月にしか危害はないから安心して。じゃ作戦を話す

わよ…」

「それはそれは…。あいつの反応が楽しみだな。…ふふふっ…」

マヤはその時のことを想像しているのか、早くも笑っている。

ま、それはわたしも同じなんだけどね。

「奏、これなら問題ないわよね？」

「はい」

「奏ちゃんもやってみない？」

「私は遠慮します」

予想通りの答えね。

やってる奏おもしろそうなんだけど。

「つれないわねえ。じゃああいつに変身ということで」

そしてわたしたちは無月の部屋へ向かったの。

く無月の部屋く

「いたいた。寝てるわね」

そつと中を覗いてみると無月はベッドに寝転がって背中を向けていたわ。

「チャンスだな」

と言ってるマヤは同じ調律師のメデスの姿になってる。

「じゃ、頼むわよ」

「任せておけ」

そう言っマヤは静かに無月へと近づいた。

そしてメデス（＝マヤ）は無月に跨り、押し倒す体勢になった。

「おい、無月」

「…ん？……お前何してんだ？」

呼びかけるとすぐに無月は眼を覚ました。

しかもメデスに押し倒されてる体勢になってるのに結構冷静。

「そうだな、お前の体が欲しくなったとも言えはわかりやすいか？」

うわっ、案外直球ね。

「お前そんな気があったのか。知らなかったな」

「そりゃあ隠してきたからな。」

そしてこれからお前の純潔はオレが頂く。お前はただオレに身を任せていればいいんだよ」

「フザけたこと言ってんじゃ…ねえっ!!」

我慢が限界に達したみたいで、

無月はメデスの鳩尾^{みぞおち}目掛けて殴りかかってきたけど、後ろに身を引いて簡単に避けてしまう。

「そんなに恥ずかしいか…。大丈夫、みんな初めはこ・う・さ☆」

キラリと星の出るようなウインクを無月へ投げかける。

ブチッ

あ、何か切れた。

「お前なあ…。この際だから今までの分いくらか怨みを晴らせてもらどうぞ…」

無月の手にはいつの間にかレーヴァテインが握られてる。

ちょっとヤバくない？

「じゃ、じゃなっ無月!」

メデスに扮したマヤもさすがに危険を感じたようでさっさと逃げていく。

「おいコラ! 待ちやがれー!!」

「待っちゃってのー」

わたしと奏は部屋から出ていく無月に見つからないように物陰に隠れた。

「奏、あなたの魔法でわたしたちの姿って隠せるわよね?」

「できます」

「じゃ早くそれして。追いかけるわよ」

「……………」

奏は無言で魔法をわたしにかけてくれた。

「さ、行くわよ」

く本部・廊下く

「どこ行きやがった…?」

無月はどうやら見失ったようですぐに見つけられた。

「へへっ、ちょっといたずらしちゃえ」

わたしは背中を向けている無月にゆっくりと近づき、そして足払い。

「おわっ！」

無月は変な声を上げて、ドスン尻もちをつく。

良い気味ね。

「……………」

すると無月は振り返ってわたしの顔をじっと見る。

まさか…バレてないわよね？

「お前か…ルナ」

律儀に名前を呼んでくれたのはいいんだけど、この後はヤバいかも…。

危険を察知したわたしはすぐに奏の所へ戻る。

「ちょっと、見えないんじゃないの!？」

「…見えませんよ。ですが存在自体は消えてません」

「えーっ!？」

ポン

っとか言ってる間に誰かに肩を叩かれた。

恐る恐る振り返ってみるとそこには怒りを押し殺した顔でわたしの両肩を掴む無月。

しかも魔法も解かれてる。

「あ、あはは」

「『あはは』じゃねえ。今回ののはお前の仕業か！」

「ギクウツ！ そんなことないわよ。ねえ…奏？」

「……………」

頼みの綱の奏は無言で首を振る肯定の動作。

こんな時だけ言うこと聞かないんだから。

「お前自分で『ギクウツ！』て言ってるだろ。」

……………そうか、来栖さんの変身能力か。

さっき本物のメデス本気で殴^{シマ}つちまったじゃねえか。まあ全然気にしてねえけど」

うわぁ結構本気で怒ってるみたい。悪魔の尊厳台無しね。

「いやあそんなに見つめられるとさすがのわたしも照れる…」

「嘘をつけ」

せつかく視線をそらしたのにまた正面を向けさせられる。

「いやあすまないなあ。無月」

後ろから全然悪気のなさそうな声と共にマヤが現れる。

姿はもういつもの女の姿に変わっている。

「マヤさんの方ですか、さすがにちょっと怒りますよ？」

「いやあ、暇な時にこいつが持ちかけてきてな。ついつい調子の乗ってしまったわけだ」

「やっぱりお前の仕業か」

これは逃げるが勝ちね。

「あゝと、えゝと、んじゃあね。ババーイ」

く無月SIDEく

その一言の後一瞬で悪魔は祢音に人格を変えてしまったようだ。

黒い翼も無くなっている。

逃げやがったな。

祢音を睨みつけるわけにもいけないからオレは手を放す。

「あ、ごめんね。こんなことになるとは思わなくてさ」

「ま、いいさ。お前が望んだことでないなら…」

「…案外そうでもないかもよ」

「は？」

今悪寒のしそうなと言わなかったか？

「ん？なんでもないよ♪」

誤魔化すかのように笑顔全開の祢音。

はっきりと聞こえたんだが、誤魔化すならここは乗ってやるか。

「そういやさつきモノホンのジュライアスが気絶してるのを見たんだが大丈夫か？」

「大丈夫なんじゃない？頑丈だし」

そうして騒がしい今日も過ぎていくのであった。

第23話 「イミテーション」 (後書き)

感想&評価お願いします。

第24話 「心の牢獄」 (前書き)

後書きにちよつとしたお知らせがあるので読んでください。

第24話 「心の牢獄」

「お兄ちゃーん!!」

マヤとの不思議な出会いの後、ある日またもや柰音が叫び声を上げながらオレの部屋に入ってきた。

だが、前回とは様子は違っていた。

「かつ、奏…ちゃんが…」

柰音は涙目で奏はいない。

「奏がどうした?」

いつも柰音に付き添って、今も傍にいるはずの奏の姿はない。

「ドリームで…遊んでたら…奏ちゃんが…奏ちゃんが…」

「落ちつけ。何があった」

さすがにオレも寝ころびながら聞いているわけにもいかず、座って話を聞く。

そして1分ぐらいじっとしてから、柰音は話を始めた。

「終わっても…奏ちゃんが帰ってこないの…」

「帰ってこない?」

「とにかく来て…」

オレと泣いている祢音に疑いや怪しい眼を向ける者の視線を感じつつ、オレはドリームのある部屋へ来た。

「無月…」

部屋では天照様と久遠が慌ただしく動いていて、一つのカプセルに奏が眠っていた。

「どうしたんですか？」

「あ、あの…」

「説明はわたしがするわ。天照は居場所を…」

「はい」

「悪かったわ。これは紛れもなくわたしのミスよ。

奏が『心の牢獄』に閉じ込められた、いえ閉じ籠こもったという方が正確かしら」

「心の牢獄ですか？」

「そう。わたしが開発したこのドリームは人の欲望を叶えるための

もののなの。

どんな不可能なことだってできるから。奏はその特性に魅せられた。ちから
何でも叶えられる夢の中に閉じ籠ってしまったのよ。

可能性はあったけど確率はかなり低いから起こるとは思ってなかったんだけど」

は、そんなバカな…。

「奏はそんな後ろ向きなヤツじゃねえだろ」

「怖いものよ。何でも叶うのだからね。それにそう思わせてるだけで深層意識ではそうではないかもしれない。

躰という鎖から放たれたから余計に影響あるのかもね」

「どうやって助け出すんだ？」

「夢の中から連れ出すしかないわ。ドリームの中の奏を見つけてね。
居場所は今天照が捜してるわ。だから無月、よろしくね。祢音は残
って」

「え！？私も助けに行くよ！」

今まで泣いてばかりいた祢音が急に声を上げる。

「気持ちわかるけど、もし奏を助ける前に心の牢獄に閉じ込めら

れたらどうするの？

ちゃんと様子見ておいて。

もし閉じ込められたら天照1人じゃ頼りないし、祢音も一緒に助けに来て欲しいの。

これは無月よりあなたを信頼してるから頼んでるのよ」

おい。

「でもお兄ちゃん1人じゃ…」

「大丈夫、わたしも行くわ」

……………？

「お前と行くのか!？」

「こうなったのもわたしがこの装置を甘く見ていたからよ。責任はわたしにある」

「お前…案外しっかりしてるんだな…」

「案外ってなによ」

「久遠!見つけました!」

「よくやったわ。じゃ無月、行くわよ!」

「わかったよ」

（DREAM）

「ここが奏の心の牢獄よ」

「ここは…」

目の前には見覚えのある建物が…。

「見覚えあるの？」

「裏切った時、親父が潜んでいたアジトだ」

久しぶりだな、この光景を見るのも。

「なるほど。原因は案外簡単みたいね」

「ああ、そうかもな。」

…：「そーい、やオレはいつも通り戦えるのか？」

「大丈夫よ。現実世界のものをそのまま設定したから」

「ドリームは設定が変えられるんだろ？ だったら最強の設定にしとけばよかったじゃねえか」

「止めておいた方がいいわ。色々と危険だから」

色々ねえ…。

それはやっぱり今回の奏のようなことが起きる可能性があるからなんだろうか。

「じゃあお前戦えるのか？」

「身体能力は元々結構なものよ。あなたたちのような戦闘要員ほどじゃないけどね」

「そうか。じゃさっさと助けるぞ」

「ん？」

中に入って違和感を感じた。

「どうしたの？さっさと助けるんでしょ」

「いや、なんか…こんな場所だったかなあって」

壁や扉は同じなんだが入っていきなりT字路になってた気がしない。

「そりゃあ奏の記憶から創ってるんだから曖昧にはなるんじゃない？」

「そうか。そーいや奏がどこにいるか見当はついてるのか？」

「ないわよ。でもだいたいこんなのって一番奥に決まってるじゃない」

適當すぎる…。

「！ 敵だな」

奏の操る妖狐を縮小したような妖狐が何匹も現れる。

「こいつらはどれだけ倒しても無駄よ」

「どういうことだ？」

「これは奏が望んで生みだした産物。あの娘が望めば望むだけ出てくるの。この意味わかるわよね？」

「なるほどね」

つまり、無限に出てくるってことか。

「倒しながら進むのがベストよ」

「了解っ」

オレは久遠に言う通りオレは妖狐を倒しながら前へ進む。

だが新たに妖狐が出てくる気配はなかった。

妖狐自身も手ごたえがない。

「おい久遠。出てこねえじゃねえか」

「おかしいわ……。となると奏が望んでない？なら少しは希望あるかも」

と言った瞬間、その言葉を否定するかのように壁が現れ、茨に包まれる。

「どこに希望があるんだ……？」

「さあね。ちゃっちゃと破壊して。」

この先に進むのを妨げるのならそこにいるって証拠でしょ」

はいはい。

オレは剣を壁に向け、炎を放つ。

まず茨を燃やし尽くし、壁を斬る。

少し手応えがあったが案外簡単に斬ることができた。

楽に進めるな。

これなら案外早く連れ帰れるか。

と思ったのも束の間、再び壁が現れる。

「ほら、頑張りなさいよ」

久遠は最初っから手伝う気はないようだ。

何のために来た？

「くそーっ!!」

何枚斬っただろうか…。

十枚は軽く斬ったような気が…。

だが、だがようやく奏の所に来たはずだ。

目の前には扉がある。

「ようやく着いたわね。まさしくボス前の扉じゃない。

わざわざ自分がいるとアピールするなんて、まだまだ子供ね」

ふふん、と誇らしげに扉を見る久遠。

ちなみに今まで何もしていない。

「ここまで来たわけだがどうやって連れ戻すんだ？」

「現実世界に戻るよう説得すればいいのよ。綺麗事並べてりゃあOKじゃない？」

「いい加減にも程があるだろ」

「多分その役目はわたしじゃないからあなたの好きなようにすれば？」

真面目にアドバイスするとすれば、わたしの見解では奏の心は見かけより繊細で結構脆いわ。

強引なことはしないことね。

あとはここに在るのは心だけだから想いは素直、真っ直ぐよ。さ、入るわよ」

「ようやく会えたなあ。奏」

現実世界で来た時、親父が座っていた椅子。

それに寄り添うように奏はいた。

「お前こんな所で何やってんだ。さっさと帰るぞ」

「いや…」

「なんでだよ。そんな所に1人じゃつまらねえだろ」

「そんなことないです」

「はあ!?!」

「私が来て欲しいと思ったらすぐに来てくれます。」

お父様も、桔梗様も、お姉様も、優しい無月だっています！」

わざわざ「優しい」をつけるか。

「無月、あなた奏に優しくしてないの？」

「いや…優しくしてないことはないと思うんだけどな…」

「なるほど、奏は優しい無月を望んでいるのね。」

どう？抱き着いてキスでもしてあげれば？」

「バカかお前は！そんなことできるわけねえだろ。」

奏、それは本当の祢音でも親父でも母さんでもない。

そんな嘘の世界にいて幸せか？」

「幸せです。」

人はいつかは死にます。

私は家族を失いたくありません。

でもここなら永遠に私の望む家族と共にいることができます」

「そう言っ、お前実は迎えに来て欲しかったんじゃないのか？」

ここに来るまで好きなものを生みだせるにすれば障害が少なかった。

やろうと思えば絶対にここに来させないようにすることはできた
らう？」

「そ、そんなことは…」

揺らいでいる。

これならなんとかいけるか？

「それに現実世界にいる祢音たちはどうなんだ？

お前は祢音を望めばいいかもしれないが、祢音は奏を望んだって出
てこないんだぞ？」

「ですが……………」

「もう少しよ」

傍で久遠が囁く。

「祢音が今回の事伝えに来た時涙目だったんだぞ。

このままお前が帰ってこなかったらどうなるか…悲しむだろうなあ」

「お姉様…。…………無月もですか…？」

「あ、ああ…。オレも悲しむだろうな」

「……………わかりました」

と言うと奏はすたすたとこちらへ向かい、オレの目の前まで来るとぎゅっと抱き着いてきた。

「な!?!??」

「あらあら。あらゆる柵しがらみから解放たれて大胆になってるようね。

とはいえこれがホントの奏の想い。無月の事好きなんじゃない?」

「そんなこと言われてもなあ…」

「た、ただ2つほど約束して下さい。

私たちを護ってください。

絶対に…誰にも傷つけられないように…」

「それは無理だな」

「え?」

奏はすつと顔を上げる。

「絶対に、ということはないからな。だが護るために全力を尽くす。命だって懸けてやるよ」

「命は懸けないでください。

それともう一つ。優しい無月でいてください」

「オレ優しくなかったか？」

「はい。いじわるとは言い切れませんが優しいとも言えませんでしたから」

そうか、優しくして欲しかったのか…。

「わかったよ」

とりあえず優しさを示すためにポンと頭に手を置いてやる。

「では、帰ります」

「一件落着ね。天照にサルベージしてもらおうよ？」

「頼む」

く現実世界く

「ズル―イ！！私もお兄ちゃんに抱き締めて欲しいなあ！」

ほっとしたのも束の間、帰ってきた直後全てを見ていた祢音に迫られる。

「ま、まあそんな怒るなって」

「いいなあ…」

そこでその様子を見ていた奏が一言。

「お姉様、兄さんは渡しませんよ？」

そう言って奏はわずかだが口元を緩ませた。

「笑ったか…？」

「それに今、『兄さん』って…」

「兄さんと呼び捨てにしていたのは私の中での兄さんの評価が低かったせいです。」

少しは上がったわけですね。大いに喜んでください」

この一件がこんなに影響を与えたということか？

笑って、オレを兄として認めて…。

「奏ちゃん笑うとかわいいじゃん♪」

ときおり
時折見せる笑顔！これで世の中の男たちは奏ちゃんにメロメロだよ
！」

く如月家く

さて、あれから3日後。

奏があれ以来変わったことと言えば、オレを『兄さん』と呼ぶようになったことぐらいで、

笑うこともなくなったが少しだが考えがわかるようになった。

……ような気がする。

「兄さん、暑いんでアイス持ってきてください」

「は！？なんでオレが」

「優しくしてくれるんですよね？早くしてください」

「調子に乗るなー！！」

第24話 「心の牢獄」 (後書き)

これでアイデアも0です。

もし読者の方々の中にやって欲しいシチュがあるという方は作者紹介ページからメッセージを送ってくれるとありがたいです。
採用できるかどうかはわかりませんが。

感想&評価お待ちしております。

第25話 「恋人の1日」 (前書き)

いつもありがとうございます。

長らくお待たせしました。

リクエスト第1弾の第25話公開です。

第25話 「恋人の1日」

いつもの日常、柊音と奏とで食堂で昼飯を食っていると、思いがけない訪問者がやって来た。

「やほー」

普段聞くことのない声に振り返ると魅夜がいた。

「魅夜!？」

「久しぶり」

「どうしてここに？」

「うん。ちょっと用があってね。」

「…ところで、この後暇!？だったら外へ遊びに行かない？」

「いや、止めとくわ」

「なんでよ!」

「今夜は任務だからな。今のうちに寝とく」

「でも深夜まではないだろうから余分に寝る必要はないんだよね」

柊音め、余計なことを…。

「じゃあいいじゃない」

「…………まあ遊ぶのはよしとしよう。だが本部内でだ」

「本部内にショッピングとかできる場所は？」

「ないね」

オレの代わりに祢音が答える。

「つまらないなあ。まあ、一緒にいるだけでもいいんだけどね」

そしてオレにウインクする魅夜。

どんなサインだ？

「ちよおつと待ったあ！！」

今度は誰かと思えば魅夜の肩を叩く久遠だった。

「久遠！久しぶりい」

「ふっふっふ、月詠、そんなあなたにピッタリの発明があるのよ」

久遠は振り向いた魅夜にグッと親指を立てた。

＼DREAMの部屋＼

「……というわけ。理解した？」

「OK OK、バッチリだよ。それでシナリオはどんな感じなの？」

魅夜がそう訊くと久遠は耳元に口を寄せて

「わたしが用意したわ。」

最近ただの恋愛じゃマンネリしてきたから今回ののはどろり濃厚よ。

やるとこまでやっちゃう感じね」

と囁いた。

囁いた…が、丸聞こえだった。

「ダメーッ！！」

そんなのは私が許しません！！」

そこで腕で×を作り、禁止を主張したのは祢音。

その様子を見ると久遠は妖しくニヤケる。

「そーおう？そう言って実は…」

と、そこで言葉を止めた。

だが柁音の顔はみるみる内に赤くなっていく。

「だっ…なっ…そ、そんなことっ！」

多分念話で話しているんだろうが、オレには聞こえない。

「何話してたんだ？」

「何もないってばあっ!!」

何怒ってんだ？

「じゃあ抑え目の普通の恋人生活でも楽しんでもらおうかしらね。

…月詠、名前は魅夜で設定する？」

「うん。そうしてくれる？」

「み・よ…と。さて、始めようかしらね。

みんなカプセルの中に入って」

「あ、わたしと奏ちゃんはいいいよ。お兄ちゃんと魅夜さん2人で楽しんでおいで」

「…2人ね。じゃさっさと入った入った」

そしてオレと魅夜はドリームを始めた。

＼DREAM・如月家＼

朝、オレが下に降りてくると意外そうな顔で見る柰音。

「……………あ、そうかそうか。今日は魅夜さんとデートだったわけ？」

そう言いながら柰音は朝食をテーブルに並べていく。

「ああ、久しぶりだからってなにも朝からでなくていいのにな」

「そんな言葉が言えて羨ましいねえ」

そして柰音は席に着く。

「だったらお前も彼氏作ればいいだろ？」

「そうは言っても自分から積極的になれるほどの人がいなくてね。」

奏ちゃんはどうかなの？」

柰音は隣に座って黙々とマーガリンを塗る奏に訊く。

「私は恋愛には興味ないので」

「恋愛した方が人生楽しいよ」

「お前が言えたもんでもねえだろ」

「…うっわ。もうダメだ。」

やっぱり相手のいる人の言うことは違うよ」

柰音が盛大に引く。

「いってらっしゃーい！夜は帰ってこなくていいよー！」
どういうことだ。

集合場所である、水月公園噴水前に着くとすでに魅夜が来ていた。

「悪かったな、待たせて」

「いいよ。待っていたくて30分前から来てるんだし」

30分！？

「そりゃあ…ますます悪かったよ」

「だからいいってば。ほら、行こ。時間が無くなっちゃう」

そう言って魅夜はオレの腕を抱きしめる。

「まだまだ時間あるだろ」

そうしてオレと魅夜は公園を出て商店街へ向かった。

〈商店街〉

今日は日曜日なだけあってオレたちのようなカップルも珍しくはない。

だが、オレたちのような腕を抱きしめられているカップルは1、2組しかいなかった。

「恥ずかしいんだけど…」

「いいじゃない。こうやって2人きりなのも久しぶりなんだし。

それに、いやな気はしないでしょ?」

そう言って魅夜は胸を強調するように押しつけてくる。

「はぁ…勝手にしてくれ」

「じゃ勝手にするね」

魅夜は嬉しそうに笑って抱きつく。

「で、どこ行くんだっけ？」

「忘れたの！？『水月シアター』、しっかりしてよね」

く水月シアターく

着いたのは島内の唯一の映画館。

規模もそれほど大きくないので有名な作品しか上映されない。

その中でオレたちが見ることになってるのは『ジャンパー』

身体能力大幅にアップするジャンパーを手に入れた主人公が

その能力のために戦いに巻き込まれていくというアクション映画だ。

オレは魅夜とならラブストーリーでもよかったのだが、

魅夜はCM見ておもしろそうだったからという理由でこれにしたそう
うだ。

まあオレとしてもこれなら強^{こわ}張^ばることもないので楽でいい。

「あーおもしろかった！」

「そうだな」

魅夜は劇場を出るとグイッと伸びをする。

「そういやそろそろお昼の時間じゃない？」

そういわれてケータイを見ると12時12分になっていた。

確かに昼飯を食べるには丁度いい時間だ。

「そうだな。…どこで食う？」

「じゃあちよつと喫茶水月に寄ってもいい？」

喫茶店…？

「まあいいけど…」

く喫茶水月く

喫茶水月の前まで来ると魅夜はオレを店の前で待たせて

「ありがと。またおやつ時に来るからね」

そんな声の中からわずかに聞こえてすぐ、少し大きな籠を持った魅夜が出てきた。

「？　それは何だ？」

「お昼ごはんだよ。水月公園で食べよ」

「ああ…」

（水月公園）

「どこで食べようか…」

と、きよろきよろと辺りを見回していると

「あそこがいいんじゃない？」

と魅夜は道から少し外れた原っぱを指差した。

「そうだな」

「じゃーん！」

魅夜は籠の中の料理を次々と取り出し、ビニールシートの上に乘せていく。

「おお！」

思わず言うほど広げられた料理は見事なものだった。

サンドイッチとかから揚げとかフルーツetc etc...

「すごいな…」

「でしょ！？朝早く起きて頑張ったんだから！

せっかく作ったのに持ちながらブラブラするのもいけないから、

作ってから喫茶水月の店長に保存してもらってたの。

さ、食べて食べて」

「いただきます」

ちゃんと手を合わせて感謝しつつまずはから揚げから箸を伸ばした。

「ごちそうさまでした」

「おそまつさまでした」

オレが全体の3分2ほどを食い、少し時間をかけてようやく食べ終わった。

「総合的な感想は？」

「うまかった。正直ここまでとは思わなかったな」

「えへへ、見直したでしょ？」

「ああ」

そんな感じでせっせと後片付けをする。

「ふう」

「疲れた？朝早すぎたんじゃないのか？」

「いや、大丈夫大丈夫。」

あ、なら膝枕して欲しいなあ、なんて」

「いいぞ。ほら」

オレはあぐらをかいて言った。

「あ、いや…今のは冗談で、そういうのは普通私がやるもんじゃー
ー」

「気にすんなって疲れてんだろ？ほら」

手加減しつつ寝かすように寄せると素直に倒れてきた。

「あ、ありがと…」

「どうだ？」

「気持ちいいよ…。このまま寝ちゃいそ…」

ゆっくりと目を閉じながら小さく呟いた。

「寝てもいいぞ」

「ん。じゃあもし寝ちゃったら30分後ぐらいに起こして」

「わかった」

「魅夜、30分経ったぞ」

起こすのも躊躇われる表情で眠る魅夜の肩を揺らしながら声をかける。

「……………ん…。あ、おはよ…」

案外すぐに起きてくれた。

「おう。おはよう」

「ん…ありがと。じゃあ行こうか」

「コーヒーなんかでいいの？甘い嫌い？」

「いや、別にそういうわけじゃねえけど。」

家の事もあるし、金はじゃんじゃん使えねえから」

すると魅夜の眉が狭せばまる。

「私とのデートはケーキ1個ぐらいのお金を使うこともできないの？」

「……………それもそうだな。」

でも色々あるから魅夜のオススメ頼んでくれるか」

「ん、わかった。すいませーん！追加いいですかー？」

オレが答えるとすぐに店員を呼びつけた。

「ん！んまい…」

「でしょ？」

魅夜が頼んでくれたのはただのチーズケーキ。

だがケーキなんて祢音がオレや祢音や奏の誕生日に作る時ぐらいしか食ってなかったからか、かなり美味く感じた。

「また来た時他のも食べてみてよ」

「ああ、そうするよ」

〽商店街〽

「さて、まだまだ時間あるな。まだ行く所あるのか？」

「そうだねえ……そだ！カラオケ行かない？」

カラオケ、かあ…。

そういや最近行ってなかったな。

「じゃ行くか」

〽カラオケ〽

「さあ！歌うぞー！！」

魅夜は早くも歌う気満々だ。

しかもなぜか魅夜が最初に歌うことになっている。

まあ別にいいんだけど。

カラオケでの1時間半、

魅夜はゆったりとした歌からアップテンポな歌まで様々な歌を歌った。

ちなみにオレはバラード系は無し。

アップテンポな歌を歌った。

〈商店街〉

あ、メール。

受信した時間を見てみるとどうやらカラオケ中に来たようだ。

送り手は祢音。

『今日は奏ちゃんと千春の家に泊まってくるからあとよろしく♪』

「……は？」

「どうしたの？」

魅夜はケータイをじっと見つめて固まっているオレへ近づき、ケー

タイを覗く。

「へえ」

「さて、どうしたものか」

「料理はできるの？」

「夕食といえるほどのものはできん。

焼き飯とかその程度のレベルだな」

そこでふふふ、と聞こえそうな顔をする魅夜。

「じゃあ作りに行ってあげよつか？」

んゝどうするかなあ。

「都合はいいのか？」

「うん。大丈夫だよ」

大きく頷く。

「じゃあ頼む」

「よし、だったら買い物しなくちゃね。

丁度食べてほしいのがあるんだ。

その前にちよいと無月の家に行っていない？

冷蔵庫に何があるか確認しなくちゃね」

てなわけでオレの家に一旦行った後、デパートへ買い物となった。

く水月デパートく

「えーと、あれとあれと…」

デパートに着くと魅夜は斜め上を向きつつ、指折りで買う物を数えている。

オレは魅夜が何を作るか知らないから後ろからついて行くだけだ。

「これと……これと…」

あれこれ籠の中へ入れていくが、

金は結構持つてきてるようでオレの分も合わせれば問題ないらしい。

「無月、糸こんにやくとカレー粉取ってきて。あまり奇抜なものではないけどもいいから」

「わかった」

糸こんにやくとカレー粉？

オレは糸こんにゃくは適当に、カレー粉はいつも祢音が買ってるのと同じ物を選んだ。

「ありがと。これでOKだよ」

〃如月家〃

「それじゃあ台所お借りしまーす」

家に入ると早速魅夜は台所へ向かい、そばに掛けてある祢音のエプロンを着る。

何度かオレの家に来てる魅夜はすでに台所の場所、置いてある道具も把握済みだ。

「何作るんだ？」

少ししてから台所に行くと

「ダメだよ入ってきちゃ！秘密なんだから。」

自分の部屋にでもいいって。できたら呼ぶから」

「…わかった」

渋々（？）、オレは自分の部屋がある2階へ階段を上がった。

「できたよー！」

どれぐらい経ったか、ドア越しから魅夜の声がした。

大きさからすると下から呼んでるようだ。

なんとなく読んでいた雑誌を机の上に置き、ダイニングへ向かった。

「ほーお」

オレが降りてきた時にはすでにテーブルに料理が広げられていた。

カレーと肉じゃがとレタスやらトマトやらが乗ったサラダ。

「ささ、食べよ」

オレと魅夜は向かい側に座る。

「いただきます」

てなわけでカレーを一口。

「うまい」

「そりゃあれトルトですからね。肉じゃがはどう？」

オレは急かされるままにじゃがいもを口へ運ぶ。

「これもうまい」

料理には詳しくないから

どううまいかとか称音の作ったのと何が違うかとかは言えないが、うまい。

「よかった。じゃ私も食べよ」

「ごちそうさまでした」

「ん。じゃあ片付けようか」

カチャカチャと食器を重ねてシンクへと入れる。

「後片付けはオレがする」

「ダメ。後片付けまでが料理なんだから」

なんじゃそりゃ。帰るまでが遠足理論か？

「まあ…そういうなら…」

「おつかれさま。んでありがとう」

後片付けも終わり、これまでの労をねぎらう。

「送って行くよ。もう遅いしな」

時刻はもう19時すぎ。

「大丈夫よ」

「いや大丈夫じゃないだろ」

「大丈夫だって。泊まってくもん」

「……………は？」

「だからあ泊まってくって」

いやいやいや、おいおいおい。

「お前、ダメだろそれは」

「いいじゃない。ちゃんと家には連絡してあるし」

「…………いやそれは…」

「問題ないない。私たち恋人同士なんだし」

いや、それは理由になるのか？

「ホントいいのか？」

「ホントにいいけど？」

「なら……いいけど」

いいのか？

……まあいいか。

てなわけで2人でソファにもたれてTVを見ている。

柊音と奏は今日は帰ってこない。

それに明日は休みだしな。

「あーおもしろかった。

…さてと、お風呂入ってこようかな」

風呂はさっきオレが入れておいたし、女が先に入るってのが普通だろう。

普段もいつの間にか柊音と奏が先に入って最後にオレが入るというパターンができあがっている。

「いつてらっしゃい」

なのでオレはその体勢のまま声をかける。

「あ、風呂上がりの服、祢音の勝手に使っているぞ。」

祢音にはオレが言っておくし」

「ん。そんな時にはありがとうって伝えておいて」

「わかった」

その後とんとんと階段を上がる音がした。

「おさきー。次いいよー」

オレ的に大分経ってからようやく魅夜が上がってきた。

いや、祢音たちも結構な時間入ってるよな。

まだTVを見たままのオレの隣に座る。

そしてコテンと顔をオレの方へ傾け、肩に乗せる。

ドライヤーを使わなかったようで髪がまだしっとりと濡れている。

シャンプーの香りも漂ってくる。

魅夜の口元はニヤリと笑っている。

「じゃオレも入ってくるかなあ」

顔を元の位置に戻させると逃げるように風呂へと駆け出した。

「あら、早かったね」

「まあシャワーだけだしな。」

もうオレは寝るぞ。今日は疲れた」

「じゃ私も」

魅夜はプツツとリモコンでTVの電源を切る。

「ねえ。私をどこで寝かせる気？」

「祢音の部屋でいいだろ」

「1人で？」

「何がいいたい？」

なんとなくわからんでもないが。

「一緒に寝よ」

やっぱりか。

「ベッドは1人用しかない」

「一緒に入ればいいじゃん」

「狭いぞ？」

「いいよ。その方が都合いいし」

都合ってなあ…。

く無月の部屋く

「無月のベッドにこうやって入るの初めてだなあ」

感慨深く呟く。

オレの部屋に来たことは何回かあったが、

ベッドに腰かけたり、マンガ読みながら寝ころぶ程度。

こうやって一緒に入るなんて今までなかった。

そう何度もあったらそれはそれで困るんだけどな。

ちなみに今オレは魅夜に背中を向けるように寝ている。

「寝てる？」

すぐ後ろから魅夜の声がした。

「寝てる」

「起きてるじゃん」

すぐに魅夜のつつこみが入る。

「ねー、おやすみのキスはー」

「まだそんなこと言うのか。さっさと寝ろよ」

「やだー。キスしてくれるまで寝ない」

「仕方ないな」

そう言いながらオレは体の向きを変える。

んで、すつと額に唇を触れさせるとまたすぐに反対側へと体を向ける。

「ちよっとお！」

すると強引にオレを向かい合わせた。

「じーっ」

魅夜がオレを上目づかいで見ている。

「じーっ」

しかもわざわざ自分の声で擬態語を出しながら。

「じーっ」

「…わがままなヤツだな」

一瞬だけ互いの唇が軽く触れ合うだけのキスをした。

恥ずかしくなってきたからまた体を戻す。

今日のオレ…弱いな。

「ありがと。大好きだよ」

簡単なキスでも魅夜は喜んでくれたようで背中に抱きついてくる。

あーそんなことされると余計に寝れん。

「すー…すー…すー…」

そうするとすぐに背中から寝息が聞こえた。

早い…。

「オレもだ」

それからしばらくして落ち着いてからようやく眠ることができた。
恥ずかしくて結局向かい合って寝ようとはしなかったが。

長い一日の終わりだ。

＼DREAMの部屋＼

「おもしろかったあ！」

オレは少し疲れた…。

つかこれは抑え目の普通の恋人生活なのか？

R—18突入するところだったぞ…。

危なかった…………。

「そう、よかったわ。楽しんでもらえて」

久遠も満足そうだ。

「すごいね。1日過ごしたのにまだ3時間しか過ぎてないよ！」

「まあそれがウリでもあるからね」

そう言いながら久遠はコンピュータを操作している。

「ありがとね。こんなのあるんだったらまた来ようかな。

そだ。まだ時間あるしこれから遊ぼう！」

「い・や・だ。寝る」

オレは捕まらないようさつさと自分の部屋に逃げた。

気を使ってくれたのか、結局魅夜が来ることはなかった。

第25話 「恋人の1日」 (後書き)

無月と魅夜の恋人生活を書いてほしいというわけで作ったこの作品。

「1日」ということでいつもにはない(?) 1日分の長さです。

その分楽しんでいたけると嬉しいですね。

今の所リクがないので更新もストップします。

受験もありますし、たぶん自分からは考えないので。

リクがある場合はまたメールください。

今のように結構遅れると思いますができるだけ早く書くつもりです。

あ、メールにメルアドも追加して送ってくださいるとちょっとした質問もさせていただくことができ、さらに望んだような話ができると思います。

個人情報なのでもちろんその辺りはちゃんとします。

忘れる場合もないとは限らないのでリク内容はメモ帳に一旦残してからメールは削除します。

感想&評価そしてリクもよろしくお願いします。

第26話「クリスマス・イブ」(前書き)

え？久しぶりの投稿だったのに1日ズレてる？
気にしない気にしない。

というわけで、リクエスト第……2弾です。

第26話「クリスマス・イブ」

＼奏SIDE・奏の部屋＼

ピンポン

とチャイムが家に響き渡りました。

ですが誰も応対に出ようとする人はいません。

お姉様も兄さんも補習とやらで学校に行っています。

＼無月&祢音SIDE・水月学園＼

「何で私たち冬休みの真っ昼間に補習に来てんの？」

「あんまり出席してない上にテスト結構悪かったからなあ。

まあ英語は問題ないけど現代文とか特に歴史は空っぽだったし」

＼奏SIDE＼

仕方ないですね。

私は読みかけの本に付箋ふせんを挟み、玄関へ行きました。

客は宅配便の方でした。

その小さな小包は珍しく、というか初めて私宛てのものでした。

誰からでしょう？

……『久遠』？

どうやら久遠様から送られてきたようです。

わざわざ宅配便なんか使ってどうしたんでしょう？

私は部屋で開けることにしました。

（奏の部屋）

重さはそんなにないです。

何でしょうか？

開けてみると手紙と綺麗な小瓶が出てきました。

手紙には

『いい香りだから祢音と一緒に嗅いでみなさい。

私からのクリスマスプレゼントよ』

とそれだけでした。

どこか怪しいです…。

とはいえ好意であれば申し訳ないです。

万が一お姉様に危害が及ぶ前に少し嗅いでみることにしました。

あ…………。

少し甘ったるい気もりましたが、結構いい香りです。

今のところは体に異常はなさそうです。

これなら大丈夫そうですね。

そして瓶を引き出しの中にしまいました。

下でお姉様たちを迎える準備をしましょうか。

「…………っ！」

と思ったら扉の前で急に気が遠くなり、力が抜けて倒れてしまいました。

く無月SIDEく

「あー終わった終わった」

「ただいまー！」

家に入ると、とたとたと奏が出迎えた。

そしてオレたちの姿を見ると一瞬だが驚いた顔をして背中を向けてしまった。

どうしたんだろうか？

ちよいとしてから奏は振り返りとんでもないことを言った。

「お兄様、お姉様…お帰りなさい」

！？

まず耳を疑った。

それは祢音も同じのようで驚いた顔をしている。

「お茶…用意してますから来て下さい」

とダイニングの方へ消えていった。

「お兄ちゃん、今、『お兄様』って…」

「あ、ああ…やっぱりそう言ったよな」

かなり疑問に思いながら奏の待つ部屋へ向かった。

くダイニングく

ダイニングテーブルには2人分の紅茶とクッキーが置いてあった。

「初めて1人で作ったのでおいしいかわからないんですけど…」

どうしたどうした？

こんな事って1回もなかったぞ。

疑問に思いながらイスに座り、1口食べてみる。

奏はその様子を不安げに見ている。

自分から感想を訊くのも恐れているようだ。

「まあ…うまいよ」

まあまあうまい。

「……………」

奏はそれを聞くと嬉し恥ずかしといったような顔をした。

「ねえ、奏ちゃん今日はどうしたの？」

いつもとかなり様子が違うんだけど…」

「そうですか？」

私はそうは思わないんですけど…」

おかしい…。

「お兄様、後で宿題を見て欲しいんですけどいいですか？」

「ああ…いいけど…」

今までこんなのがあったか!?

柰音じゃなくてオレか!?

メンドクせ…。

その後も奏はちらちらとオレを見た。

んで、オレが奏を見ると顔をそむけるといった具合だ。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「えーと、ここはこーで、こーで、こーだ」

奏は言われた通りに書いていく。

「ここは…?」

「あーして、こーう」

何やってんだオレ…。

「ここ…」

「わからん」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「ところでお兄様、今夜ピアノミニコンサートが

島民ホールとうみんのエントランスで行われるのをしってますか？」

勉強の途中で奏が突然言った。

「へえー。あ、なんかそんな張り紙があったような…」

商店街にちらほらと。

「行きませんか？私たち2人だけで」

「は……?」

口を「は」のままポカンと開けて奏を見る。

「2人だけ?

オレと……お前……?」

言葉に合わせて自分と奏を指差す。

「はい」

「柰音は?」

今度は柰音がいるであろう下を指差す。

「お姉様には申し訳ありませんが……」

こりゃ驚いた。

ドリームの中でもないのにこうくるとは…。

何か変なものでも食ったのか?

「柰音に訊いてからだ。

ちゃんと話してな。オレから話しといてやるよ」

「はい…」

くリビングく

「ほーーーーー」

その後、奏に内緒で祢音にその事を伝えたと、

自分が除け者にされた事なんか頭に入っていないような反応だった。

「どうしよう…?」

「どうしようってそんなのついてってあげれば?」

祢音は当然と言わんばかりに答える。

「そうなるとお前1人だぞ?寂しいぞ」

「別にいいよ。奏ちゃんがそう言うのって初めてじゃない。

わたしとしてはそれで嬉しいからいいんだけど?」

祢音にそう言われると誘いを断る理由がない。

行くしかないか。

「でも、イブの夜に年頃の少女を独りにする見返りはもらうからね」

「はいはい」

（奏の部屋）

「奏、いいぞ。一緒に行ってやる」

「ほんとですか？」

それを聞くとホッとしたようで、表情を和らげる。

ずっと不安だったんだろう。

「ああ」

「ありがとうございます！」

奏は今にも跳びついてきそうなフィンキだ。

「はは…で、いつからだ？」

「21時からです」

「そうか…少し遅いな。まあいいか」

く玄関く

「申し訳ありませんが、留守をよろしくお願いします」

「うん。いつてらっしゃい」

「じゃ、いつてくる」

く島民ホールく

小さいコンサートで演奏者も無名なせい、

エントランスには40席ほどパイプイスが用意されているがそれで十分なほどの人数がいた。

それでもクリスマスだからカップルもいる。

オレたちは隅の方の席に座る。

2席並べられていて丁度よかったからだ。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

その後はずっと曲を聴くのに没頭していて奏と2人で来ていることも忘れていた。

だったらいいのだが、恥ずかしいことに奏はずっと寄り添っていた。

2人の演奏者がいて、時間は1時間と15分ぐらいだった。

その間ずっとだ。

しかも奏は半分ぐらいで眠ってしまう始末だ。

寝るぐらいなら来なけりゃよかったのに。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「奏…起きろ」

演奏がすべて終わってからオレは奏を起こす。

「ん…あ、すみません」

「いいよ。帰ろうぜ。柰音が待ってる」

「そうですね。帰りましょう」

く 帰り道 く

「…………あれ？」

奏は突然ヘタヘタと座り込んでしまった。

そして立ち上がろうとしているようだが、どうやら立てないようだ。

「力が入らないみたいです」

力が入らない？

「さっき寝過ぎたせいかな？」

「いえ！それはないです……多分」

人がいないから邪魔にはならないだろうが、

このまま座ったままにいるのもなんだしなあ。

「ほら」

オレは奏に背中を向けてしゃがむ。

「え…？」

「普段のお前ならいやだけどな！特別だぞ！」

「ありがとうございます」

少ししてから背中に重みを感じる。

「落ちるなよ、しっかり掴まってる」

「はい」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「ところでお兄様、私、魅力ないですか？」

「は…?」

あまりに突然そんなこと言うからとつさに答えられなかった。

「男の人は胸が大きい方が好きだって聞きますから」

あー、そういうことか。

まあ……確かに背中に感じる奏の胸は……小さいな。

「気にしてんのか? その……小さいこと」

言っているのかちょっと考えながら言った。

「戦闘には必要ないですし、大きいと戦いにくそうですからいいんですけど…」

「別に…胸は関係ねえよ。」

お前の場合は普段の無愛想さだな」

「そうですか…。

それならなんとかかなりそうですね」

そうかい。

そりゃよかったな。

く如月家・玄関く

「ただいま」

「おかえりー…ってこれはどういうこと？」

「まあかくかくしかじかでな」

で、経緯の説明をした。

「へえー」

「もう大丈夫です。降ろしてください」

言われた通り、奏を降ろす。

「疲れてるかもしれねえし、風呂入って早く寝ろ」

「はい、そうします」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

プルルルル…プルルルル…

その夜0時丁度に電話がかかってきた。

だれかと思ってでてみれば

「メリークリスマス」

聞くはずのない声が聞こえてきた。

「ちょっと…聞いているの？」

「久遠か…」

相手は久遠だった。

電話なんか使ってくるとは思わなかったな。

「どう？楽しんでる？私からのクリスマスプレゼント」

「楽しんでる？何を？」

「届いてないの？むらむら香水」

どうやら話が噛み合っていないようだ。

……………『むらむら香水』？

ここでオレの中では繋がった。

「奏があんなのになったのはあんたのせいか!？」

「むらむら香水、あなたの一部を材料にしたから嗅いだ人はあなたにメロメロになるのよ。」

しかもその間記憶がないからやりたい放題できるわ。

……奏が？ 祢音の方はそうでもない？」

「祢音はなんともねえよ」

「そう…残念ね。」

嗅いでなかったのかしら。

せっかくあなたにハーレム気分を味あわせてあげようと思ったのに……」

電話終わったらさっさと回収しないと、そんな危険物。

「奏はずっとあのままか？」

「いえ、数時間寝たら元に戻るわよ」

「1時間弱寝た後、力が入らなかったらしいが？」

「中途半端に寝たからかしら…？」

改良の余地があるわね。試供品だし丁度よかったわ」

「そんなもん。寄越すなよ」

「悪かった。今度は完成品を送るわ」

そういうことじゃなくて…。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

その後、事情を祢音に話し、奏の部屋を漁ると例の香水が出てきた。

迅速に回収、封印（と言っても開かないようにガムテープで縛り付けただけだが）

して本部に行く時に久遠へ返すことにした。

そして次の日、すっかり奏は無愛想に戻った。

よかったのか悪かったのか…。

とりあえず一件落着、と。

第26話「クリスマス・イブ」(後書き)

感想&評価待ってます。

第27話 「舞踏会」 (前書き)

e f おもしろかったなあ

そうそう、こないだようやく知ったんですけど「新山千春」でホントにいたんですね(汗
うーん、適当に響きだけで決めたのになあ…

第27話 「舞踏会」

『長老の間まで来なさい』

という命令を受けてオレ、祢音、奏の3人は長老の間に来ていた。

「任務ですか？」

「ええ、まあ：そうですね。」

ちよつとある方の主催する舞踏会に出てもらいたいです」

「？」

予想外、とわけのわからない頼みに眉をひそめる。

「この組織には仮の姿としていくつかあります。」

そこで得た資金を任務や報酬で使っているんですが、そのスポンサーの位置にいる、

マダムから舞踏会のボディガードの依頼を兼ねた招待状が来しました。

狙われているという確証はないのでガードの方はついででいいということです」

「だったら調律師が3人も行く必要もないんじゃないですか？」

「そこは休暇も兼ねて楽しんでくればいいという私の配慮ですがいいませんか？」

舞踏会なんてメンドくさそうだったから断ろうと思ったが、

「いえ！喜んで引き受けます。3人で」

その前に祢音がそう言って引き受けてしまった。

「そうですか。」

同じ世界にありますから、今から1時間後に行けばちょうど舞踏会の開催に間に合います。

その間に準備を」

「わかりました」

「では準備してきます」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「ねえねえ。舞踏会ってことはドレス着ていかなきゃダメなんだよね？」

「そーいや久遠さんがそういうの持ってたような…」

「なんでだ…。」

く久遠の部屋く

「そんなことならお安いご用よ。」

好きなものを選びなさい！サイズも揃えてあるわ」

てなわけでより取り見取りってな感じに揃えられた服の数々。

だからなんでそんなに持ってるんだ？

「うわあ！奏ちゃん、どうしようか？」

「私はあまり派手でない服装であればどれでも」

「初めての舞踏会だからね」

オレたち全員が初めての舞踏会……………心配だ。

く異世界く

「すごい！」

あーすごいな。

映画とかで見るようなそのまんまの舞踏会が目の前で繰り広げられている。

ホールは2分割されていて、飯を食いながら談話する場所。

そしてすでに結構な人数がダンスを踊っている、場所になっている。ダンスは上のキャットウォークのような所から見下ろすことができるみたいだ。

2分割されているとは言っても全然狭さを感じさせないほど広い。

「さーて、どうしようか」

なーんて考えていると

「お嬢さん、この私と踊ってくれませんか？」

と手が伸びてきた。

見るとどこかの御曹司か頭首かぼっちゃなか、

金髪のまぶしい男がやってきた。

容姿は悪くない。

むしろ一般的に見ればいい方に入ると思われるほどだ。

そしてその手の先にいるのは祢音。

「え…えーと…」

答えを求めるようにオレを見るがオレはそっぽを向くことで答える。
勝手にしろ。

「じゃ、じゃあよろしく願いします。

初めてなので…あ…えー……」

「大丈夫ですよ。私に任せて下さい」

「はい、よろしくお願いします」

さすがの柊音もこの状況ではたじたと相手についていくしかない
ようだ。

「さて、お前は？」

と振り返って奏を見れば、すでに他の男に誘われている。

だが「興味ありません」の一言で一蹴。

お前、強いな。

「兄さん、上に行きましょう。あの男を監視する必要があります」

そして何にも目もくれず階段へ歩いて行った。

「監視って…お前なあ…」

とは言え、オレも気になるからついていくことにした。

「……………あー、見つけた。はっ、振り回されてやがる」

祢音たちはダンス会場の中心より離れた結構外寄りの所で踊っている。

踊っているが祢音は初めてだったり緊張してるせいか、相手に合わせるので一杯一杯のようだ。

こんな祢音はなかなか見られないからじっくり見ておこう。

「だけど、相手が気に食わねえな」

かっこいいからかはわかんねえけどあの笑いが気に食わない。

「珍しく意見が合いますね、私もです」

珍しくはないだろ……………お。

不意に視線を食事会場へ向けるとある集まりに目がとまった。

「奏…、あそこのヤツらさ……………」

奏はオレが指をさす方向を見る。

「オレらと一緒だな」

「……殺し屋ってことですか？

一見そうには見えませんが……」

「いや、ただパーティ初心者ってなだけ」

あのぎこちなさ、オレが現在経験中だから間違いないな。

「あ、そうですか」

オレの答えは期待外れだったようで、何事もなかったかのように視線を祢音たちへ戻す。

「そうだ。せっかくだしメシ食ってこよ。お前も来いよ」

「いえ、私は監視してるので良さそうなのを適当に持ってきてください」

奏は視線を変えずに言う。

「お前の好み、未だに知らないんだけど」

「……それもそうですね。私も行きます」

そしてようやく祢音以外に視線を向けた奏はオレの後ろをついてきた。

「おー」

普段テレビでしか見ないような料理が目の前にある。

「…！おいしいです…」

奏も思わずこう言うほどだ。

とまあ料理を堪能していると後に祢音も合流。

そこでステージにマダムが登場し、挨拶を始める。

マダムは何かの宝石がこれでもかと散りばめられた首飾りをしている。

近くの女の話を見ると、どうやらマダムは自慢好きのようで、あれは自慢の品の一つらしい。

で、うだうだとした話が終わりに近づいた時、

「全員動くな！」

ずっとマダムの後ろにガタイのいい男が降りてきて、

サバイバルナイフのような刃物を首筋に突き立てた。

その言葉に騒然となるホール。

「お兄ちゃん！」

「ああ、ただの休日とはいかなかったみたいだな」

マダムのボディーガードと思われる男たちは一歩も動けずその様子を見ている。

近づこうとすればおそらくマダムは殺されるだろう。

それだけ本気であることがその男のフィンキから感じ取れる。

だからこそオレたちも動けない。

銃を撃とうにもおそらく刺す方が早いのか、防げても余計に刺激するだけだ。

無茶なことをしなければ、静観しているのが正しい。

男は煩わしそうにマダムの首飾りをとると新たに上から現れた小柄な男に渡す。

「まだ動くなよ！」

小柄な男は首飾りを受け取ると堂々とホールの出入り口から出て行った。

「さて、オレもさっさと退散させてもらうか」

刃物を突きつけたまま、でかい男は窓まで移動する。

窓の前まで来るとマダムを押し、すぐに窓から逃げ出した。

2人がいなくなると静かだったホールは人の声で騒がしくなる。

「よし！お前らはちっこいヤツを追え！オレはあいつを追う！」

「大丈夫？そっちの方が強そうだけど？」

「問題ない。何かあったら念話で連絡な」

「了解。じゃ、任せたよ」

☆	☆
★	★
☆	☆
★	★
☆	☆
★	★
☆	☆
★	★
☆	☆
★	★

戦 闘 終 了

「あーあ、せっかくのパーティだったのになあ」

「まあそういうな。」

「一応ボディーガードだったんだから」

「私は少し窮屈でしたからよかったです」

「そんなこんなで初の舞踏会は終わった。」

第27話 「舞踏会」 (後書き)

実はこの回コラボ作品にしようとしたんですけど、なのは編と同じ展開になりそうなので止めました。

次回、年明けになります。がまた奏の話です。しかも日向絡み。うーん、そろそろ祢音メインの回を何か…

感想&評価待ってます

第28話

「

」

(前書き)

今回長いです。

分割してもよかったんですが、一応短編なんでまとめました。
今回久々に戦闘有なんですけどあまり期待しないでください。
後書きに今後の決意あり

第28話

「

」

（奏SIDE・奏の部屋）

「…っ!!?」

悪夢でも見たような寝起きでした。

実際、悪夢を見たのかもしれませんが。

胸の上に何か這^はっているようなざわざわとした感じがします。

「はあ…はあ…はあ…」

最近こんなのばかりです。

酷く気分が悪い…。

酷くむしゃくしゃする…。

酷く切ない…。

酷く憎い…。

でもどんな夢だったか思い出せません。

でも…たかが夢です。

今日ものんびり過ごしましょうか。

（無月SIDE・食堂）

食堂で飯を食った後、奏は一人立ち上がった。

「…ん？どっか行くのか？」

奏が最初に立ち上がるのは珍しいことだった。

「はい」

「どこに？」

「…どこへ行こうと私の勝手です」

いつもの感情の読めない口調ではなかった。

明らかな苛^{いらだ}立ちが見えた。

「奏ちゃん、どうしたの？」

柰音も異変に気づいたようで尋ねる。

「なんでもないです。」

では、お先に失礼します」

そしてさつさと去ってしまった。

「なあ柰音…最近奏おかしくないか？」

なんつーか…敵意ってのを感じるんだよ」

「確かに…そうだね、私に対しても時々つれないよね」

柰音にもそうだとするとこれは問題だな。

「心配？」

「まあな。」

……………待てよ。

また久遠の仕業じゃねえのか？」

「あ、なるほど。」

訊きに行ってみようか」

く久遠の部屋く

「そんなの知らないわよ。」

素っ気なくする葉？…そんなの造ってもつまらないし」

心外だとばかりに眉を狭めて言う。

「そう…か…」

「奏は特に何も言っていない？」

「訊いても何も答えてくれませんでした…」

奏にあんなこと言われたの初めてだからな。

「そんなにひどいの？」

あのこがねえ…。

私も短気な奏は気に入らないし、できるだけ調べてみるわ」

「お願いします」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

だが奏の性格が変わることはなく、日増しにひどくなっていった。

〈奏SIDE・奏の部屋〉

「……………っ！」

何で！？

兄さんとお姉様に苛立つ理由はわかってる。

毎日見るあの嫌な夢。

最近その夢の内容がわかってきました。

だけど…！

そんなのもう割り切ったはずなのに…！

2人にあたっても意味ないのに…！

お父様が還ってくるわけ…ないのに…！

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

く夢の中く

「お父さんのこと…残念だったな」

「誰！？」

真っ暗な中に誰かの声が聞こえてきます。

「あいつらが来なかったらずっと幸せに過ごせたのに」

「それは…兄さんとお姉様のお母さんを殺したから…組織を裏切ったから…」

それに仕方なかったんです。

お父様のせいで兄さんが傷ついて、それで出てきた堕天使を封印するため…」

「だから許せるの？」

ちゃんと納得したのか？

過ごしてきただろ？

お父さんのお世話してきただろ？

褒めてもらえただろ？

楽しかっただろ？

嬉しかっただろ？

それをあの2人は、組織は奪ったんだよ。

その暮らしを…」

「でも新しい居場所をくれました」

「じゃあその苛立ちは何？」

「！」

確かに2人の顔を見ると胸が掻き毟られるような、色んな負の感情が湧き出てきます。

たかが夢なのに…。

「ね。」

納得したように思いこんで心の底では納得してないんだ」

「……………」

「ほら…その苛立ち、ぶつけちゃいなよ。」

いつまでもそんな気持ちでいるの嫌だろ？

その解消法もわかってるはずだ」

く奏の部屋く

「もう嫌あ！！！！」

心は嫌な気持ちで一杯です。

こんな気持ち……掻き爪って体から取り除いてしまいたい。

「どうしたの！？大丈夫！？」

扉の方からお姉様の声が聞こえてきました。

「大丈夫……です。」

先に朝食を食べて下さい。

後で行きます」

「そう……じゃあ先に行ってるね」

そしてお姉様の声は聞こえなくなりました。

姿が目障り、声が耳障り、匂いも……鼻障り？

とにかく嫌です。

「もう……ダメ。耐えられない」

私の足は自然と食堂へ動きました。

（無月SIDE・食堂）

「奏ちゃん、なんとかしてあげたいけど私たち見ると苛立つみたいだし」

「病院行った方がいいんじゃないか？」

マジでそう思えてくる。

「あ、奏ちゃんだ」

奏は真っ直ぐこちらに向かってくる。

殺気？

奏からはバレバレの殺気が感じられた。

「死んでください」

奏は剣を取り出し、斬りかかってきた。

「うわっ！」

バレバレの殺気が感じられたから難なく避けられたがどういうことだ？

「はああっ！」

奏は続けて斬りかかる。

「ちっ！」

食堂には人もいるってのによお。

「何やってるお前！」

「答える必要はありません！」

うーむ、これは力づくか？

「どうするの！？」

少し離れた所から柰音の声が聞こえる。

「柰音、お前は離れてろ。」

オレが止める」

オレも剣を出した。

食堂にいたヤツらはオレたちから遠く離れた所にいる。

少々暴れても問題はない。

だが机とかが邪魔だから宙に浮いておく。

「殺しにくるなら覚悟しろよ」

キーン

まさかまた奏と戦うことになるとはな。

オレはあの時とは違うぞ。

まあ奏もだろうが…。

『狐火』

『火球』

互いの火がぶつかりあってできた煙の中から奏が現れた。

読めてる。

胴のあたりを剣の側面で叩く。

が、奏の姿は煙のようにゆらめいて剣をすり抜ける。

幻か！

背後に回る奏の姿が見えた。

くっ。

剣での攻撃を剣で防ぐ。

空いた左手で奏の襟えりを掴みに行く。

が、手でパシッと払い除けられることで邪魔される。

一旦距離をとる。

「兄さん…。」

妖狐！憑依！」

奏は妖狐を呼び出し、憑依させた。

おいおい、マジかよ。

こんな所でソレを使うか。

だったらオレも使わなきゃな。

そしてオレもフェニックスを憑依させた。

『鞠』

奏の手に鞠が現れる。

奏は鞠を落とし、オレめがけて蹴って来た。

どうしてあるかは知らないが、普通に蹴った以上のスピードだ。

オレはその向かってきた鞠を斬った。

が、その鞠は煙のように揺らめき、さらにそれを突き破るようにもう1つの鞠が現れた。

また幻か！

「つてえ…」

左手でシールドを創ったが、それすらも突き破り、オレに当たった。すげえ回転のせいで左手はひりひりするし、

そのまま鳩尾^{みぞおち}に衝撃が伝わったせいで気持ち悪い。

「容赦ねえな」

と言ってる間にも九の尾が扇状に開き、魔力が高まっているのがわかる。

『千本鳥居』

一瞬で周りが真っ暗になり、目の前に鳥居がいくつも並んであるのだけが見える。

鳥居が迫っているのか、オレが無意識に動いているのかはわからない。

けど近づいている。

そして無数の鳥居をくぐっていく。

その光景に目をそむける事ができずに見つめてしまう。

そのうちに眠たくなってきた。

「お兄ちゃん!!」

ダン

その声と銃声、そして急に感じた腹部の痛みで我に返る。

その声が祢音とわかるまで少し時間が必要だった。

オレの視界には見覚えのある食堂と、目の前で今にも剣を振り下ろしそうな奏がいた。

瞬時に、避けなければならぬという今の状況を理解して、奏の剣を避ける。

憑依が解けてる？

「還^{かえ}ってきましたか」

奏の言葉は意味がわからないから無視し、痛みを感じた部分に触れると強い痛みを感じた。

ああ、撃たれたのか……。

撃たれた！？

……………そういうことか。

「今のは幻術か」

「そうです。もう少しで死んでましたね」

「で、祢音が起こしてくれたわけか。

銃で撃つってのは過激すぎじゃないか？」

多分オレの後ろにいるだろう祢音に言う。

「そうでもしないと死ぬとこだったんだよ!？」

「まあ礼は言っておくよ。

奏……ホントに殺す気らしいな」

「……………」

「1発2発、殴られるの覚悟しろよ」

オレは奏へ向って飛んだ。

剣を奏へ投げる。

奏はそれを剣で弾いた。

すぐに奏の襟を掴む。

剣が振り下ろされるが、シールドを使いながら弾く。

奏は弾く力に耐えられなかったようで、剣は奏の手を放れ、後方へ回転しながら飛んでいく。

そして本気で頬を殴った。

ここまでの動作はかなり短い時間で行われた。

「ちょ、お兄ちゃん！」

奏は床へ吹っ飛びながら落ちていく。

さらに奏に馬乗りになった。

「どいてくださいっ!!！」

奏は足をバタバタさせながらオレの胸を押す。

「奏えっ!!！」

「っ!!！」

もう1発殴った。

そこで奏はピタリと動きを止めた。

抵抗するならもう1発殴ってやろうかと思ったが、奏は抵抗しそうにない。

どこかをぼーっと見てるだけだ。

見てるのかも疑わしい。

「……………どうして…」

長い時間経ってようやく口を開いた。

「どうしてこれだけ力があるのに助けられなかったんですか…お父様を…！」

……………はあ……………。

「これだけ力があるってなあ……それは今だ。」

あの時オレは弱かった。

そんなことぐらいお前ならわかってるだろ」

すると急にぐっと奏の体に力が入り、逆にオレが押し倒される。

「わかってます！でも…悔しいんです！

あの時私がいればなんとかできた自信があります。

そもそもあの時あなたがお父様を止めていればお姉様の墮天使も目覚めなかった」

「じゃあオレも訊くぞ。」

あの時祢音をなんとかしてれば祢音があの場合に来る事はなかったんじゃないか？」

その言葉に奏は怯む。

「っ…でも！兄さんの方が止められるチャンスが多かったです」

もはやここまで来ると醜い言葉喧嘩だ。

頭でわかっているはずなのに無意味な事を訴え続ける奏は子供のようだった。

「もっとお父様には生きて欲しかった。

そしてもっと私を見て欲しかった。愛して欲しかった。触れて欲しかった。笑って欲しかった。

抱きしめて欲しかった。喜んで欲しかった。知って欲しかった。遊んで欲しかった。話して欲しかった。

暮して欲しかった。楽しんで欲しかった。握って欲しかった。幸せにして欲しかった。

見させて欲しかった。愛させて欲しかった。笑わせて欲しかった。触れさせて欲しかった。笑わせて欲しかった。

抱きしめさせて欲しかった。喜ばせて欲しかった。知らせて欲しかった。遊ばせて欲しかった。話させて欲しかった。

暮させて欲しかった。楽しませて欲しかった。握らせて欲しかった。幸せにさせて欲しかった」

言い始めてから奏の目から涙が流れ始めた。

「なのに……なのにどうして!？」

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどう

してどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして
どうして

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどう
してどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして
どうして!!!!???

叫んでいる間も、流し始めた奏の涙は止まらなかった。

流した涙はオレの顔に当たり続けている。

「兄さんが!…あなたのせいで!!」

奏の握り拳こぶしが振り上げられる。

「もう止めてよお!!」

それは振り下ろされることなく、祢音に止められる。

「くっ…」

「そこまでよ!!」

その言葉で食堂の出入口を見ると誰か3人現れた。

それは天照様、久遠……と知らない男だった。

服装から見るとここの人間のようなだが…。

「全てはこの男…とこの装置のせいよ」

携帯ゲームのような大きさの機械を床へ投げつける。

「その装置、奏の部屋の枕元に仕掛けてあったわ。

とっちめて吐かせたらその装置、催眠効果のあるものだった。

私が見たところ、奏はまだまだ幼いわね、心が。

見た目はこうでも生まれてから十年も経ってないもの。

感受性が強くて一度振れると振れ幅が大きく、激しく振れる。

催眠効果はかなりあったはずよ。

見ての通りということかしら」

久遠が多くの観衆の見つめる中、名探偵の推理ショーとでも言いたげな解説をした。

「奏さんは私に任せて下さい」

奏は意外にも素直に従い、天照様は奏を連れて食堂を出た。

「これにて一件落着。

ささ、あんたたちばーつとしてないで、食堂片付けなさい」

その一声で観衆は観衆でなくなった。

わいわいと壊れた机などを直す者。

料理を作りなおす者など。

久遠はさっきの男とどっか行ったようだ。

「はい」

「よっ、と」

柰音が差し出した手を握り、起こしてもらおう。

「なんか…大変だったね」

「ああ。」

まったく…誰か知らんが迷惑千万だ」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

その後聞かされたのは男が元々親父に賛同していたこと。

親父が組織から抜けてもここにいたのは、

どうやらスパイだったらしい。

親父がいなくなってからは大人しくしていたようだが

久遠に説明されたあの機械を使って、精神的に脆い奏を手駒にオレたちを殺そうとしたらしい。

動機は実験と、親父を消したただの恨みという簡単なものだった。

その後、一連の叫びを多くの観衆に聞かれていた奏は、

催眠がかけられる以前と同じ性格に戻ったが、

無愛想で近寄りにくいという印象が大きく修正され、

みんなから可愛がられることになった。

奏は周りからそう扱われる度に迷惑そうにしていた。

だが、ちゃんと返事をしている分、少しは喜んでいるのかもしれない。

第28話

「

」

（後書き）

もうしない！奏の話はしばらくなしです！

次は祢音だな：いや、脇役キャラにもライトを…。

何か希望があればよろしく願います。

なんでもやらせてもらいます。（できるだけ）

感想&評価お待ちします。

第29話 「久しぶりの…」 (前書き)

お久しぶりです。

第29話 「久しぶりの…」

「あー！あー！あー！」

「うるせえっ！！聞こえねえだろ！」

「兄さんの方がうるさいです」

とまあこんな事やってるわけだが、

どういふことか説明すると現在ホラー映画視聴中なわけだ。

ホラー映画を見れるようにになりたいという祢音の希望で

わざわざレンタル店まで行ってメジャーなものを選んできた。

もちろん今は夜だ。

祢音は半分ぐらいまではなんとか見ていたようだが、

結局ビビッた称音はテレビから視線を45度外し、

目をつむり、耳をふさいで、あーあー言っている。

「嫌だったら部屋にいればいいだろ」

「二人はいやー！ー！ー！ー！ー！」

「わがままなヤツだ。ちゃんと見ろよ」

オレは祢音の手首を掴み、強引に耳元から手を離させる。

「ちょ…やーめーてー！やーケダモノー！」

おいおい…。

これ以上騒がれても仕方ないから手を放してやった。

ま、おもしろいからこのまま映画は流しておくけど。

「はい、お疲れさん。終わったぞー」

たまに祢音を弄ったりしながら最後まで見た。

「さっさと寝ろよー」

あ、そうそう、夜中にトイレなんかついてかねえぞ」

「わたしはそんなに子供じゃないよ」

「そ、じゃあついてかねえからな」

〔夜中・無月の部屋〕

コンコン

コンコン

ノックの音で目を覚ます。

「お兄ちゃん…」

でた…。

「起きてる…？」

シカト中…。

「おい」

ゆすってきた。

「何だ？」

わかってるがあえて訊く。

「ついてってくれない？」

寝室は2階にあり、トイレは1階だ。

多分ビビりながら進むには十分な距離だ。

「奏に言えばいいだろ。あいつなら喜んでついてくぞ」

「寝てるのに悪いよ」

オレは別にいいってか…。

「ついてかないって言っただろ」

「うう…そう言ったけどさー」。

わたしが史上最悪の事態に陥ってもいいっての!？」

「自分の部屋でしろよー」

「もう知らない!」

ボタンとドアが閉まり、バタバタと階段を降りる音がした。

はい、おやすみー。

く翌朝・ダイニングく

「おーっす」

「おはようございます」

下に降りるとテーブルに座って朝飯を食う奏がいた。

「祢音は？」

「部屋です」

「まだ寝てるのか？」

「朝食は食べましたよ」

「そうか…で、オレのは？」

テーブルに乗っている朝飯は奏が今食べてるのだけ。

「お姉様が食べました」

「2人分!？」

「2人分」

「祢音は!？」

「部屋」

奏はオレの質問に即答していく。

んゝ…どうしたことだ…？

「謝ってこればいいじゃないですか。怒ってましたよ」

「…………怒ってた？」

「はい。」

昨夜兄さんがトイレについてってくれなかったと近所に恥ずかしげもなく」

……そうか、そういうそんなことあったな。

「仕方ない」

2階へゴー。

〳〵柰音の部屋前〳〵

「ねおくん。あー悪かった。謝るよ」

と謝ってみるが反応はない。

「おーい、起きてるか〳〵？」

……やっぱり反応はない。

無理に出ない方がいいかもな。

〳〵ダイニング〳〵

「朝食、作りましょうか？」

降りてきたのがオレだけだということで結果を理解したようだ。

「ああ、頼むわ」

「さっさと仲直りしてくださいよ。」

狭間にいる私の身にもなってください」

「はいはい」

食い終わったら任務の報告書の仕上げでもするか。

く無月の部屋く

「な…」

仕上げをしようと部屋に来てみれば、見つけたのは切り刻まれた書きかけの報告書。

「ねおーーーーーん!!」

く柰音の部屋く

「お前報告書なんてことしてくれんだ！

もう仕上げだったのによお！」

ボタンとドアを開けると同時に叫んだ。

「また書けばいいじゃない」

柰音はベッドに寝転びながら他人事のように返す。

「お・ま・え・が・書・け！」

「い・や・だ！」

報告書は責任者の位置にあるオレが

書かなければならない決まりなんだがな。

「とうとうオレをキレさせちまったようだな」

「兄妹喧嘩なんて何年ぶりだろね」

柰音もベッドから起き上がって対峙する。

魔法なんか知らなかった頃にしたつきりだ。

「魔法はありますか？ なしか？」

「ありでいいんじゃない？」

なら結界張つとかないとな。

「じゃあ行くぞ！」

「いいかげんにしてください」

ん？ かな――

トスッ

「つつ…！」

首に衝撃が…。

奏…お前なあ…。

ゝリビングゝ

ここは…リビングか…。

動けない…！？

と思つたら鎖で縛られてるだど！？

「起きましたか」

「奏…どういうつもりだ？」

「少しは頭を冷やしてください」

そしてストンと頭に冷たいものが乗せられる。

氷水のようなだ。

「だからって鎖で縛るのかよ…」

「縄でしたら兄さん燃やしますからね。

とにかく、今回は兄さんが悪いです。

私はお姉様を見てきますから、頭冷やしといてくださいね。

あ…報告書は私が書きますから」

ドアが閉まり、階段を上がる音がする。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

現在リビングのイスに向かい合うようにしてオレと柊音が座っている。

「はい。さっさと謝ってください」

「「……………」」

「ごめん！」

「ごめんなさい！」

同時に言った。

「いや、お前は謝らなくていいんだよ」

「ううん。わたしも悪かったよ」

「いやいやいやオレの方が悪かったし」

「でもわたしが意地はってたから」

「オレだって――」

「もういいですか？」

奏がオレと祢音のやりとりに呆れて言う。

「「あ…」」

「これで一件落着ですね。」

では私はこれで」

奏は2階へ上がって行った。

取り残されたオレと祢音。

「これはもう水に流すってことでいいよね？」

「ああ。お詫びに何かしてやるよ」

「ふふっ、そうだねえ。」

こないだの借りもまとめて返してもらおうかな」

「あまりひどいのは勘弁な」

「うん♪」

第29話 「久しぶりの…」 (後書き)

手刀で気絶するのは当たり前です！w
まあ現実世界では色々厳しいようですが。
感想&評価お待ちしております。

第30話 「バレンタインデーその2」 (前書き)

バレンタインデーとかクリスマスとか…そういう行事で一度やったネタは避けようと思っていたのですが、案外作れたので投稿しようと思います。

第30話 「バレンタインデーその2」

（本部・奏の部屋）

「……………何やってんの？」

暇だから何をしてるかとかと奏の部屋へ行けば祢音と奏がいた。

ただ、奏は妖狐を憑依させているようだが。

そして祢音は奏の尻尾を抱き枕のように抱いて寝ている。

「いえ、なんか気持良さそうだからやらしてくれと」

「ふーん」

まあ確かにふさふさして気持良さそうだな。

「言っておきますけど、兄さんには触らせませんから」

そう言って奏は尻尾を揺らす。

「あ、そ。

もう少しであいつらが来るんじゃないのか？」

あいつらというのはリルラ・ソルダートのことだ。

バレンタインのチョコ作りとかなんとか…。

「その時にはお姉様を起こしますよ」

（食堂）

「あれはもちろんオレの分だよなー？」

「なんでお前の分なんだよ」

食堂では祢音と奏をリルラがチョコを作っている。

そしてそれを眺めるオレと：なぜかメデス。

リストは修行だとか言ってどっかへ行ってしまった。

なかなか一匹狼なヤツだ。

「できあがりが楽しみだ」

「だからなんでお前が楽しみにすんだよ」

「だからってお前の分とは限らねえだろ。」

お前の知らない男だったらどうする？」

「べっつにいい：勝手にすればいいさ」

「あ…時間かかりそうならちょっと出てるわ」

「戻ってこなくていいぞ」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「よし！」

食堂の机でダラ～ンとしてると台所で声がした。

「お、できたか」

「お兄ちゃん、メデス呼んできてくれない？」

は？

「なんでオレが…」

「いいじゃん。どうせ暇でしょ？」

確かに…そりゃそうだ。

「わかった」

～廊下～

「ちっ、どこ行っただよ！」

あいつの行きそうな所は結構回ったと思うんだけどな。

「手当たり次第回るしかないようだな」

で、目の前にあったのが……墓地。

いや、まさかな。

まあ、とりあえず行くか。

～墓地～

「お」

予想に反してメデス発見。

「こんなトコにいたのか」

「よー。チョコできたのか？」

「ああ……。誰の墓だ？」

「一応…妹のだ」

妹お：そんなの組織にいたのか。

墓に刻まれた文字を読むと：ルリア・カルレット…。

「つて、ルリア・カルレットて書いてあるぞ」

「妹だよ。神話での位置で」

あ、そういうことか。

「あいつの方が年上なんだけどな。」

宴会すれば兄に先に酔わせるわ、費用全部押しつけるわとかで色々苦労したよ。

そっちの妹に比べれば可愛くもなんともないんだけど、妹だったよ」

へへ。

「そういう位置づけだといえ、兄妹でいるとは思わなかったけどな」

「人前ではなかったからな。恥ずかしがり屋だし。」

はい終了！ 祢音ちゃんのチョコ食いに行こうぜ」

なんつー兄だ。

（食堂）

「うまー！鼻血出そ」

そうして鼻を押さえるメデス。

出すな。

「うまいけどさあ。かなり甘い…」

「確かに甘いですね…」

隣で食ってるリストも同意のようだ。

「チョコだから甘いのは当たり前ですよ」

確かにリルラの言う通りだ。

「おいしいんだよね？」

よかった…これなら大丈夫かも」

「ん？何が？」

おいしいなら大丈夫…誰かに渡すとか？

「あ、いや、何でもないよ」

誤魔化したな。

こうなると気になるな。

暇だし丁度いい。

「誰かに渡すのかあ？」

ちよつといじわるっぽく言ってみる。

「あーまーそーんなートコかなー」

柰音は間延びした声で答えた。

「マジで！？誰に！？」

これに大きく反応したのはメデス。

「言うほどの人じゃないって。

じゃあ渡してくるね」

そうして食堂から出て行った。

「お前らは誰に渡すか聞してるのか？」

目の前にいる奏とリルラに訊く。

「いいえ」

「私は知ってますよ」

そうか…って何い!?

「奏は知ってるのか!？」

「ええ、かつこいい男の人に渡すそうです。

もうメロメロメロンパンだそうです」

「なんだメロンパンって…」

「気になりますねえ〜おもしろい展開ですねえ〜無月さん」

メデスが肩を組みながら言ってきた。

「変なしゃべり方をするな。

まあ気にはなるし、おもしろそうだな」

「趣味悪いですよ」

「「確かに」」

奏が言い、それにソルダート姉弟も同時に同意する。

「まあまあ、そう言いながら気になるだろ？

ちょっと見てくる」

そうしてオレとメデスは祢音の後を追いかけた。

（廊下）

「つと、いたぞ」

廊下で祢音と見知らぬ1人の男を発見。

「あーあいつは…」

メデスは知っているようだ。

「誰だ？」

「おいつはオレとここで美男の一、二を争う男だ。」

この時期になるとあいつの部屋は花束やケーキ、チョコで一杯になるのだ。

名前は知らん」

なんだその説明は。

ホワイトデーは……欧米ではないからそんな大変でもないのか。

それに見た感じ渡すよりもらう方が多そうなヤツだし。

「お前はもらってるのか？」

「正直言うとぼちぼち…だな」

まあ、お前の素を知ってるヤツが多いからな、ここは。

「それにしても話が聞こえないな。」

もう少し近づいて――」

「バカ野郎、角から見なけりゃバレちまうだろうが」

廊下は見通しがいいからな。

何を話してるかは知らないが楽しそうにしている。

「ふゝむ、これは兄離れも近いな」

メデスはニヤニヤしている。

本命と決まったわけじゃないけどな。

「まあ…それならそれでいいよ」

バレないうちに退散だ。

（食堂）

「男だったぞ」

「あ、そうですか」

奏の反応はやはり薄かった。

「お前も姉離れが近いな」

「それオレの――いてっ!」

不要な事を言いかけるメデスの足を踏む。

「柰音ちゃんもやっぱ恋する乙女ってわけだな」

「お姉様が恋……正直……意外ですね」

「お前ほどじゃねえよ」

「帰ってきましたよ」

出入口を見ると柰音がやってきた。

「お姉様、兄さんとメデスが覗きやがってましたよ」

「「なっ!?!」」

「あー見てたの。趣味悪いなあ」

「で? あいつの事好きなのか!?!」

メデスが身を乗り出さんばかりの姿勢で訊く。

「いやあ…別にそういうわけじゃないよ。

ただ…ちよつと手伝ってくれたお礼にね」

「いや奏ちゃんがメロメロメロンパンだって――」

「なんですかそれは?」

そう言ったはずの奏が真っ先にいつもより2割増疑わしげな声をあげる。

「みんなの期待する展開にはならなくて残念だったね」

舌を出して台所へ消えていった。

あゝあ、せっかくいい暇潰しができそうだったのになあ。

まあ…いいか。

第30話 「バレンタインデーその2」 (後書き)

ちなみにこの作品はサザエさん方式を採用していますW
感想&評価お待ちしております。

第31話 「魅夜の依頼」

「はぁ…護衛…ですかぁ…」

「はい。あなたは月詠様を護衛してください」

説明すると長くなるのだが、今回の任務はオレ1人で魅夜の護衛。

とある魔法のない世界で魅夜が演じている人物に脅迫状が送られた。

『チップを渡せ さもなくば殺す』

チップとは魅夜を頭としているグループがその世界で見つけたものだ。

どうやらその世界の超大富豪の遺産のありかがわかるそうで、

それは世界の大富豪から見てもかなりの額になりそうで、

争いの原因になりかねないそうで、

魅夜がそれをぶっ潰す事で決着をつけるということだそうだ。

そのグループの主催するパーティのラストに関係者の目の前でそれを行うらしい。

オレはその護衛をしろというわけだ。

オレ1人で魅夜の護衛ねえ…。

魅夜1人でなんかできそうな気がするんだけど。

てゆーかオレ一応殺し屋なんだけど。

「一応うちは殺し屋ですよ？」

護衛はやっぱり向いてないかと。

この前も3人いて結局未遂にはできませんでしたし」

「ですが月詠様直の頼みですしね…」

まあ………いいか。

「わかりました。」

ただ小型のナイフと銃が欲しいんですけど頼めますか。

さすがに剣は長くて護衛時には扱いにくいので」

人混みで長物振り回すわけにもいかないしな。

練習もしてきた。

「わかりました。用意します」

〽本部・食堂〽

「というわけでオレ1人での任務だ」

「へえ…珍しいね」

「まあそろそろ一人立ちしろって事だろ。」

いつまで経っても3人1組じゃあ効率が悪いしな」

「はあ…」

珍しく溜息をつく奏。

「どうした？」

「いえ…私たちの支援無しでは兄さんの任務成功はほぼありえませ
ん。」

兄さんが泣いて帰ってくるのが目に見えて…」

「不吉な事を言うな」

そろそろ時間か。

「じゃあ後は頼むぞ」

「うん」

く控え室く

「さて、魔法を使ってないからって油断しないでよ」

オレが背を向けているカーテンの向こうで魅夜は衣装を着ている。

「当たり前だ」

魔法がなくても殺すことは可能だ。

「信頼してるからね」

「ああ」

くパーティ会場く

つまらないな…。

目の前で魅夜がどっかのお偉いさんと談笑している。

オレはその隣で周囲を警戒しているわけだ。

―暇?―

魅夜が念話で話しかけてくる。

—いや、仕事だしな—

—そう—

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

さて、とうとう盛り上がるわけもないメインイベントの始まりだ。

魅夜が壇上に立ち、オレがその隣の1歩後ろにいる。

ここからはよく会場が見渡せるが、誰もがいい顔はしてない。

脅迫してきそうなヤツはいくらでもいる。

演壇の上にはチップがあり、魅夜の手にはトンカチ。

そしてそれを大きく映すカメラもある。

「では…破壊します！」

宣言し、右手を振り上げる。

その時、オレは魅夜が今まさに狙われている事に気がついた。

「っ！」

「ぎゃっ！」

何も考えず、オレは魅夜の体を押し倒した。

魅夜の頭辺りの高さを銃弾が通った。

銃弾はその後ろの壁に当たった。

すぐ放たれたであろう場所を見ると、

開けられた窓の隙間から何かが出ていくのが見えた。

「っやろ！」

「待って！」

追おうとするオレの手首を魅夜が掴む。

「今のあなたは護衛！」

私がもう狙われてない保障はないのよ！

だからここにいて！」

眉をひそめて心の中で舌打ちをする。

「わかった……」

結局、その後魅夜が狙われることはなかったが、

敵……魅夜に撃ってきた暗殺者は捕まらなかった。

く控え室く

現在開始前と同じような状況になっている。

「ありがとう。」

自分の事で精一杯だったから助かったよ」

「ああ…」

柰音は感謝しているようだが、オレは不機嫌だった。

魅夜を守ることはできたが、相手を捕まえることができなかった。

元々オレは殺し屋だからその辺が関係しているんだろう。

守るための技術もまだまだだし、これは鍛える必要があるな。

「うしっ!」

「急にどうしたの?」

「いや、別に…」

今回は魅夜が守れた、任務達成できたしOKということにしよう。

第31話 「魅夜の依頼」 (後書き)

暗殺者との決着は果たしてあるのか!???
感想&評価待ってます

第32話 「天照様の歌」

本部は一応戦う事を第一に考えて作られた建物だが、

実はここで暮らす者のために娯楽関係の施設もちゃんとある。

オレたちはその中の音楽館に来ていた。

ひよんな事で足を運んだ音楽館には大勢の人がいた。

目的はここで行われる天照様のコンサートだ。

企画したのは久遠。

久遠に招待：というか無理矢理チケットを買わされて任務後にやってきたわけだ。

人は100人は確実にいそうだ。

もうコンサートは始まっていた。

自由席：というか椅子がないから全員立ち見だ。

だから前の方に人数が密集している。

声は後ろの方でも十分聴けたのでオレたちは一番後ろに立つ。

歌は綺麗だった……と思う。

とにかく、終わった直後なのにもう一度聴いてみたいと思った。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「いやぁ儲かってしょうがないわ」

全員退けるとそこには天照様と札束を数える久遠がいた。

「久遠、私を金儲けの道具にするのは止めてくれませんか？」

「いいじゃない。」

戦いに疲れた戦士は癒やされ、私はその儲けた金で研究して癒される。

一石二鳥じゃない」

「私は得をしていないような気がするんですが…」

「まあまあ、あなただって人の役に立って嬉しいでしょ？」

「前はそんなこと言われて渋々承諾しましたがど…やっぱりおかしいんじゃない…」

「…………よし、まあまあね。」

こんだけ儲かるなら定期的に開催しようかしら」

「久遠聞いてますか!？」

「聞いてないわよ。」

……ってあんたたちまだいたの？」

顔を上げてオレたちを見る。

ようやく気づいたのか。

「歌、うまいんですね」

柰音が天照様に声をかける。

「いやあ…それほど——」

「それほどでもないわよ」

天照様が謙遜の言葉を言っている最中に久遠が割り込む。

「歌がうまくなくても崇拜…というか…アイドル的なところがあるからね。」

顔が良けりゃ少々下手でも問題ないわよ。

事実人も金も結構集まったしね。

ところでどう？歌を聴いて何か感じた？」

どうということだ？

「まあ……綺麗だなあって」

「もう1回聴いてみたいと思った？」

「そうだな…思った」

2度と聴きたくないなんて言えるわけがない。

実際は聴いてみたいと思ったけどな。

「本当？社交辞令なんてしないでいいわよ」

そういう事は久遠も考えているようだ。

「本当だ」

「祢音と奏は？」

「わたしも思いました」

「私もです」

2人も同じように答えた。

「よし、成功ね」

なぜか久遠はニヤリとする。

「成功？？」

「この歌、もう一度聴きたいと思うように精神を操作するのよ。」

歌によっては滅茶苦茶な事はできないけど

自分の中にある感情を増幅させるとかその程度の事ができる」

「精神を操作!？」

「リピーターを増やすためよ。」

これでさらに金が入ってくるわけ」

そうしてニヤリと笑う。

こいつ…。

「そんなに金を集めるなんてどうしたんだ？」

「ん…? まあ…物を造ってるとね、金がかかるのよ。」

一応いくらかはこの組織から支給されるんだけど、失敗すると全くお金が入らない。

ただの金と時間の浪費」

ふーん。

賭け的な事があるんだろうな。

「あ、CD化すればさらに儲かるかも…」

「絶・対・に・止めてください！」

とんでもない構想…いや、野望に天照様は強く反対した。

「冗談よ。さすがにそこまではしないわ。」

さあて…さっそくこれを使って何か造ろうかしらね。

じゃ、私はさよならよ。バイバイ」

久遠は札束を持ち、満足気に去った。

「まったく、久遠は…。」

皆さん来て下さってありがとうございます」

「いい歌でしたよ。」

精神が操作されてたって知った時は驚きましたけど」

祢音が天照様へ感想を言うと天照様は小さく笑い、そして溜息を吐いた。

「本当に申し訳ないです。」

どうせならちゃんとした歌が歌いたかったです」

「今度聴かせてもらっていいですか？」

あの…天照様がよければ…ですけど…」

祢音が控え目に言うが天照様はさっきより笑って答える。

「はい、もちろん。」

今度は何もなしで」

天照様との小さな約束をしてオレたちは音楽館を去った。

第32話 「天照様の歌」 (後書き)

現状としては本編では2作執筆中

1つはバトル描写の問題で停止中。

バトル描写が単純でうまく書けません。

1つは中編としてコラボを書き始めようかと：

1通り完成したら投稿していきます。

18禁の方ですが全4か5作中、仮ですが2作作りました。

せっかく作ったんで全部完成してから投稿します

いつになるかわかりませんがw

感想&評価お待ちしてます。

第33話 「詩」(前書き)

遊戯曲の新作と18禁版の同時執筆で非常に時間がかかりましたがようやく両方完成しました。

お久しぶりです。そしてクロスオーバーです。

クロスオーバーの話はクロスされる作品をWikipediaや公式HPなどで調べてから見て下さい。

中で一応説明はしていますが…。

何話かに続く話の場合、全て書き終えてから投稿してしますので時間はかかりましたがちゃんと毎週更新できますのでその所よろしくお願いします。

長くなりましたが、どうぞ楽しんでってください。

第33話 「詩」

（隊長の間）

「今回の任務の説明はこの方にしてもらいます」

「や、久しぶりだね」

突然目の前に現れたモニタにはフェイトさんが映っていた。

「お久しぶりです」

「今日は仕事で連絡しました。」

捕まえてきてほしい人がいるんだけど…」

新たにモニタが現れ、2人の男が映る。

まあ見るからに悪人面した2人だ。

名前はベレッタとダッジ。

「この2人はこっちで事件を起こして逃げ回っていて、

追い詰めたんですけどある施設の装置を使って異世界へ逃げられた」

「異世界…ですか」

次の任務の場所はまた異世界。

そこに逃げ込んだ男2人を捕まえるという事だな。

「これがおそらく逃げた世界」

さらにモニタが現れる。

どうやら「詩」^{うた}が魔法になる世界らしい。

天照様や久遠が以前歌ってたような感じなのか？

そして地上が無く、

雲海の中から天まで届く大きな塔を囲むように空飛ぶ大地があるそう
うだ。

詩ねえ…。

実にタイムリーな話だ。

「そっちでなんとかできないんですか？」

「うーん。異世界へ移動となると結構時間がかかる。

仕事もまだたくさんあるし、

そっちの世界からの方が近いから頼みたいな。

ああ、もちろんちゃんとお金は払いますから」

「ちなみに組織としてはこの仕事を引き受けます」

と隊長が言う。

ならオレたちに断る権利はない。

「オレたちは組織の意向に従います」

「ありがとうございます。」

捕まえた後、連絡してくだされば引き取りに行きますので。

ああ、あと殺すのはできるだけ控えてください。

殺し屋のみなさんに言うのもおかしい話なんですが…。

では、後は頼みます」

フェイトさんの映るモニタが消えるのと同時に一斉に他のモニタも消えた。

「3人で行くほどでもないので分散しようと思います。」

2人ぐらいがベストなんですが…」

「じゃ、私はパスします」

奏がすぐに居残りを希望した。

「そうですか。」

じゃあ無月と柰音の2人で――」

「話は聞かせてもらったわ!!」

突然後ろの扉が勢いよく開いた。

「詩が魔法になる…おもしろいじゃない。

そんなのアカシャだけだと思ってたけどあるものね。

私も行くわ」

「……………」

いきなりの登場&宣言にしばらくポカンとしていたオレたちだが

「久遠様の希望なら仕方ないですね。

では無月、柰音、久遠様の3人でお願いします」

「わかりました」

く廊下く

「じゃ、居残りよろしく」

「はい。せいぜい頑張ってきてください」

そしてオレと柰音、久遠は異世界へ転移した。

く柰音SIDEく

『異世界・アルトネリコ』

くメタ・ファルス／ラクシャクく

「つと、着いた着いた」

わたしたちが辿り着いたこの場所。

見渡すとなかなか発展している世界みたいで、

所々メカメカしい物が見える。

とは言っても日本ほど発展しているわけじゃあないみたい。

家はコンクリートでできてる感じはしない。

足場は鉄板？

とにかく、自然のものが見当たらない。

でも人の服装はどこかの民族衣装のような感じ。

そんなこの人たちの視線はわたしたちへ向いています。

出てきた場所が悪く、人の多い場所。

この世界のものとは思えない服装をしたわたしたちが

どこからともなく現れたなら驚くだろうね。

とか思ってる間に武装した人たちが近づいてきます。

「逃げるか…」

お兄ちゃんはそう言うわたしと久遠様の手を引っ張って後ろへ走り出しました。

確かに捕まるのも、戦って騒ぎにするのもやっかいだからね。

「ねえ！追いかけてくるよ！」

後ろを見ると騎士のような武装をした男の人2人と武装してない女の子1人。

「…仕方ないな」

どうやら戦うみたい。

ここなら人も少ないし、いいね。

振り返ってわたしとお兄ちゃんが武器を取り出すと向こうも戦闘態勢をとりました。

相手の武器はランスのような物。

「♪♪♪♪」

後ろにいる女の人が詩を謳い始めました。

すると女の頭上に結構な大きさの魔法の球が現れた。

これが詩が魔法になるって事みたい。

「さあて、どうするか」

避けるしかないでしょ。

今にも放とうという瞬間、突然向こうの人たちの後ろで爆発が起きて、

こっちへ吹っ飛んできました。

「こっちよー!」

そんな声と一緒に向こうに女の子の姿が見えました。

「…どうするの?」

「ついてっってみるか」

わたしたちはその女の子の言う通りについていく事にしました。

第34話 「レーヴァテイル」

「????の家」

そのまま女の子についていくと家へ連れて行かれました。

「助かったよ。ありがとう」

まずはお礼。

わたしたちでなんとかできたかもしれないけど、

助けてくれたんだからお礼は言わなくっちゃね。

「いいいいいよ。わたし大鐘堂嫌いだし。

はい、お茶」

大鐘堂とはこの世界の政府機関の事。

なんか神様の声が聞こえる御子がいるらしいの。

そう事前にもらった資料に書いてあった。

「ありがとう」

わたしとお兄ちゃんは用意された椅子に座ってお茶を飲む。

久遠様は珍しそうに部屋を物色してます。

「わたしは藍紗^{アイシャ}。あなたたちは？」

「オレは如月無月」

「わたしは如月柊音。

それであの人が久遠様」

「よろしく。

それにしてもあなたたち、見たことない服着てるわね。

どこの出身なの？」

「あーまあ遠い所だな」

「ふーん」

お兄ちゃんの答えに興味なさげな返事。

「その服装といい、何かワケありのようね。

でも余計な詮索はしないでおくわ。興味ないし」

藍紗ちゃんには完全でなくても少しは素性がバレちゃったみたい。

まあ…しょうがないのかな。

「ねえ…これいい首飾りね」

少し離れた所からの声。

久遠様が大切そうに飾られている首飾りを指さして言います。

その首飾りは高そうな宝石がついてるわけじゃなくて

シンプルなものだけどわたしもいい首飾りだと思った。

「ああ、それね…。

お父さんとお母さんに買ってもらった首飾り。

店の人にわざわざ作ってもらって、妹とおそろいにしたの」

オーダーメイドってヤツかな。

「妹がいるの？」

「うん。いたの。」

名前は蒼紗^{ソウシャ}」

その言い方を聞いてわたしはしまったと思った。

「…ごめん」

「謝る必要なんかないよ。」

知らなかったんだし、あの子はIPDだったからね。

2年前発症して大鐘堂に連れてかれた。

だから嫌いなもの。

IPD、知ってる？」

「知ってる」

IPDって言うのはレーヴァテイルだけが発症する感染症。

あ、レーヴァテイルっていうのは藍紗みたいに詩を謳う事で魔法が使える女の子の事。

見た目は人間なんだけど魔法が使えたり延命剤が必要な所とかが違う。

それで、IPDは精神を蝕んで詩魔法を暴発させる。

効果的な対処はなし。

気絶させたら安定するらしいんだけど、すぐちよつとした事で発症する。

だから気絶させてどこかに隔離するしかない。

連鎖発症もするから大鐘堂が保護する役割を持ってる。

こんな所だったかな。

「蒼紗は連れてかれてその後どうなったかわからない。

噂じゃあどっかに集められてるとか殺されてるとか…」

ドンドンドン

突然荒々しくドアがノックされる。

「大鐘堂の者だ！」

大鐘堂…というとき追っかけてきた人たちね。

「奥の方に隠れてて。

ちょっと待ってください！」

「入るぞ」

藍紗の言葉を見無視し、ドアが開けられた。

「げ…」

今、まさに隠れようとした瞬間を見られちゃった。

「やはり隠していたか。

捕えろ！」

わいわいの中で追いかけたり追いかけられたり、まるで鬼ごっこ状態。

「外へ出るぞ！」

お兄ちゃんの指示通り、わたしたちは外に出ることにしました。

く藍紗の家の前く

今わたしたちは対峙しています。

どうやら戦いは免れないみたい。

久遠様は一番後ろで腕を組みながら見物してます。

「どうせあなたたち、レーヴァテイルと一緒に戦いの仕方知らないでしょ？」

わたしたちレーヴァテイルは魔法は使えるけど身体能力は普通の人間。

それに詩魔法使ってる間は無防備だからちゃんと護りながら戦ってね。

戦いは上手いの？」

「専門職だ」

お兄ちゃんが剣を出しながら答える。

「なら頼らせてもらおうわよ」

「詩魔法って強力なんだよね？」

今度はわたしが藍紗ちゃんに訊いてみる。

「まあ使うものにもよるけど、騎士を吹っ飛ばすぐらい余裕よ」

「じゃあわたしたちも頼らせてもらおうかな」

「頼ってちょうだい。」

今から使うのは青魔法、あなたたちを護るための詩。

防御への魔法だから少々の事では傷つかないわ。

思い切って戦って」

「ありがとう」

「行くわよ…。」

♪~~~~♪~~~~♪~~~~

藍紗ちゃんが謳い始めるとわたしたちを優しい光が覆う。

「♪~~~~」

向こうのレーヴァテイルも謳い始めた。

さっきと同じ魔法弾みたい。

騎士が迫ってくる。

ランス相手なんてやったことないからなあ。

ダァン

銃を撃つと鎧に当たって弾かれちゃった。

鎧があると狙いにくいし、なかなかの強度ね。

騎士はわたしの目の前まで迫ると突きを放ってくる。

「つと…」

突きがかわされたとなると次々と突きを繰り出してくる。

動きはそんなに速くないから直撃はないと思うけど…。

いきなり騎士はわたしとの距離を作る。

様子見？

「祢音！魔法だ！」

え？

上を見ると魔法弾がわたしめがけて放たれたところだった。

「きゃあっ！」

なんとか直撃はなかったけど

魔法弾が地面に当たった時に爆発して、それは当たっちゃった。

「…あれ？」

なんともないや」

これが魔法の力？

シールドやバリアを張る手間が省けていいや。

向こうのレーヴァテイルは2発目を準備中。

先にレーヴァテイルとなんとかしないとね。

—お兄ちゃん、騎士2人はわたしが足止めするから。

レーヴァテイルをお願い—

—わかった—

狙うは足。

すねの辺りが丁度あいてる。

そこを狙えば…。

お兄ちゃんがレーヴァテイルに向かって走り出す。

騎士の注意がお兄ちゃんへ向いた瞬間を狙って、

わたしは銃を放つ。

弾丸はなんの邪魔もなく2人の騎士のすねに。

跪いた騎士にお兄ちゃんは止められない。

レーヴァテイルはお兄ちゃんに殴られる瞬間驚いた顔をしてた。

お腹を殴られたレーヴァテイルは何度か咳をする。

その後、藍紗ちゃんの家にあった縄で3人を縛りあげる。

「今のうちに逃げるぞ！」

殺すことができないならそれしかないよね。

「ちょっと待って！」

家に取りに行きたいものがあるから行っている？」

「ああ……とそうだ、どうせなら記憶消去するか」

「そうだね」

お兄ちゃんとわたしは1人1人額に手を当てます。

手を当てられた騎士たちは気を失ってしまいました。

「ねえ…記憶を消せるなら

さっきの周りにいたヤツらもやればよかったのに」

「記憶消去の魔法は多くの魔力を消費する上、

自分の消したい部分だけを消すだけの集中力が必要。

多人数向きじゃない」

「なら全部消しちゃえばいいじゃない？」

「そうすればその分多くの魔力を消費する。

最小限に留めなきゃならねえんだ。

多分2度と来ないだろうし、

よっぽどの事がない限りしない」

そうしてるとすぐに藍紗ちゃんは戻ってきた。

そうしてわたしたちはこの場から離れる事にしました。

「こうして走ってるけど…逃げ場所の当てはあるの？」

「ない」

久遠様の質問にお兄ちゃんはきっぱりと答えた。

しっかりしてよね…。

わたしが言えた事じゃないかもしれないけど。

「ならエナに行きましょう。

あそこなら大鐘堂も手が出しにくいはずよ」

第34話 「レーヴァテイル」 (後書き)

感想&評価お待ちしております。

第35話 「友達」

くエナく

「ねえ、どうしてここがいいの？」

「何も知らない外来人に説明すると、

ここには大鐘堂に反抗してる神聖政府軍の本部があるのよ。

それに変な登場の仕方しない限り怪しまれないでしょ」

「…それにしても巻き込んでしまったすまなかったな。

お前までお尋ね者だ」

「いいわよ。嫌いなヤツに嫌われたってどうってことないわ」

「……ねえ…ここ寄ってもいい？」

話が途切れた所で久遠様が言いました。

「薬屋ですか？」

久遠様の視線の先には「薬」の看板がありました。

「どっちにしろ入るけど」

久遠様はわたしたちの意見を聞かず、さっさと入ってしまいました。

「仕方ねえな」

く薬屋く

「いらっしやーい。」

あら？初めてのお客さんね。

どうぞどうぞ」

中には白い髪の女の人嬉しそうにわたしたちを迎えてくれました。

「これ…何？」

久遠様は棚に乗っているいくつもの薬のビンの1つを持って言いましました。

「それは風邪薬よ。」

飲むと1時間で完治するわ。

ただ…ひどい下痢や吐き気に襲われるけどね」

うわ…そんなの売り物にしてるの…？

「もっとおもしろそうなのはないの？」

「それじゃあ…これはどうかしら」

あれ？

藍紗ちゃんがいらない…。

外かな…。

く薬屋前く

「何してるの？」

藍紗ちゃんは空にあの首飾りを掲げて眺めているように見えた。

「見ての通り首飾り見てるの。」

これはね…お父さんとお母さんの形見でもあるの」

藍紗ちゃんは突然話し始めるけど独り言みたいな感じがした。

「2人ともIPD暴走に巻き込まれて死んだの。」

私はたまたま出かけてたから無事だったんだけど

家に帰った時は驚いたよ。

家がガレキの山になってて。

今住んでるのは空き家だったのを使わせてもらってる家。

蒼紗も連れて行かれたけど

どっかに隔離されてるなら

どこまでも捜しに行きたい。

何かあっても悲しむ人なんていないしね。

どこまでも深い所まで行ける」

「悲しむ人がいない…？

友達は？」

「友達はいないわ。

もしわたしが発症した時傍にいたら危ないもの。

私はずっと独り…」

寂しそう…。

それは藍紗ちゃんの声を聞けば、顔を見ればすぐにわかる。

「じゃあわたしが友達になるよ」

「え？あなたが…？」

藍紗ちゃんは目を見開いてわたしを見る。

「わたしならそんな簡単にケガしないよ。」

それに一緒に捜してあげるよ。

わたしたちの目的も人捜しだしね。

レーヴァテイルは体は弱い普通の女の子なんでしょ？

わたしが助けてあげるよ」

「でも…あなたの得になることなんて…」

「友達は自分の損得だけで動くわけじゃないよ。」

藍紗ちゃんだってそうでしょ？

それに、『あなた』じゃなくて『柊音』」

わたしが指を指すと藍紗ちゃんはちよつと仰け反る。

「…わかった、柊音」

「薬屋に戻らない？」

「ん」

薬屋

「で、この2人……と、これと同じ首飾りをした女の子知らないか？」

お兄ちゃんが藍紗ちゃんとスピカさん（お店の店主です）に2人の写真と首飾りを見せます。

「見たことないわね」

「私も」

2人とも知らないみたい。

「そうか……」

「エナとラクシャクにはいないかもしれないわね。」

となると……」

バサッ

薬屋の大きなのれんを押しつけて誰か入ってきました。

「スピカ……ちょっと頼み事が……て誰？」

その人は久遠様のような黒い髪を持っていたけど

身長の低い女の子でした。

「丁度いいところに来たわね、ジャクリ。」

この2人、とこれとおなじ首飾りをした女の子、見たことない?」

スピカさんはお兄ちゃんの持っている写真をひったくると

入ってきた女の子に見せました。

「ん?」

首飾りは知らないけど……………このトサカ男は……………パスタリアで見たわね。

妙に挙動不審だったし、変な髪だったからなんとなく覚えてるわ」

「ホントか!?!」

「こいつら誰?」

「まあお客さんね。」

この2人を搜してるみたい」

「そ。用が済んだならさっさと出てってちょうだい。」

2人で話す事があるから」

わたしたちはその女の子に気圧されてか、

スピカさんとその子にお礼を言って出て行くことにしました。

第35話 「友達」 (後書き)

後3話分あります。

これが終わった後も一応ネタはあります。

ですが中身が書けない状態…。

できれば早目に書き終えたいものです。

感想&評価お待ちしております。

第36話 「兄妹と姉妹」 (前書き)

アルトネリコ3まだかなあゝ。

第36話 「兄妹と姉妹」

〽藥屋前〽

「じゃあ次の目的地はパスタリアって所ね。

どうやって行くの？」

久遠様は藍紗ちゃんに視線を移します。

「パスタリアへは地では続いていないわ。

行くなら空港から。

でもパスタリアは人口規制されているから

行けるのは『ネロプレート』を持ってる人だけ。

ネロプレートは滅多な理由がないともらえないわ」

「そうか……さて…どうしたものか」

転送魔法は自分が知ってる場所じゃないと無理だしねえ。

「うーん…」

結構長い間考え続けるわたしたち。

「ネロプレート、私が人数分用意しましょうか？」

声の方を向くと不敵な笑みのスピカさんと

不快そうなジャクリちゃんがこっちを見ていました。

「できるのか!？」

「ええ、多分。」

久遠から良い物もらったし、対価としては十分よ」

「実際動くのは私だけど」

「ジャクリちゃんはいいの？」

「ジャクリ……『ちゃん』？」

私はあなたたちよりずっと年上よ!」

「す…すいません」

うわっ…びっくりした。

すごいプレッシャー…。

「用意するからしばらく待ってて」

と言い残してジャクリさんはどこかへ行ってしまった。

「待ってる間、うちでお茶でもどう？」

「いただきます」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「はい、持ってきたわよ」

わたしたちが薬屋のど真ん中でお茶を飲んでいると

ジャクリさんが出て行った時と同じ表情で返ってきました

「あ、ありがとうございます」

突き出された割符を恐る恐る受け取るわたし。

「スピカ、ちゃんと持ってきたんだから例の件忘れないでよ」

「はいはい」

ジャクリさんはそう言うときさっさと出て行ってしまいました。

「あ、これありがとうございます」

「いいわよ。」

さっきも言ったけど、久遠に良い物もらったし」

「何もらったんですか？」

貴重なものらしいこのネロプレートを4枚も…。

一体何を渡したのか気になるよ…。

「ふふ…聞きたい？」

「や、やっぱりやめておきます」

あまりの不気味な笑みにまたもや気圧されてしまいました。

2人とも恐ろしい人みたい…。

くパスタリアく

スピカさん、ジャクリさんのおかげで何事もなくパスタリアへ行くことができました。

「これからどうしよう？」

「まあここにいてんなら4人もいるし、

別れて探す方がいい…だろうな」

「じゃあわたしと藍紗ちゃんで見つけよう」

それが一番いいでしょ。

「ならオレと久遠か…。

見つけたら念話で知らせる。いいな?」

「うん。迷子にならないでよ」

「それはこっちのセリフだ」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「パスタリアって他の町とは違うよねえ」

ラクシャクやエナと違って建物とかが発展してる気がする。

「…ねえ」

「ん?」

わたしが周りの風景を見渡していると後ろから藍紗ちゃんに呼ばれた。

「兄がいるってどんな感じ?」

「うーん、そうだなあ…」

足を止めて宙に視線を向けてちよつと考える。

「頼れる…かなあ…。

女のわたしじゃ難しい事もあるしね。

…お兄ちゃんの場合はいじわるがすぎるけど」

「ふーん。2人兄妹？」

「ううん。あと1人妹がいるよ。

なかなか他人には愛想がなくてね、

もうちょっと表情豊かな子でもいいんだけどなあ…。

蒼紗ちゃんはどんな子なの？」

「元気な子。これ以外当てはまらないね。

姉の私がついていけないほどよく動く時もあったなあ。

柊音とは気が合いそうな気がする」

「そうかあ…一度会ってみたい。

パスタリアの大鐘堂の施設のどこかにいるはずだよね！」

「うん。隔離されてるなら多分」

——柊音！見つけたぞ！——

突然お兄ちゃんからの念話が来る。

―今空を見ろ！1発だけ魔法を放つ！

後は一定間隔で放つからそれを頼りに来い―

―わかった―

そう答えてすぐに空をぐるぐると見渡す。

するとお兄ちゃんが放ったはずの炎の球が見えた。

あっちね。

「藍紗ちゃん、行くよ！」

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

「お兄ちゃん！」

数分後、お兄ちゃんたちと合流。

目の前には特徴的な黄色いトサカ頭が1つ。

名前は確かベレッタ。

でかい体のわりに足は速い。

久遠様や藍紗ちゃんはバテ始めてる。

するとベレッタは公園のとある長い階段を降りて行きました。

わたしたちも後を追います。

「ここは…?」

地下のようでしたが今まで見た街並みからは

想像できないかなり機械的な地下でした。

工場の中のような感じかな…。

ベレッタはとにかく逃げます。

何度も来てるのかな？

追い続けるとベレッタはあるエレベーターに乗って

下へ降りて行ってしまいました。

左右にはいくつかエレベーターがあります。

「どれで行く!？」

「私はこのまま待ってこのエレベーターに乗った方がいいと思うわ。

私たちはここの構造を知らない。

もし全く違う所に行ったらどうするの?」

わたしも久遠様と同じ意見かな。

「ちっ、仕方ねえな」

しばらく待つとエレベーターが上がってきました。

「エレベーター内」

乗ってみてわかったんだけどこのエレベーターかなり広い。

日本のどこにもなかったぐらい。

何か大きな物を運んでたのかな？

「ねえ祢音：頼みがあるんだけど…」

「何…？」

第36話 「兄妹と姉妹」 (後書き)

感想&評価&話の案お待ちしています。

第37話 「VSベレッタ」

「……?」

エレベーターは勝手に止まり、わたしたちは外に出ました。

「え?」

するとそこにはパスタリアとかで見たような空が見えた。

でも家はボロボロで人が住めるような場所には見えない…。

「ねえ、ここどこ?」

そんな所でも久遠様は気後れせず、近くにいた女の子に話を訊きます。

「ここはスラムですよ。」

大鐘堂から逃げてきたIPDを発症したレーヴァテイルがここに集まっています」

「!」

もしかしたら…」

それを聞いた瞬間、藍紗ちゃんはすごく驚いてその女の子に訊きます。

「これと同じネックレスをした小さな子供が来ませんでしたか!?!」

今度は女の子が藍紗ちゃんの迫力に驚いていましたが

「来ましたよ。ここ何日かは見てないんだけど。

元気な子だったから覚えてるわ」

とちゃんと答えてくれました。

「ホントですか!?!」

「ええ」

「柰音!」

振り返ると藍紗ちゃんは今までで一番晴れ晴れした顔をしてた。

そんな顔を見てるとわたしも嬉しくなる。

「ベレッタ!」

突然お兄ちゃんが声を上げる。

お兄ちゃんの見てる先を見るとベレッタがこっちの様子を見ていました。

物陰に隠れながら見てるみたいだけど体が大きいから結構目立ってる。

蒼紗ちゃんを捜すのは後回しになりそう…。

ベレッタはもう逃げる気はないみたいで、

見つかったと気づくと大人しく出てきました。

でも捕まる気はないみたい。

手に斧…？が握られてるからね。

「さっさと捕まえるか」

お兄ちゃんは剣を取り出すと正面から走って行きました。

ベレッタは斧を振り上げて待ち構えます。

振り下ろされる瞬間にお兄ちゃんはシールドを張りました。

それで弾いてバツサリいくつもりかな…？

今回の任務は捕獲…いや、逮捕なんだけど…。

でも結局お兄ちゃんはバツサリいかなかった。

それ以前に弾けなかった。

「っ…！」

「お兄ちゃん！」

弾いたつもりだったんだろぅけど、

なんか……シールドも一緒に切られた？ みたいになってた。

シールドが切られた事に気づいてすぐに退いたから

掌真つ二つという事にはならなかつたけど

戻ってきたお兄ちゃんちゃんの掌は真つ赤になって、血が流れてる。

「大丈夫！」

「まあ……命に別条はない、って感じだな。」

ただ……痛いけど」

「任せて。」

藍紗ちゃんが謳い始めるとお兄ちゃんの傷はみるみるうちに消えま
した。

「ありがとな」

「いやいや、これが私の仕事だし」

治癒魔法、か……。○

覚えようとしたけど素質も関係してるらしくて

わたしには覚えられなかったんだよねえ…。

「どうやらアレは魔力すら切る事ができるようね」

今のやりとりを見ずに得意げに立っている

ベレッタを見ている久遠様が言いました。

「でも私の見立てでは正面だけ。」

側面からの魔法には意味がないと思うわ」

「なら祢音…多分真正面から突っ込めばまた振り下ろしてくると思う。」

オレが剣で受け止めておく間に横から撃って弾いてくれ。

あいつからは魔力を感じられない。

アレさえなけりゃあ大丈夫だろ」

「普通の銃弾じゃできないだろうから魔法弾になるけどいい?」

「ああ、構わない。」

あと、藍紗一応オレに防御力アップの魔法をかけてくれ」

「わかった」

「じゃあ行くぞ！」

お兄ちゃんはまた突っ込みます。

わたしはというと横へ走る。

藍紗ちゃんは謳って、久遠様は見てるだけ…。

上司に言うのもなんだけど…働いて欲しいなあ…。

お兄ちゃんの予想通り、ベレッタは振り上げ、振り下ろします。

鈍い金属音を立てて2人の武器がぶつかり合います。

ベレッタはこのまま押し込めば勝てると思ってるみたいで

武器を離そうとしません。

今のうち…。

銃に魔力を込め始めます。

弾くんだから爆発しなきゃならないよね。

あまり強すぎるとお兄ちゃんも巻き込むかもしれないし…。

でもお兄ちゃんなら避けるかな…？

……ああもう！弾くの優先！！

斧に狙いを定めて魔法弾を撃ちました。

ボカンと斧に命中。

お兄ちゃんは撃った魔法弾の強さに気づいて避けてくれた。

顔から察すると後で怒られそうだけど…。

ま、見事に吹っ飛んだからOKOK♪

唯一の武器を失ったベレッタは目を丸くして驚いています。

そこへお兄ちゃんの剣がベレッタを脅します。

「大人しく捕まれ。死にたくはないだろ？」

これで任務も終わり。

あとは蒼紗ちゃんを捜すだけだね。

第37話 「VSベレッタ」 (後書き)

アルトネリコ「2」ならば「1」があるわけですが、
ですが同じ展開にはできないので、もう…考え中です。
感想&評価&話の案、お待ちしております。

第38話 「I. P. D.」 (前書き)

遅くなつてすみません。

第38話 「I. P. D.」

「ま、待て！」

いいものやるから見逃してくれ」

お兄ちゃんが様子を見ているとベレッタはチャンスがあると思ったみたいで

懐から首飾りを取り出しました。

「!？」

多分わたしたち4人全員が驚いたと思う。

だって差し出された首飾りは藍紗ちゃんの首飾りと同じものだったから。

藍紗ちゃんは確かオーダーメイドだって言ってたはず。

ということはそれは蒼紗ちゃんのもの。

「それ…どうしたの…？」

怒りをこらえて(?) 藍紗ちゃんが訊きます。

「ああ…ここにいたヤツが持ってたんだ！」

盗賊のオレの目から見てもいいものだ！」

ベレッタは必死に言葉を繋ぐ。

「持ってた子は？」

「あ、あんまり暴れるんで…殺しちゃった」

ばか…。

そんな事わざわざ言う必要ないのに…。

さっきから話すのに必死みたいだから

つい口から出てしまったのかもしれないけど…。

「その殺した子は…私の妹よ！」

「っ！」

急に空気が変わった！？

「オマエ…シネエエエエ！！！」

藍紗ちゃんが狂ったように叫んで詩を謳い始めました。

でも今まで聴いてきたものは違う。

これは…？

「IPD暴走だわ！」

近くにいたレーヴァテイルの子が叫ぶ。

これがIPD暴走…。

「シネエ!!」

「きゃあっ!」

ベレッタに向かって魔法が放たれました。

直撃してないのに近くにいるだけですごい風が来る。

「ちっ」

放たれた魔法弾とお兄ちゃんとベレッタの間で火花が散ってる所を見ると

お兄ちゃんがシールドかバリアを張ってるみたい。

助けにいかなきゃ…。

あの魔法を完全に防ぐには…。

「サラ…お願い!」

くサラSIDEく

「無月さん！」

「ん？…ああ、サラ…だっけか？」

無月さんはちらっと私を見て再び前を向きます。

「はい。防御は任せて下さい」

「わかった。頼むぞ」

柰音さんと作った新しい魔法を使う時が来たようですね。

『アイギスの楯』

私の前に魔力で楯を作る。

普段魔術師が使うシールドとは違う。

さらに硬度を増し、魔力からの防御に特化させた楯。

楯による防御で魔法弾の魔力が減っていき、最後に消滅しました。

「グレイプニルで縛れないか！？」

「縛っても攻撃を防げないと思います。

あの魔法は謳う事で発せられますから」

「ちっ、暴走はどうすれば収まる！？」

「気絶よ。」

藍紗をどうにかして気絶させるしかないわ」

これは久遠様の提案。

「なら背後に回れたらOKだ。

首に1発かましてやる」

「ですがどうやって近づくんですか？

藍紗さんは移動することはないようですが魔法がとても強力です」

「まあなんとかやってやるさ」

無月さんはやる気の様ですが…。

「柰音さん、どうですか？—

私は柰音さんに呼びかける。

—いいと思う—

—ですが藍紗さんとの約束は…？—

—…………できれば破りたいよ—

—わかりました。ではそのように—

「無月さん、これを使ってください」

私は真っ白な銃を無月さんへ差し出す。

「効果…あるのか？」

「わかりません。」

ですが可能性は十分あります。

ただ撃つ時はできるだけ近くで撃ってください。

離れると効果が薄くなりますから」

「そうか。わかった」

「防御は私に任せて、

無月さんは攻撃だけを考えて下さい」

「ああ。任せる」

無月さんは真っ直ぐ走り出す。

任せられた以上、全力で守らなければなりません。

私はいつでもすぐに守れるように魔力を高めます。

藍紗さんから力を感じます。

来る…。

無月さんの前に楯を…いえ、範囲攻撃にも備え、バリアを張る。

もちろん私たちの前にもバリアを張る。

藍紗さんが放った攻撃は範囲攻撃ではありませんでしたが、

炎による強力な攻撃。

強力でも私なら問題はない。

攻撃が強力な分、次の攻撃までの間隔が長いはず。

無月さん、今のうちに…。

「くらえっ！」

銃声なく銃弾は放たれ、見事当たりました。

藍紗さんは気を失い、その場に仰向けで倒れました。

では、私の役目はここまでですね…。

そして私は祢音さんと交代しました。

（称音SIDE）

サラに交代してもらおうと一気に疲れが出てきた。

貧血みたいな感じ。

久しぶりだったからかな。

膝をつくとお兄ちゃんが近づいてきます。

「大丈夫か!？」

「大丈夫。ちょっとクラッとしただけ…」

でもこれで任務完了……………かと思ったら…。

「近づくな!」

声の方を見れば藍紗ちゃんが

ベレッタの人質として捕まってるのが見えた。

「近づきゃあこいつの命はねえぞ!」

斧をちらつかせるベレッタが言う。

藍紗ちゃんはまだ気を失っている。

「ちっ、すっかり忘れてたぜ。」

まだ抵抗する気か…」

「……………」

どうしようか。

ここまで危険にさらされているという事は…殺せという事？

「仕方ないね。」

藍紗ちゃんを…殺す」

「本気か!？」

「IPDが発症したから大鐘堂が嗅ぎつけて来るかもしれない。

来るとすればもうすぐ。

そうなれば藍紗ちゃんが連れてかれる。

それなら殺してあげるしかないよ。

元々…約束…したしね」

（エレベーター内）

「ねえ祢音…頼みがあるんだけど…」

「何…？」

「もし…私がIPDを発症したら祢音が私を殺して」

「え！？そんな事…！」

「もし蒼紗が見つからないうえに

IPDまで発症したら私は死ぬしかない。

大鐘堂に捕まったところを蒼紗には見せたくないしね。

ね…お願い…」

「……………わかった」

くスラムく

わたしは銃を構える。

こんな事になるとは思ってなかった。

でも大丈夫。

あんなヤツに藍紗ちゃんを殺させはしない。

できればなんとかしてあげたかったけど、

藍紗ちゃんが死ぬ事を望んでるなら…。

「あんたを狙うわけじゃないんだから、邪魔しないでよ?」

一瞬で終わらせてあげる。

ダン

一発で脳天を貫かれた藍紗ちゃん。

人質が意味を失った事で慌てるベレッタの右腕に

お兄ちゃんが剣を突き刺した。

「ぐうう…」

腕の中を行き来する剣の痛みに耐えるベレッタ。

その間にわたしの魔法の紐で縛り上げる。

「もう1人、ダッジはどこにいるの?」

「知らねえよ!」

この世界に着いた時にはオレ1人だったんだ」

「……………2人とも、本部からの新しい情報。」

ダッジはこの世界のことは別の場所にいるそうよ」

「だったらさっさと行くぞ！」

「無理よ。」

ここは3本の塔それぞれにへばりつくように大陸が浮かぶ世界。

大地はなく、雲海が広がっててそこを通っていくのは無理。

3つの塔が直接繋がる場所はないし、転移しようにも行った事のない場所だから無理。

まあ本部の転移装置を使えば別だけど。

それに奏が行くらしいから問題ないわよ」

「奏ちゃん1人で!？」

「レミアが誰か連れて行くように言ったから大丈夫よ」

「そう……………じゃあわたしたちは帰ろうか」

わたしたちは藍紗ちゃんの亡骸を残してこの世界を去った。

第38話 「I. P. D.」 (後書き)

感想等お待ちしております。

第39話 「ヒロイン」 (前書き)

前話の続きであるにも関わらず、長らく時間を空けて申し訳ありません。

ホントにね、小説家になろうのページすら滅多に開かない状況です。

第39話 「ヒロイン」

＼奏SIDE＼

＼本部・長老の間＼

お姉様たちは任務に出て行って、

まだ戻ってきていないというのに私は任務を言い渡されました。

「もう1人…ですか」

「ええ。同じ世界に辿り着いたようですが場所が離れてしまったようです。

2人は次元を転移できるほどの魔力はなく、向こうの装置を使って転移した。

詳しく調べた所、そういう事がわかった、ということですよ」

まったく…迷惑な話です。

「というわけで奏、あなたの信頼する者

1名か2名連れて転移装置で転移してください」

「それは調律師でも…？」

「構いません」

「わかりました。では」

そして私は部屋を出た。

（廊下）

さて、どうしようか…。

信頼する者…。

「お、奏ちゃんはっけくん」

箱を持ったメデスがこちらへ歩いてきます。

「ケーキ買ってきたんだけど一緒に食わないか？

ん？ 祢音ちゃんと無月は？」

メデスは周りをキョロキョロ見渡します。

「任務です」

「で、珍しく1人居残りってわけか。

じゃあこいつどうしようか…。

無月はともかく柊音ちゃんがないってのはなあ」

1人でウンウン唸ってるメデス。

！

信頼できるかどうかは別としてメデスは使える男。

訊いてみましょう。

「メデス。私、これから異世界で任務なんですがついて行ってくれないか？」

「マジか！？行く行く！」

内容も訊かず、任務帰りというのに即答で了承してくれました。

予想通りの返答です。

「2人でか！？」

メデスと2人。

少々危険な予感がしますが…他に誘う人なんていないですし。

「そうですね」

「いやっほおおう！！」

「では行きますよ」

「はいはい」

『異世界・アルトネリコ』

くホルスの翼・ネモく

「つと…」

「到着だな」

ここはお姉様たちが行っている塔とはまた別の塔の傍に浮かぶ大陸です。

「さて、どうやって探す？」

「人捜しの魔法は使えませんが訊き込みしかありませんね」

写真は持っています。

これを使えば相手にもわかりやすいです。

「この人、知りませんか？」

近くの店の人に訊き込みします。

「あー知ってるよ」

「！ 本当ですか？」

私が驚くと店の人は不思議な顔をして私を見ます。

「世間を騒がせた泥棒で、

昨日教会に捕まったばかりじゃないか」

「へー、で教会ってのはどこにあるんだ？」

メデスが話に割り込んできます。

「あそこに建物が見えるだろう？ あれさ」

指さす方向を見ると他の建物とは違った、まさしく教会と言える建物が見えます。

「ありがとうございます」

店の人にお礼を言って私たちは教会へ向かいました。

くエル・エレミア教会く

「教会、ですか…」

教会の定義は私たちの世界と同じのようです。

「教会に何か用ですか？」

1人の男性がこちらに気づき話しかけてきました。

「昨日捕まったこの人に会いたいんですけれど…」

「んー、私1人の判断では…。

ラードルフ司祭がいればいいんですが今はいないですし…。

夕方まで待ってもらえませんか？」

「そうですか。

わかりました。では夜に」

く教会前く

時間があきましたね。

「なら観光でもないか!？」

観光……暇潰しにはなりそうですね。

「いいですよ」

「よし！」

誰か案内してくれるヤツいねえかなあ…」

「必要ないです。2人で十分です」

「何！？2人きりがいい！？」

そうか…ようやくオレとデートしたくなったか」

「いえ、余計な人付き合いをしたくないだけです」

いつもながら勘違い甚だしいですね。

く通りく

あ、お店がありますね。

ちょっと行ってみましょうか。

「お、店行くのか？」

私がお店に向かって歩き始めるとメデスもついてきます。

お店はちょっとした雑貨屋のようで、アクセサリーもいくらか置いてありました。

お姉様に何かお土産でも買っていきましようか…。

「どうどう？こんなんは？」

メデスの手には赤い毛糸玉。

「仲結いの糸だってさ。」

これでオレと奏ちゃんの絆がよりアップだな」

「いりません」

「まあまあ、オレとじゃなくても奏ちゃんの恋が成就するぞ？」

「必要ないです」

「なんで？縁起は担がないタイプか？」

「いえ、恋愛なんて興味ないですし、

私はメインヒロインではありませんから」

「へ？」

「お姉様や魅夜様の方がらしいですよ。」

脇役の私には恋が成就するどころか

私に恋させるほどの男性なんて出会えませんよ」

「んゝ奏ちゃんに恋させるなんてよっぽどこもなあ…。」

ああ、オレなら十分可能なんだけど」

「不可能です。」

そういうわけで興味ありません。

………これください」

出発前に渡された資金を使って白い花が飾られた髪留めを買いました。

お姉様はあまり髪をくくらない人ですけど、いいですよね？

そう思いながら髪留めをポケットに入れました。

ゝ通りゝ

「なあ…。」

今まで無言だったメデスがここで声をかけてきました。

「なんですか？」

「奏ちゃんの人生なんだから奏ちゃんがヒロインじゃねえのか？」

「別にヒロインが誰かなんて話はしてません。

性格の問題ですよ」

「オレは奏ちゃん好きだけどなあ」

「メデスは女性なら誰にでも言うでしょう？」

「まあね〜。

でも世界は広いしな。

きつと奏ちゃんが好きで、奏ちゃんも好きなヤツがどっかにいるだろ。

「だいいいですね」

「オレが無理なら無月はどうだ？」

「兄さん？ 兄さんは家族ですよ。

恋愛対象にはなりません」

「ふ〜ん。

ところで、奏ちゃんの好みのタイプは？」

「好みのタイプ…考えてみたこともなかったですね…。

まあ……好きになった人が好きなタイプということだ」

「そっか…」

「そろそろ、いい頃じゃないですか？

教会へ行きましょう」

第39話 「ヒロイン」 (後書き)

来週でアルトネリコ編を終了します。
現在状況や今後はその時に

第40話 「ほたる横丁」 (前書き)

えー1週間後じゃないじゃん、というツツコミはok
まあ長い間待たせたのにさらに待たせるのが嫌だったという半分建
前とさっさと終わらせたかったのが半分です

第40話 「ほたる横丁」

教会の前まで来てみましたが中が騒がしいです。

何かあったのでしょうか？

とりあえず入って私たちの用を済ませてしましましょう。

（教会）

「すいません。昼間に訪ねた者ですけど…」

すると30歳前後と思われる男性が、

頭をかいて申し訳なさそうに歩いてきます。

「ああ、すまない。」

話を聞くつもりだったんだが逃げられてしまったてな…。

やっかいな事にほたる横丁にいるようなんだ」

「ほたる横丁ですか…」

確か…この大陸の下の方に浮いている島だったはず…。

そして教会と対立している企業の天覇の本社があるとか。

「でしたら私たちが行きます。」

私たちなら関係ないですし、問題ありませんよね？」

「信用していいのか？」

「構いませんよ。捕まえるために来てますし」

「わかった。頼む。ほたる横丁まではこちらで送ろう」

「どうも」

く飛空挺く

「メデス、教会でもそうでしたけど、

女性ばかり見てないでちゃんと話に参加してください」

そのメデスは行き交うレーヴァテイルと思われる女性をじろじろと見ています。

「オレはサポートだからな、奏ちゃんが主に動いてくれ。

オレは忙しい」

はあ…。

私が動いた方が都合が良さそうですね。

ほたる横丁に着いたら…どうやって捜しましょうか…。

そんなに大きくない所なのですが…。

くほたる横丁く

「さて、どうやって捜すんだ？」

早くしないとまた逃げられちまうぞ？」

「問題ありませんよ。妖あやかを使いますから」

私は魔力で狼を5匹創り出しました。

半透明の、一般人には見えない狼です。

「この子たちを使って捜させます。」

魔力を感じ取って捜してくれれます。

魔力を持つ男性と教えてありますから見つけたら知らせてくれます。

行って」

私が言うと狼たちは散っていきます。

「魔力が切れるまで捜し続けることができます。

私の魔力も減ってしまっているのです、そのつもりでお願いします」

「わかった。

じゃオレたちも捜そうぜ」

「はい」

〽数十分後〽

ウオオoooooooooooo

私が創った狼の遠吠えが聞こえてきました。

これは見つかったという合図。

場所は…町から外れてる？

とにかく行ってみればわかることです。

「場所がわかりました。行きましょう」

「ほたる横丁・陸継鉄骨」

にぎやかな町を離れて、

私たちは建築の作業現場のような鉄骨地帯をカツカツ金属音を立てて歩いていきます。

ここなら人気も少ないですから隠れるには丁度いいと思います。

「こんな場所にいるのか」

「はい。いるはずです」

「パイプライン」

ここですね。

このパイプライン、ほたる横丁と塔を繋いでいるようですね。

ここを通れば飛空艇無しでも塔を通ってネモまで行けるわけですか。

と言っても、人通りは全くありませんが…。

……パイプラインですからね。

「いるんじゃないか？あの物陰」

メデスが指さす所にわずかな気配を感じます。

近づいた所に飛び出し、殺すつもりなんでしょうか。

「さっさと終わらせてしまいましょう。」

：そこにいるのはわかってます。出てきなさい」

でも標的は動こうとはしません。

じゃあこっちから動くしかないですね。

「メデスはそこで待っててください」

「オレの出番はあるのかあ？」

「ないです」

私は一気に距離を縮めます。

すると標的：ダッジは飛び出し、ナイフを突き出してきました。

予想していたので驚きもしませんし、避けるのも簡単です。

私は攻撃を避けるとみぞおちを蹴りました。

今回の任務は殺しじゃなくて逮捕。

どうなっても生きていればいいとは思いますが

どうせなら無傷で逮捕する。

お姉様と兄さんならやってのけるはず。

なら私も…。

蹴られたダッジはというと女性である私の蹴りにもかかわらず、

軽々吹っ飛ばされてしまいました。

その姿を見ると元々小柄な体がさらに細くなっているように感じます。

飲まず食わずで過ごしていたんでしょうか？

気力も限界…と言ったところでしょうか。

「ちっ、お前ら…とうとう嗅ぎつけてきやがったか。

ぼくを捕まえに来たんだろう？」

「そうです。大人しく捕まってもらいます」

「へっ…そう簡単に捕まってたまるかよ。

檻の中なんてゴメンだ。そうなるくらいなら…」

その時、何を思ったか、ダッジはパイプラインから飛び降りました。

「!？」

すぐに下を見ましたが雲海の中に消えていく姿を一瞬見ただけでした。

「…おい！追わなくていいのか!？」

「いえ、この雲海の中は非常に危険だということなので。

それに標的は魔法を使えないようですし、おそらく生きてないでしょう。

「…任務は失敗ですね。そうとわかったらさっさと帰りましょう」

足を傷つけておけばこういうことはなかったのかもしれない。

反省しつつ私たちは戻ることにしました。

第40話 「ほたる横丁」 (後書き)

戦闘無しなのはどう考えてもネタ切れ

第41話 「結果報告」 (前書き)

あとがきに重要なお知らせがあります

第41話 「結果報告」

く無月SIDEく

「あ、帰ってきたみたいだよ」

ロビーに向かい合って座る柊音の声を聞き、振り返ると奏だけがい
た。

「1人で行ってきたのか？」

「いえ、メデスが一緒でしたが任務も終わったのでどっか行かせま
した」

「ふくん。で、どうだった？ 任務は」

そう聞くと奏は一瞬顔を渋らせた（ように見えた）。

「失敗です。飛び降り自殺されてしまいました」

「そっかい。」

「…じゃあ報告に行くか」

く長老の間く

部屋に來るとすでに隊長がいて、画面にフェイトさんが映し出されている。

「お疲れ様、結果はもう聞いてるよ。

報酬はちゃんと送って――」

「すみませんが、私の分は引いてください。

任務は失敗しましたから」

生真面目なヤツだ。

もらえるもんはもらっておけばいいものを。

フェイトさんは少し驚き、ちょっと考える様子を見せて言った。

「じゃあ半分でどうかな？

逃げられたわけじゃないし、結果はこうでもちゃんと働いてくれたから」

「……………わかりました」

「ん。じゃあこれで全て終わりかな。

お疲れ様、また何か頼むかもしれないけど、その時はよろしく」

「わかりました」

しかし、意外にもすぐにその時は訪れるのだった……なんてな。

第41話 「結果報告」 (後書き)

まあ（ある意味も含めて）長きにわたってお送りしてきましたこのシリーズなんですが、そろそろ終わりにしようかと思ってます。

ネタも切れてきたし、考える時間もなくなってきましたのでそろそろかな、と。

終わる時はちゃんと完結状態にします。

なのはとの絡みがみたいというリクがありましたので最後にそれを書いて終わろうかと思っています。

ただ、時間がどれだけかかるかわかりません。

なのはに関してはやりきった感がありますので本当に長い間待たせることになるかと思います。

短いかもしれませんけどw

まあこう書いてきましたが実際どうなるかわかりません。

万が一なのは編書いている途中に書きたいネタが見つかるかもしれません。

その場合はちゃんとお知らせしたいと思います。

大事なお知らせ

これからの執筆についてです

おそらく次の話を投稿することはないでしょうということ。

つまり、引退します。

他にやりたい事もでき、執筆の優先順位が非常に低い状態にあります。

一応執筆途中ではあるのですがネタもうまく出てこないのです。

私が書き始める時まず最初に書きたい場面を作り、

その後どうやってその状況へもっていくかと考えていくのですが

どうもなのは編は前回のやりきった感があり、ネタがないのです。

一応このままの状態で放置しますが次の投稿はもうないかと思われる
ます

中途半端になり本当に申し訳ありません

第42話「誕生日」(前書き)

本当にお久しぶりですね。

それとも初めましてですか？

本当に久しぶりにアクセス解析してみると未だに読んでくださる方もいて

なんか嬉しくなったので投稿してみました。

第42話「誕生日」

＼水月学園＼

「今日は先帰ってて！」

今日の授業がすべて終わると奏を連れた柊音はそう言ってさっさと教室を出て行った。

こういうことは時々あったりする。

夕飯の買い物であったりすれば、

荷物持ち等にオレが駆り出されるから、まあ何かあるんだろうな。

オレはのんびりと帰り支度を整え、家に帰る事にした。

そうだ。今日はアレの発売日だっけか。

帰りに商店街に寄るか。

＼商店街・本屋＼

まあアレとはとあるマンガなわけだが、なかなかおもしろかったりする。

数か月に1度出るコミックを毎回楽しみにしながら本屋へ行っている。

さて、と…。

同日に発売されている他のコミックスも平積みされている、最新刊コーナーへ行く。

あつた…。

さっさと買って、家に帰って読むか。

無事買った事によって少し浮足立ったオレは本屋を出た所で

「兄さん…」

奏に出会った。

手には紙袋があるのがチラリと見えた。

「見ないでください」

だが店名を見る間もなくさっと後ろへ隠してしまう。

「何だそれ？」

覗きこもうとすると目を手で覆われた。

「兄さんには関係のないものです」

「隠す事ないだろ」

手をどこそうと手を握ると

「そんなに见たいんですか、兄さんのスケベ」

「っ…わかったよ」

そんな事を言われると引き下がるしかない。

まあ普段一緒に生活しているわけだから

今更そんなに気にすることは無いとは思うが

人の目がある外でこれ以上食い下がると世間的によろしくない。

「それでは私は本屋に用がありますので…」

視界が開けた時には目の前に奏の姿はなくなっていた。

なんなんだ…。

まあ買いたい物は買ったし、帰るか。

（商店街）

「げ、お兄ちゃん」

「『げ』とはなんだ」

今度は祢音に会った。

すぐに戻ったが、最初明らかに動揺した顔をしていた。

「な、何してんの？」

「いや、欲しい本があったから本屋にな」

「あ、そお…」

どうも2人してオレに会うのは都合が悪いようだ。

「……………じ、じゃあわたし行くね」

「おう」

ったく、2人してなんだってんだ。

く如月家く

「ただいまーっと」

「やあ！お兄ちゃん！お帰り！！」

ボタンと大きな音を立てて柵音が姿を現した。

「お、おう…」

オレが玄関の目の前にある階段を上がっていく間、

柵音はずっとリビングへのドアの前に立ち、ニコニコとオレを見ていた。

どうもリビングに入らせたくないようだな。

……………あ、そうか。

そこでオレは一つの結論が頭に浮かんだ。

今日だったな。

オレは呼ばれるまで静かに自分の部屋で過ごす事にした。

く無月の部屋く

「お兄ちゃん！ご飯だよー！」

耳元で怒鳴り声がし、体が揺さぶられる。

本を呼んでいたら寝ていたようだ。

それで寝ていたオレを祢音が起こしに来たようだ。

「っせえな！」

「わっ！」

振り向きながら怒鳴り返すと、祢音は少し飛び退く。

「だって、下から呼んでも起きないんだもん」

「そか…で、夕飯か」

「うん。下で待ってるからね」

「ああ」

返事をすると同時にドアを開ける音がした。

くリビング&ダイニングく

「おお…！」

テーブルにはいつもより豪華な料理が並べられている。

豪華というか、誕生日仕様だ。

「お兄ちゃん、誕生日おめでとう…！」

「お姉さま、誕生日おめでとうございます」

「ありがとな」

今日はオレと祢音の誕生日だ。

「ささ、座って座って」

いつもオレが座っているイスを引いて呼ぶ。

そんなわけで色々ごちそうになったし、ケーキも用意してくれた。

「ありがとな」

「ふふ、で？お兄ちゃんはプレゼント何くれるの？」

「え？」

反射的に言葉が出た。

「わたしからはこの料理。まあ奏ちゃんと共同だけど。

お兄ちゃん、商店街にプレゼント買いに行ったでしょ？」

「あ、いや…それはだな…」

「まさかお兄ちゃん何も用意してないの!？」

期待していたのか目を丸くして驚き、そして見るからに落胆した。

奏が怒りのこもった目でオレを見ている。

「か、奏は何買ったんだ!？」

「兄さんに教える義務はありません」

奏へ話を振るが、さらっとかわされた。

「お兄ちゃん!」

「ああ…すまん…。明日!明日買いに行って渡すから!」

「絶対だよ!」

「絶対だ!」

「よし!許す!んじゃ片づけよっか!」

「おう」

とまあそんなぐあい誕生パーティは終了した。

もちろん翌日にはちゃんと髪留めをプレゼントした。

女物の小物を選ぶセンスはないと思っていたし、

あまり髪をまとめたりすることのない祢音だからどうかと思ったが、

さっそくつけてくれて、喜んでくれた。なによりだ。

第42話「誕生日」(後書き)

まあなんかあんまり練られてない感がありますね…。
そもそもタイトルでネタバレしちゃってますけどね。

どれだけの久しぶり、初めましての方が読んでくださるのでしょ
うね。

楽しみです。

次の投稿はいつになるのか、もしかしてこれで最後なのか。
わかりませんがまた思い出すような感じで今までの作品も読んで
いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3478d/>

終わりなき遊戯曲

2010年10月8日13時12分発行